569

569-61

1200501517093

299

絶本

世界大衆文學全集

ヴェンデッタ

千葉龜雄

改造社

昭和六年 市川 十一

私。たじ映が姿いしはまいの友親と妻愛、に眼の私るめ進を歩に闇下木の響素白
の唇からは苦痛の呻き似た呪ひが飛び出し た。（九二頁參照）

Marie Corelli.

上段　著者とサイン
下段　譯者

序

169-61

イギリス十九世紀末の大衆文壇が、優秀な大衆文學作家を多く生み出した賑はかさは、どの國も及び得なかつた。その多數の男性大衆作家以上にも、女性大衆文學、ことに三人の女性作家が、すつかり男性の人氣をさらつたのは奇觀であつた。三人とは、ウイダと、メリ・エリザベス・ブラッドン。それに「ヴェンデッタ」の作家マリイ・コレリ。三人の中でも、斷然コレリが女王を占める。

マリイ・コレリは、一八六四年に、伊太利の父と、蘇格蘭人の母の間に生れて、幼女時代に、チャアルズ・マッケイの養女となつた。民謠作家でジャアナリストであつたマッケイの職業が、幼女である彼女に強い刺激を與へたらしい。彼女はその後、音樂で身を立てるために、フランスの尼寺に送られ、數種の作曲をして見たが、詩集を出し、續いて二十二歳での處女作 "Romance of two Worlds" が出ると、一躍して押しも押されもせぬ大衆作家の最高峯となつた。書店からは同型の作物を作つてくれとの註文が素晴しく來る。それからは絶大な精力を揮つて、毎年のやうに作物を出した。"The Mighty Atom" (1890) "Wormwood" (1890) The Master Christian" (1900) "The Sorrows of Satan" (1895) 等は中でも評判な諸作が、科學の世界である現代と、宗教との衝突や、調和を主題としたのがこれ等の作物で、大した破壞的な調子を帶びずに宗教の缺點を面白く小説で取扱ふ手際

が、特色として評判になつた、それは、社會、道德、宗教、權力の立場へ移したのが、"empor d low:" (1902) で、これが彼女のその方面の傑作と見られる。

"Vendetta" は處女作「兩世界物語」と同年に出たが、彼女らしい唯一の傑作はむしろこの方にある。「ヴェンデッタ」は伊太利だけにある特色なる復讐の方法で、個人と個人との果し合でない。一族と一族が、一人でも殘るかぎり殺し合ふのが「ヴェンデッタ」である。日本でいへば、「淨瑠璃坂仇討」、メリメの「コロンバ」。コレリの「ヴェンデッタ」は、さう言つた復讐ではない。たゞ、この作物の主人公の持つた、殘忍で悽慘な方法は、「ヴェンデッタ」の魂斷じてそのものだ。コレリの血液には、伊太利人の父のそれがある。「新巖窟王」ともいふべき「ヴェンデッタ」が、コレリ特異の創造的な脚色と、大膽で、勇敢で、煽動的な舞臺を作り上げた最高の作物をして、今でもそゝるやうに貪り讀まされてゐるのはそれだ。專門批評家の批評が、好ましくないとて、新刊書を一部も雜誌社や、新聞社へ送らない强氣な彼女であつても、ヴィクトリヤ女皇は、誰の作物よりも、彼女のを唯一に愛讀した。彼女のポピュラリティはむしろ世界的驚異であつた。

彼女は晩年に、沙翁の棲地ストラットフォルト・オン・アヴォンに棲んで大戰後の一九二四年に死んだ。が藝術的と大衆的な違ひはあれ、沙翁のやうに多く讀まれるからといふ驕りからではまさか無からうが。

昭和六年三月九日

千葉龜雄

ヴェンデッタ

帝國圖書館藏

ヴエンデツタ

第一章

これを書いてゐる私といふ男、死人である——法律上でも死んでゐる、確たる證據のある死人、死んで埋葬されてゐる男なのである。

私の生れ故郷の村へやつて來て聞いて見給へ、誰か村の人が教へて呉れる——あの男ですか、あれは一八八四年ナポリに流行つたコレラで死にましてね、今は先祖代々の墓所で黴だらけになつて眠つてますよ……と。

それだのに今でも……私は生きてゐるんだ。血管の間を、三十男の溫かい血が驅け廻つてゐるのが分る——まだ〳〵男盛りの元氣な私のこと、眼の光だつて鋭い、ギラ〳〵してゐる。筋肉は鐵も同然——グツト物を掴む手の强さ、スンナリした立派な容子のい〻身體つき。

さうだ、死んだなんていはれてゐるが、私は生きてゐるんだ。溢れるばかりの若々しさ——それに、いろんな悲しみを味つたこの身體ではあるが、たつた一つのものを除いては、昔と大して變つてはゐない。一つといふは髮の毛である、昔は黑檀のやうに黑かつたのが、今ではアルプスの雪といつ

た風に白くなつてゐる。でも房々した捲き毛だけは相變らず濃い。

「體質遺傳ですかな？」と、私の白髮を見て尋ねた醫者があつた。するとまた一人は、「突然の衝動からでせう？」中には、「激しい高熱に當つたゝめですかな？」と聞く。

私は別に返事をしておかなかつた。が、たゞ一度だけは譯を話したことがある。それは偶然に會つた人で、大變親切な、名醫の評判の高い男であつた。私の話をしまひまで聞いてくれたが、大分意外で、信じられないといつた顏つきをしてゐた。擧句には、「氣が變になつたんぢやありませんか？」なんていふので、それ以來私は人に話さないことに決めた。

だが、今それを書いてゐる。もう私を苦めるものもない——少しも恐れずに本當のことが書ける。しようと思へばペンを身體の血に浸すことだつて出來るんだ、文句をいふものがないんだから。私の周圍はひつそりとした廣い綠の南アメリカにあるやうな森林で——殘酷な人類文明の足跡に荒されてゐる處女のやうな自然の莊嚴な沈默——完全に靜かな天國、それがたゞ鳥の小さな羽音、唄で柔しく亂されてゐるだけで、時には、天上から湧き起る風の靜かな、もしくは急調な囁きで破られるだけである。かうして私の住むこの附近は安らかな樂園で——こゝで自分の疲れきつた心臟、お酒が一杯に入つた盃のやうな心臟を、高々と捧げて、その中の最後の苦惱の一滴さへも餘さずに地上にぶちまけるのである。すれば、私の來し方も諸者におわかりになることだらう。

死んでゐる、しかも生きてゐるつて！　そんなことがあるかね？　かう貴方がたは、あゝ、私の友

達は尋ねるだらう。貴方がたが誰か親しい人を確實に葬つてしまはうと思つたら、火葬が一番である。他の方法だと後でどんなことが起るか知れないんだから。火葬が最良の方法、いや唯一の方法である。何しろ綺麗で、安全である。これには誰だつて不足はいへまい。實際の話、吾々に親しくしてゐる（或は親しく見せかけてきた）ものゝ死骸を、冷たい墓石の中に、又はもつと〳〵下の嫌に粘りつく濕つた土の中に埋めるなんてよりは、潔淨な火と空氣に任せた方が賢明である。ぐつと土の中へ入れば嫌なものだらけだ——汚い名の知れない、澤山のもの——長蟲——眼があつても見えず、役にたゝない羽を持つたねば〳〵した生物——毒氣の中から生れてくる生れぞこないで、不具な昆蟲——足のお優しい御婦人方よ、貴女がたなら見たゞけでヒステリーを起すであらう、いや、堂々たる男子でも、恐氣をふるはずにはゐられないほどの、いやらしい生物がゐるんだ。けれど、世間でいふ基督教埋葬の結果起る肉體的な恐怖はそのくらゐにしても、それに輪をかけて悪いことがあるんだ——恐ろしい心細さがそれだ。假りに吾々が親しいものゝ死骸を狹い頑丈な箱に納めて穴に埋めた後で——見せかけは悲しさうな喪服をつけて、無理にも優しい、お氣の毒だといふ顏を我慢して見せつけた後で——いゝですか、兎に角出來るだけの用心に用心を重ね、萬全を期した後で——その後で、手落があつたとしたらどんなものだらう？　死んで勿體ないと思はれるやうな人の死骸を託した牢屋の扉が吾々が考へてたほどにもピッタリと閉つてゐなかつたとしたら、どうだらう？　丈夫な筈の棺桶が狂人じみた、強い指で割かれたらどうでせう？　死んだと思つた友人が實際は死人でなくて、昔斬

のラザラスのやうに、突如、墓穴から現はれ出て舊交を新にしてくれと申しこんだとしたら、どんなものだらう？　その時になつて、今更のやうに昔式ではあるが火葬が、一番確實だつた、こりや失敗たつたと、殘念がつたもんだらうか？　特に吾々がその死人から金や寶と多大の遺産を殘されてゐた時にだ！　何故つて、吾々はみんな大謊つきだからね——本當に死者を悼むなんて殊勝な人は殆どないんだからね——心から優しく、篤く古人をしのぶなんて、そんな人は數へるほどしかないものだ、それなのに、死んだ人達にして見れば優しくして貰ひたいんだ、吾々が考へてゐる以上にね。

偖て私の仕事の方に戻る。私——最近死んだファビオ・ロマニといふのが本名だ——はこれから短かつた一年間の出來事を書いて行かうと思ふ。短い一年といつても、その中にそれまでの生涯の長い、苦しい時代のことがみんな含まれてゐるのである。短い一年！　——時といふ劍の鋭い一突きにも比すべき一年！　その一年が私の心臟を貫いた——未だに傷口が開いてゐて、血が流れ出てゐる、一滴々々、落ちるたびに汚くよごれて行くのである。

多くの人に有勝ちな苦勞、貧乏といふもの、これは私にはなかつた。金持の家に生れたもんで。お父さんのフィリッポ・ロマニ伯爵がたつた一人の私を殘して死んだのが、私の十七歳の時。かうして迹微もない巨萬の富を受け繼ぐことになつた。多くの開けつ放しな友達の中には、平生の親切から、今に君の將來にはひどく不幸なことがあるなんて、占ひめいたことをいふ人もあつた。いや、その中には、屹度不吉な、精神身體兩方ともの墮落があるといふ人もあつた。みんな尊敬すべき人柄の友

人であつた。みんな立派な縁者を持つた人々で、輕々しくものをいふやうな人間ではなかつた。かうして、一頃の私は、みんなの心配の的となつたもんだ。で、その連中の考へに從ふと、何でも私は博奕をやる、金錢を無駄に使ふ、大酒は呑む、いやどうも箸にも棒にもかゝらないやくざものになるのが運命だといふのだ。が、不思議にも、そんなものにはならずに濟んだ。成程、ナポリ人といへば、熱しやすく、血氣にはやるといふのが普通だが、私は生れつき、下らない連中のやる不德とか、いやしい慾望とかを輕蔑する癖があつた。博奕なんて馬鹿げきつてる、酒は健康と理性を臺なしにするもの、だらしない、金使ひは貧乏人を侮辱するもんだ。私には私の生活がある――質素と贅澤の中道を行けばいゝ――家庭的平和と華やかな社交生活を適度にまぜればいゝ――智識人として適當な生活、頭を疲らせることも、身體を壞すこともない生活を私は選んだんだ。

私は父の屋敷に住んでゐた――まがひの宮殿ともいつた風な大理石造りの家で、ナポリ灣をはるかに見下す木立ちの多い高臺に立つてゐるのだ。

私の庭には、香の良いオレンヂや、桃金孃の茂みが澤山あつて、其處では何百といふ夜鶯が調子の高い聲で、黄金色の月に向つて愛のメロディを奏でる。澤山の面白い意匠で刻つてある大きな石盤の中を泉水がキラ〳〵と上つたり落ちたりして、その冷たい飛沫がむし暑い夏のヂント靜まりかへつた空氣を新鮮にしてゐる。こゝへ引き移つて以來の長い年月を、幸福に靜かに暮して來た。本と繪に取りかこまれ、友人も足しげく訪ねて來た――みんな若い人たちで、多少の差こそあれ、殆ど私と

同じ趣味を持つてゐたし、古典の價値を鑑賞する能力も具つてをり、極上の葡萄酒の香を嗅ぎわけることの出來る青年たちだつた。

女はといふと、私は殆ど見ないといつて良いくらゐだつた、女が嫌ひな性分だつた。よく年頃の娘を持つた親達が私を自宅に招いて呉れるが、大概の場合斷つて來た。私の澤山の立派な本が、女との交はりに就いて警告を與へて呉れたのだつた――そして私はその警告を信じまた承認した。かういつた私の性質は、どちらかといへば女好みの友達の間で馬鹿にされてた。みんなはこれを私の「弱點」だとからかつたが、私は何とも思つてゐなかつた。戀愛を信じるくらゐなら友情の方がずつといゝと考へてゐた。中に一人の友達があつて、その時分の私はその人のためなら喜んで生命を投げ出しても いゝと考へてゐたくらゐ立派な男だつたが、その友人が私の心をすつかり捉へてしまつた。名前をギドー・フェラリといふ。彼もまたみんなと一緒になつて、人のいゝ冗談口をたゝきながら、私の女嫌ひを攻撃したものだつた。

「仕樣がないな、ファビオ君！」よく彼は言つたものだ。「人生を味はふなんて、二つの薔薇色の唇から戀の甘酒を吸つたものでなければ言へないこつた――娘さんの底の知れない眼の中を覗き込んで、そこに何らかの輝きを發見するまでは、あの天上の星の謎を解くことは出來ない――内氣な娘さんの腰に兩腕を回して、君の胸にもたれた娘さんの情熱的な心臟の音を聞かない限り、喜びといふものはわからないのだ！　暫く、君のあのどつさりある本とおさらばをするこつたね！　實際、昔の愚

癪つぽい哲學者連ときたら自分の中に「男性」なんて持つてなかつたんだからね――あの連中の血は水だつたのだ――女に向つて種々と悪口をいふが、それはみんな自分たちが女にもてないために失望して吐き散らした不平だつたのだ。人生の最上の獲物を取逃したそんな連中は、女なんて相手にする價値なしと、他人に說き伏せて喜んでゐるんだ。ねえ、男だよ！　君は頭の働きもいゝし、色つぽい眼をしてゐるし、愛嬌があるし、身體だつてしなやかだし――その君に戀愛合戰に參加しようとする意思がないのかね？　ヴォルテールが盲目の神に向つてこんなことを言つたぢやないか、『お前さんがどんなに偉からうと、お前さんには先生が必要だ！』そんな風な意味のことをね。」

この友人がかう話した時にも私はにやりとしたゞけで何とも答へなかつた。彼の議論も結局私を說伏することは出來なかつた。けれども、彼の話を聞くのは大好きだつた――彼の聲は、鶫の聲のやうに氣持がよかつた――彼の眼は、どんな言葉より雄辯に輝いてゐた。私は彼が好きだつた――他の人がどう思はうと、私は自分を忘れて、忠實に、さうだ、恰度學校時代にお互が感じ合ふやうな實に優しい心づかひで彼を愛したのだつた。しかし、かういふ感情は大人の間では極く稀だ。彼と一緒にゐると本當に樂しかつた、また彼の方でも本當に嬉しさうに見えた。彼も私と同じやうに小さな時に兩親を失つたので、自分の好きな道を取つて獨立の生活を營まねばならなかつたのである。そこで藝術を職業として立派な畫家となつて成功したが、私に金があるのに引きかへ、彼は極く貧乏であつた。私はこの彼の不幸を充分な優しさと思ひ遣りをもつていろんな點で慰めてやつた。そして彼に怪しま

れたり、彼の自尊心を傷つけることなしに、出來るだけ盡力して繪の註文を取つてやつた。實際、彼は私にとつては堪らない魅力であつた。趣味も殆ど一致してゐるし、事毎に共鳴し合つた。彼の信用と友情がありさへすれば他に何にも要らなかつた。

この世の中では、どんなに罪のない人でも、永久に幸福であるといふわけにはゆかない。氣まぐれな運命はぢつと落着いてゐるのを許さないのだ。實際、取るに足らないちつぽけなこと――一寸した眼つき、たつた一言、無意味な動作、あゝそれが長い長い交際を割いてしまふのだ。深く長く續くだらうと最初思はれてゐたお互の靜かな氣持が遂には破壞してしまふのだ。お多分に洩れずこの私がさうだつた。今でもあり〳〵と覺えてゐるが、ある日――一八八一年の五月末頃のあるむし暑い晩のこと、ナポリでの話だつた。その午後、私は自分のヨットに乘つて少しばかりの風を利用して、ナポリ灣をゆつくりと滑つてゐた。ギドーがゐなかつたので（彼は數週間ローマに行つてゐた）それが何となく淋しい思ひをさせた。輕快なヨットが港を滑つてゆくにつれて、もの思ひに、何とも不可解な氣持に打ち沈んでいく私であつた。ヨットが陸に着くと、乘り込んでゐた數名の船乘りは忽ち右と左に立ち去つた――銘々好きな遊び場に行つたのだ――けれども私は呑氣にはしやぐなんていふ氣持にはなれなかつた。町には隨分と知合ひがある私ではあつたが、といつて、町の遊び場に出かけて行くやうな氣持は全然なかつた。この足で早速岡の上の自分の家に歸つたものだらうかどうだらうかと考へながら、ある目抜きの大通りをぶら〳〵と歩いて行くうちに、何かの歌聲を耳にした。ずつと遠くに白い

服を着た一團のものゝ姿がチラリと見えた。恰度聖母マリヤの日だつたので私は直ぐにも、聖母祭の行列が近づいて來るんだなと考へた。さう氣乘りはしなかつたが、好氣心が手傳つてそこに立つたまま待つてゐた。歌聲がだん〳〵と近くなつてくる——坊主、小坊主、香氣を四邊に撒き散らしながら搖れてゐる香爐、キラ〳〵する蠟燭、男の子や女の子の眞白なヴェールそれから突然私の眼の前で、繪のやうに美しい光景が渦卷く光と色の中で踊り出したのである。その中から急に一つの顏——琥珀色の髮の毛の雲の中から星のやうに輝き出した一つの顏——薔薇色の子供のやうなあどけない顏——そのあどけなさが、大きく夜のやうに黑い二つの輝かしい眼に照し出されてゐる——可愛らしいキリツトした口もとがそゝるやうに、うつとりとさせるやうに微笑む顏！　私はすつかりぼんやりして幾度も幾度もその顏を眺め返した。美は總ての人間をかうも愚にするものか！　女だ……私が疑ひ、遠ざけてゐた女達のうちの一人だ——娘盛りの春を迎へたばかりの女、せい〳〵十五か十六の娘さんだつた。彼女は故意か偶然か冠つてゐたヴェールを落した。そして私は實に短い瞬間ではあつたが、彼女の心を蕩ろかすやうな眼つき、魔女のやうな微笑に醉ひしれたのであつた。行列は過ぎて行く……幻が消える……しかしその瞬間に私の生涯の一時代が永久に消えて、別な生涯が始まつたのだ！

勿論私は彼女と結婚した。吾々ナポリ人はかういふことはてつとり早い。私達は思慮深くない。血

が性急に身體中をかけ廻つてゐるのだ——酒のやうに、又は日光のやうに暖かい、だから、態々刺戟を必要としないのである。愛する、望む、そして手に入れる、偖てそれから？　偖きるだらうと諸君は言ふかも知れない。南方人は移り氣だから。ところがそれはとんだ見當違ひだ——諸君が思つてゐるほど倦きつぽくない。英國人は倦きないといふのか？　肥つた內儀さんと、いや增しに增えてゆく「ホーム、スウィトホーム」の爐邊の部屋隅に坐つて、時々は心の中に倦怠を覺えないだらうか？　いや、覺えるとも！　たゞ用心深い連中だから口に出さないだけだ。

こゝで求婚時代の話をしたところで何にもならない——立派に唄つて貰つた歌のやうに、短く、そして嬉しかつた。邪魔になるものはなかつた。私の相手の娘といふのは、實に、手のつけられない、博奕をやつて糊口を凌いでゐた一フローレンス貴族の一人娘である。その貴族は自分の子供を、規律が嚴しいので有名な尼寺で養育した——だから彼女は全くの世間知らずだ。彼は、目に一つぱい涙を溜めて私に保證したが、娘は「聖母マリヤの祭壇に捧げた花のやうに純眞で」あるさうな。私はその言葉を信じた——こんな可愛らしい、若い、大人しい娘がどうして世の中の惡を知つてゐやうか？　私は自分の眼につけて得意になるために、どうかしてそんなにも美しい百合の花を手に入れたいものだと實に熱心に賴んだものだ——その甲斐があつて父親は心から喜んで私に娘をくれた。勿論、心の中では、持參金もない自分の娘が一躍して金持になることを喜んでゐたのだが。

私たちが結婚したのは六月の終りで、結婚式の時には、あの綺麗な、立派なギドー・フェラリが花

嫁を視つてくれた。

「バッカス神の身體にかけて！」と式が終つた時に私に言ふのであつた、到頭僕の教訓が効を奏した れ、ファビオ君！　むつゝりした盗人は時によると一番こすいものだよ！　君はヴィーナスの箱の中 から一番立派な寶石を盗んだわけだ――兩シシリーに竝ぶものない綺麗な娘さんを手に入れたんだか らね！」

彼の手をギュット握つてゐるうちに、ある氣の毒さが心の中に湧いてきた。何故つて、もうギドー は私の愛情の主位を占めてゐるわけにはゆかなくなつたのだから。殆んど後悔に似た氣持を味つた ――あの結婚式の朝、私は昔のことを回顧つて考へてゐた――ついこの間だと思つてたことも今はと うの昔になつたのだ――萬事終つたのかと思ふと、情ない嘆息をつく私であつた。妻のニーナの方を チラッと盗み見た。申し分なしだ！　その美しさは私の目を眩ませて、心を奪ふほどであつた。彼女 の大きな澄んだ眼を見てゐると、私の血管はものうく融けて行くやうにみえた――彼女以外のことは すつかり忘れてしまつた。恍惚とした感情の絶頂に登りつめてゐた。愛、只愛だけが造化の基調なの だ。歡喜の絶頂に觸れることが出來るのだ――その日〳〵の生活は、神仙國のお祭り騒ぎのやうに過 ぎ、夜は夜で狂氣の夢を見る。私は少しも疲れなかつた。妻の美に惱まされることもなかつた。彼女 は日増しに綺麗になるばかりだつた。いつも素晴しい魅力を持つてゐた、そして近々數ヶ月の中に私 の心の底の底まで見拔いてしまつた。彼女のある美しい顏付が私を彼女の傍に引き寄せ、唯々諾々と

女の命令に從ふ奴隷にしてしまつた。女はその力で私の弱點を見拔いた。みんな知つてしまつたのだ ――彼女にわからないことがあつたゞらうか？　今でも私はそれらの愚しい昔を思ひ出して惱ましく なるのだ。二十歳を越した男ならば誰でもいくらかは女の奸策を知つてしまふ――美しいだけで、惡 戲好きな取るに足らない女の力が、どんな強い英雄からも意思と力とを吸ひ出してしまふのだ。彼女 は私を愛してゐたか？　あゝ、愛してゐたと私は思ふのだ！　昔のことを回顧してみれば、確に愛し てゐたと公言出來る。

何故つて、千人の妻のうち九百人は、その夫を愛するものだ――それは彼女等が自分の欲しいと思 つてゐるものを手に入れるためだからだ。私は彼女のために何も惜まなかつた。實際は、平々凡々な 女に過ぎない彼女を、假に私が非常に尊敬して天子の位置を與へるとしたところで、それは私の愚し さを裏書はするものゝ、斷じて彼女の罪ではない。

私たちの家はよくお客をした。私の屋敷はナポリの町の內外を問はず、最上の社交界の主な人たち が集る場所だつた。私の妻は何處へ行つても評判だつた。彼女の美しい顏と、優しい物腰とは近所中 での好話題となつた。私の友人のギドー・フェラリも聲を大きくして彼女を稱讚する一人であつた。 そして、彼が妻に向つて示す慇懃な心づくしは、また私にとつても嬉しいものだつた。私は彼を兄弟 のやうに信じた。氣のむいた時に來てはまたブラリと歸つて行く。その度に花束や、彼女の趣味に合 ふやうな風變りな物をもつて來て、まるで父親が娘に對するやうな細い親切で彼女をいたはつた。

私は自分の幸福を完全なものだと考へた――愛がある、金がある、美しい友情がある、これ以上何を望まう？

しかも、もう一滴の甘い蜜が私の盃の中に落ちてきたのであつた。一八八二年の五月一日の朝、子供が産れた。女の子で、その美さは、恰度その時、私の家のぐるりの森の中に澤山に咲いてゐた眞白いアネモネの花のやうだつた。その小さな赤子を私の所につれて來たのは、蔭の多いヴェランダで私とギドーが朝食をとつていた時だ――柔かなカシミヤと古いレースにくるまつた小さな、殆んど形がないといつてもいゝくらゐの塊りだつた。私はその壞れさうな身體を注意しながら腕に抱きとつた。赤子が目を開けた。ニーナのやうに大きく、黑い眼だつた。しかもその澄んだ眼の底に、空の光が浮んでゐるやうに見えた。私はその小さな顏に接吻した、ギドーも接吻した。すると、その澄んだ靜かな眼が不思議さうに、もの問ひたげに、眞面目に私たちを眺めるのであつた。素馨の頭に止つてゐた一匹の鳥が突然低く美しく唄ひ出した、優しい風が吹いて私たちの足もとに生へてゐた白い薔薇の花を散らした。私は子供を傍にゐた乳母に返へすと、にこ〳〵しながら「妻に言つて呉れ、お前の五月の花を嬉しく思ふとね。」

ギドーは乳母が行つてしまふと私の肩に手を置いた。顏が眞青だ。

「君は本當にいゝ人だ、ファビオ君。」と突然言ふのだ。

「本當かね、どうしてだね？」と、私は笑ひながら尋ねた。「僕は他の人とちつともちがひはしないのに。」

「君は世間の人達よりずつと疑ぐり深くない。」と彼は答へて、私の方から向きを變へて、ヴェランダの柱から俯ひ下つてゐた女萎の小枝をいぢくつてゐた。

私は喫驚して彼を眺めた。「それはどういふ譯かね、君？　誰も疑ふ人はないぢやないか？」

彼は笑つた、そして、朝飯のテーブルの席に戻つて來て、「何、ないつて！」ぶつきら棒に答へてから「しかしだね、ナポリの空氣は疑念で滲み込んでゐるのだ――正しからうと不正だらうと、嫉妬の劍が今にも突きかゝらうと手具脛引いて待つてゐるのだ――子供たちでさへなか〳〵惡ずれがしてゐる。懺悔者はその懺悔者よりもなほ惡い坊主に懺悔する、困つたことだね！　こんな社會では夫婦間の眞實なんていふものは道化芝居みたいなもんだ。」こゝで彼は一寸默つたがまた續けて、「だから君のやうな人がゐるなんて實に不思議だよ、ファビオ君。すつかり人を信じきつて、家庭の情愛に幸福を感じてゐる人なんて。」

「だつて、少しも疑ぐるやうな理由がないもの。ニーナは今日産れたあの赤子のやうに無邪氣だし。」

「本當だ！」とフェラリが叫んだ。「實際本當だ！」とにや〳〵しながら、私の眼の中をぢつと覗きこんだ。「モンブランの頂の汚のない雪のやうに眞白だ――瑕のないダイヤモンドよりも綺麗だ――一番遠い天に輝いてゐる星にもまして高潔だ！　さうぢやないか？」

私はいくらか重々しげに、さうだといつた。彼の態度に何か私を惱しくしたものがあつた。しか

し、話は直きに他の話題に移つて、そのことはもう忘れてしまつた。しかし、時がきた――しかも早く――彼がいつた一言々々に思ひ當る節があると、氣がついた時が。

第二章

一八八四年のナポリの夏がどんなものであつたか誰でも知つてゐる。全國の新聞が物凄い記事を滿載してゐた。コレラが恐しい惡魔のやうに猖獗を極めた。その惡魔の一觸れに會ふと、老若を問はず多くの人々が街上に倒れて死ぬのであつた。この埃の中から產れ凡ゆる健康上の注意を無視して、殘忍さを極めた病氣は素晴しい速さで町を占領して行つた、しかもこの疫病よりもつと惡いのは、國中をあげての無茶苦茶な恐慌であつた。有名なワンベルト王の雄々しい行動は智識階級にこそ效果あれ、下賤なナポリ人の間には、恐れと、愚かな迷信と、自分本位な感情とが依然として勢力を持つてゐた。その例として或る事件を述べてみよう。ナポリのある立派な、評判のいゝ青年漁夫が、舟の中で働いてゐる中にコレラの第一徵候に見舞はれたのである。彼の體がその母親の家に運ばれた。すると見るからに惡ずれのしていさうなその老婆は、小さな行列が自分の家に近づいてきて病人を家の中に入れようとするのを見ると、忽に戸を閉めてみんなを入れさせなかつた。

「聖マドンナ樣！」と彼女は半分開けた窓から金切聲で喚いた。「あの子を町に棄てゝ下さい、あの

やくざな不幸者を！　あの恩知らずの豚野郎を！　彼奴は自分のせつせと働いてゐるお母さんに疫病を持つて來ようとするんです！　聖ジョセフ樣、子供なんて誰が要りませう！　彼奴を町に棄てゝ下さいますやうに！」こんな見下げ果てた女に立てついたところで何にもならない。だがその息子のために幸福なことには、その時彼は意識を失つてゐた。軈て彼の身體は摺つた揉んだの擧句にやつと母親の家の戸口に横たへられたが、それから間もなく息をひきとつて、死體はがらくた同然に墓掘りの手で運び去られた。町の暑さは酷いものだつた。空は赫々と燃えるやうに照り續き、ナポリ灣は、まるで、一枚のきらめく硝子の板だつた。ヴェスビヤス火山の噴火口から立ち上る細い煙が、眼にはそれとみえないが、町中を取り卷く焰の輪のやうに感じられた。夜も遲くならなければ鳥の唄聲も聞えず、またその時分になると私の家の庭の夜鶯が、半ば嬉しいやうな、半ば悲しいやうなメロディーを囀るのであつた。でも私の住んでゐた高臺は幾分涼しかつた。傳染病が私の家族を襲つては大變だと、出來るだけの注意をした。實際、傳染區域から大急ぎに逃げ出すことが、却つてその傳染病に接近して行くものだ、といふ事實を知らなかつたなら、或は全家族を纏めてそこから立ちのいたかも知れなかつたのだ。私の妻は、そんなに氣にしてはゐなかつた――彼女が非常に美しい女であるだけにこれは稀なことだと思ふ。女の極端な見榮は、疫病を追ひ拂ふのになか〳〵立派な楯である。それは、危險の一番重大な要素――恐怖――をうまく始末してしまふ。二つになる未だほんの赤ん坊のステラはどうかといふに、この子はなか〳〵丈夫な子であつたので、そのお母さんにしても私にし

ても少しも心配しなかつた。

ギドー・フェラリが私達のところにやつて來て滯在した。そして、よく實つた穀物畑を難ぎちらす鋭い鎌のやうなコレラが不潔なナポリ人を何百となく切り殺してゐる間、私達三人は、それに少數の召使を加へて決して町に行かないことゝし、食物をとつては、穀粉みたいなものと、蒸溜水だけで、きちん〳〵と湯に入り、早寢朝起きを守つたお蔭で、身體は至極健全であつた。

私の妻は種々と美點を持つてゐたが、なかでもその聲は美しく訓練が積んであつた。その唄ひ方が非常に巧妙で、晩方など小さなステラが寢所に入つたあとで、庭でギドーと私が煙草をふかしてゐると、よく彼女がその夜鶯のやうな調べで二人の耳を樂ませて呉れたものだ。みんな野趣に滿ちた熱情的な美を持つた、可笑味のある民謠であつたが、それを次から次へと唄ふのだ。するとそんな時には、よくギドーが彼女の伴奏をする——彼の聲量の豐かなバリトンが、彼女の美しい、はつきりとした聲とピタリと調子を合はせて、その見事さは瀧の音と小鳥の囀りとが一緒に聞えて來るやうであつた。今でもその二つの聲が聞えるやうな氣がする。二人の合唱のメロディーが嘲るやうに私の耳の周圍を廻つてゐるのだ。オレンヂの花のどつしりした香が桃金孃の香と混じて風に運ばれて匂つてくる。黄色な月が、燃えながら回轉し、濃い青空にかゝる、それはツーレの王の深海に投げ込まれた金の盃のやうである。私の眼の前に、二つの頭がもたれ合つてゐるのが見える。一人は金髪、一人は黒髪。私の妻と、私の友人——嘗てはこの私にとつて自分の生命よりも數千倍も大切であつた二人。

あゝ！　思へば樂しい日々であつた——夢中であつた時代は常に幸福である。私達は、自分達を夢から覺ましてくれる正直な人達に對しては、非常な感謝の念を覺えるのだ——そして若しそれが本當であつたら、さうした人達こそ眞の親友といへるであらう。

ナポリでは夏の中でも八月が一番恐ろしい月であつた。コレラが恐ろしい勢で蔓延し、人々は文字通り恐怖のどん底に投げ込まれた。中にはこれに公然と反抗するものもあつて、自ら非道德と不節制の眞唯中に飛び込むで結果がどうならうと構はないものがあつた。この狂氣じみた反抗の一つが、さる有名なカフェで起つた。非常に綺麗な八人の娘を伴つた八人の青年がやつて來た。特別室を借りると豪勢な食事を誂へた。その會合の終に當つて、中で一人の青年が酒盃を上げて、「コレラに成功あれ」とやつたものだ。その干杯に續いてみんなが大聲に喝采を送り、續いてみんな一緒に無我夢中で盃を干したものだ。すると、その夜になつて十六人の反抗者の一人々々が恐ろしい苦悶の中に死んでしまつた。そしてその死體は、例の如く薄つぺらな棺桶の中にたゝき込まれて臨時に大急ぎ掘られた穴の中に積み重ねるやうに埋られた。こんな嫌な話は毎日のやうに私達の耳の中に入つたが、しかし、私達には何の異狀も起らなかつた。ステラは疫病に對する生きたお守りも同然だつた。無邪氣なあどけなさ、お喋り。私達が彼女のために慰められたことは實に大きかつた、その上、彼女と一緒に居ると、精神も肉體も全く健全な感かするのだつた。

ある朝——燒けるやうに暑い八月のいつものやうなむん〳〵する朝であつたが、私は平生より早め

に起きた。どうやら涼しくなりさうなので、起き上ると早速庭の散歩を始めた。妻は私の傍でぐつすり寝てゐた。私は妻の睡を妨げまいとこつそり服を著た。その部屋を出るに當つて、どうしたわけかもう一度ふり返つて彼女の顔を眺めたのである。何んて綺麗だつたらう！　彼女は寝ながら笑つてゐるのだ！　ぢつと見つめてゐた私の心臓は、動悸をうち始めた。彼女が私のものになつてから三年經つてゐる――たゞ私一人のものだ！　時が經つにつれて彼女に對する私の熱情的な讃美と、愛しさの念は日増に募つて行くばかりであつた。私はばら〳〵になつて枕の上に日光のやうに輝いてゐる金髪の捲き毛を摑むと靜に接吻した。それから彼女の傍を去つた。

庭の小路をゆつくり歩いてゐると、微風が朝の挨拶をする――ほんの風の吐息といふほどで、木の葉をゆすぶる強さではなかつたが、潮の香を含んでゐて、暑い夜を過した私にとつては心よかつた。その頃私はプラトーの研究に熱中してゐたので、歩きながらも、私の心はあの偉大な哲人が提出した深淵な問題で一つぱいだつた。この深い、しかし愉快な思ひに沈んでゐた私は、思つたより遠くまで行つてしまつて、ヒヨイと見ると、いつの間にかある暫く使はれてなかつたある道を歩いてゐるのであつた――これは、下の港の方に續いてゐる曲りくねつた歩道である。涼しかつたので殆んど知らず知らずにこの道を歩いてゐるのであつた。その時私の眼に入つたのはアーチ型に聳え立つてゐる樹々の木の葉を通して輝いてゐる檣や白い帆であつた。で、もとに引き返さうとした時、突然起つたある物音にビクッとした。激しい苦痛を訴へる呻き聲であつた――何か酷く苦しんでゐる動物の咽喉から

らかすれ出る叫びであつた。私は早速その聲の方向に向つて歩を運んだが、私が見たのは草の上に俯伏しになつて倒れてゐる一人の少年である――年の頃十一、二の果物賣の少年である。その商賣の籠が彼の横に置いてあつた。美味しさうな桃、葡萄、ざくろ、甜瓜などが入つてゐた、みんなコレラの流行してゐるこの氣節には極めて危險な果物だ。私はその少年の肩に觸れた。

「どうしたんだね？」と私が尋ねると、身體をビク〳〵とさせて此方に顔を向けた――苦悶の餘り鉛色になつてゐたが、綺麗な顔であつた。

「疫病ですよ、旦那！」と少年が呻いた。

「疫病ですよ！　傍へよつちやいけません、後生ですから！　僕は死にかゝつてゐるんです。」

私は躊躇した。私自身は別にこはくない。しかし、妻が、子供がある。みんなのために用心しなければならない。さうかといつてこの可哀さうな少年を見殺しにするわけにはゆかなかつた。そこで、港に行つて醫者の力を借りよう、かう決心した。さう思つて私は元氣よく言つた。

「しつかりし給へ、君、力を落しては駄目だ！　病氣だからつて強ち疫病と限つたことではない。僕が歸つてくるまでぢつとしてゐたまへ、直ぐお醫者様を呼んでくるから。」

少年は訝るやうに私の顔を見上げて笑つて見せようとした。それから自分の咽喉を指して口をきかうと努力したが無駄であつた。

遂に彼は草の中にがつくりとなつて、慘々に傷を受けて追ひつめられた獸のやうに苦しげに藻掻

いた。私はそこを去ると大急ぎに歩き出した。猛烈に暑い波止場にくると、そこにぶら〳〵してゐる眞面目さうな男を二三人見かけたので、少年の容態を説明して、助けに來て呉れと頼んでみた、が、みんなは斷つた。一人として一緒に來てくれるものはない、金を出さうといつたが駄目だつた。その人間達の臆病さを罵りながら、今度は醫者を探しに急いだ。で、やつとのことで顏色の悪い一人のフランス人を見つけたのだが、私があの果物賣の少年の容態を述べたてると、さも嫌だといふ顏付きで聞き終つてから、頭を振つて斷つたのである。

「その子は死んだも同然だ。」とぶつきら棒にその男は答へた。「貧民院に行つた方がいゝでせう。あそこに行けば死體を受取つてくれますよ。」

「なんですつて？　貴方は救ふことが出來るのに救つてやらうとしないのですか？」すると、フランス人は皮肉たつぷりな慇懃さで頭を下げた。

「いや貴方、許して下さいよ！　コレラの死骸に一寸でも觸れやうものなら、此方の身體が臺なしになりますからね、では左樣なら！」

かういふと彼は私の面前でピシヤリと戸を閉めて中へ入つてしまつた。私はすつかり腹を立てた、通りは陽に燒けて、暑氣と、藥の惡臭で、今にも氣絶しさうな嫌な氣持ではあつたが、今はもう自分の身の危險も忘れてこの疫病に惱む町の中に立ち、今度はどうしても救助者を探さねばならないと考へてゐた。と、重々しい親切さうな聲が私の耳に聞えてきた。

「手が欲しいんですか、貴方？」

私は見上げた。脊の高い僧侶、頭巾がその靑白くはあるが、しかしきりゝつとした顏付を半分隱してゐた。——この人こそキリストを愛するが故に、この恐ろしい時に現れて疫病と勇敢に戰つてゐる多くの僧侶達の一人であつた。實際、信仰を持たない、やたらに聲の大きい法螺吹連は疫病のえの字を聞いても、吃驚した小兎のやうに逃げまどふ時分であつたのに。私は丁寧に僧侶に挨拶をして、私の用向きを聞かしてやつた。

「では早速參りませう。」かう言つた僧侶の聲には、幾分か同情が籠つてゐた。「萬一のことがあるといけません。こゝに藥を持つてゐます。多分間に合ふだらうと思ひますが。」

「私も御一緒に參りませう。」と私がせきこんで言つた。「縱令犬一匹だつて見殺しには出來ません。まして相手は頼る邊もなささうな可哀さうな子供です。」

途中も歩きながら僧侶はぢつと私の顏を見てゐたが、

「貴方はナポリにお住ひではないのですか。」と尋ねた。

私の名前を敎へてやると、彼は評判で知つてゐた。私は自分の屋敷の在場所も敎へた。

「あの高臺に居りますと、本當に健康です。私にはどうして町中が疫病で惱まされてゐるのが分りません。みんなが餘りに臆病だから疫病が流行るのです。」

「勿論ですとも、」彼の答は靜かであつた。「だが、貴方はどうなさらうと仰有るのですか？　町の人

のみんな享樂生活を好んでゐます。彼等の心には、享樂生活しかないのです。免かれ難い死がみんなは眞唯中に入つてくると、人々は暗い影に脅えた子供のやうになるのです。宗教さへも、」――こゝで彼は一寸深い嘆息を洩らして――「彼等には何の力もないのです。」

「ですが、坊さん、」と私は始めたが、何だか顳顬の邊がづぎ〳〵と痛くなつてきたので急に口を噤んだ。

「私は、」と彼が重々しく答へた。「神の下僕です、ですから疫病なんかは少しも恐れません。くだらない男ですが、神の御爲とあるならば、死さへ恐れない覺悟があります――いや、喜んで向つてゆくでせう。」

彼の言葉付きは、きつぱりとしてゐたが、少しも尊大ぶつたところがなかつた。私はいくらかの尊敬をこめて、ぢつと彼を見てゐた。そして何か言はうとした時に、急にぐら〳〵としたので、彼の腕に摑まつて、危く倒れるのを免れた。町が海に浮んだ舟のやうにゆれだした、空は青い火の輪となつて私の周圍に渦卷き始めた。さうした氣持がゆつくりと消えて行つた時、「どうしたのですか？」と尋ねる坊さんの聲が、なんだか遠くからでも聞えるやうに、ぼんやりと聞えた。私は無理に笑つて見せた。

「きつと暑さのためでせうよ」かう言つた私の聲には大分年をとつた人のやうに力がなかつた。

「ぐら〳〵として、氣絶しさうになつたんです。どうか私をこゝに置いて先にいらつして下さい――

あの少年をお賴みします。あゝ、困つた！」

この最後の言葉は全く苦しさの餘りに發した聲だつた。手足がもうどうにもならなくなり、拔身の刃を身體に突つとされたやうに、冷い、痛い苦痛のために思はずふら〳〵となつて歩道の上に倒れたのだつた。すると例の脊の高いがつしりとした僧侶は時を移さず私を引つぱつて半分は運ぶやうに、半分は案内するやうにしてある旅館らしい、下等な料理店みたいな家に引つぱり込んだ。入ると僧侶は私を木の椅子に、もたせかけて、よく知合ひらしいそこの亭主を呼んだ。可成り苦しかつたが氣はたしかだつたので、眼の前に起つたことは何でも見聞きすることが出來た。

「この方の面倒をみて上げて呉れ、ピエトロ――お金持のファビオ・ロマニ伯爵樣だ。貴方は苦しいからつて、氣をたしかに持つてゐなければなりませんぞ。私は一時間もしないうちに歸つて來ますからね。」

「ロマニ伯爵樣ですつて！　聖マドンナ樣、この方は疫病に罹つたに違ひありません！」

「何を馬鹿な！」僧侶の聲は激しかつた。「どうしてそんなことが分る？　日射病は疫病ではない。この臆病者め！　面倒をみて上げるんだぞ、さうでもしなかつたら聖ペテロ樣にお願ひ申して、お前が天國に入れないやうにさせてやるから！」

このおつかない言葉を聞くと、ぶる〳〵震へてゐた亭主はすつかり度を失つたやうな樣子になつて、言はれるまゝに、枕を持つてきて私の頭にあてがつた。また僧侶の方は、一つのコップに何かの

混合藥を盛つて私の脣に觸れさせた。私は一氣に飲み干してしまつた。

「靜かにしていらつしやい。」と今度は靜かな聲に改まつて、「この人たちは本當にいゝ人です。私は貴方のお賴みの子供のところへ急いで參りませう——一時間位でまたこゝへ歸つて來ます。」

私は、彼の腕を引つぱるやうにして、「こゝにゐて下さい、本當のことを教へて下さい。疫病ちやないでせうか？」と弱々しく尋ねた。

「そんなことはありませんとも！」と彼は同情するやうに答へて、「が、疫病だからつてそれが何でせう？　貴方は若く強い。そんなことは何でもないぢやありませんか。」

「何とも思つちやゐません。しかし、坊樣、たつた一言約束して下さい——私の病氣のことを妻に傳へないと誓つて下さい！　——氣を失つても、いや死んでも、私をあの屋敷につれて行かないと誓つて下さい！　私は貴方がそれを約束してくれるまでは安心出來ません。」

「喜んで誓ひませう。凡ゆる神聖なものに誓つて貴方の御希望に添ふやうに致します。」

私の愛してゐる者の安全がこれで保證されたので、すつかり安心すると、靜かに頭を下げて僧侶に感謝した。それ以上は身體の弱つてゐる私には出來なかつた。彼の姿が見えなくなると私の頭は不思議な混沌とした妄想の世界を放浪し始めた。どうかしてその妄想をはつきりさせようと苦しんだ。私の目には今私が横になつてゐる廣間の中がはつきりと見える、そこにあの憶病な亭主がゐる——彼はゴップや壜を磨いてゐたが、時々私の方に脅えた眼を投げる。人々が入口から顏をのぞかせる。そし

て私を見ると急いで逃げて行く。さういつたものが何でもみえる——私はどこに自分が居るのか分る——しかも私は、それと同時にアルプス山の嶮しい谷間を上つて行くのだ——足もとに冷たい雪が見える。無數の急流がすさまじい音を立てゝゐる——深紅の雲が眞白な氷河の頂きの上に放浪つてゐる——軈て、その雲が二つに割れて、そのキラ〳〵光つた眞只中に一つの笑つた顏が現はれた！

「ニーナだ！　愛しい私の妻、私の魂！」私は大聲に叫んだ。腕をのばした——彼女を摑んだ！

——何だ！　私を摑んだのは人のいゝ老耄の亭主ぢやないか！　私は猛烈に亭主の手からのがれようとあせつた。喘ぎながらも。

「馬鹿！」と私は彼の耳もとに叫んだ。

「私を妻のところにやつて呉れ——妻が接吻を求めてゐるのだ——放して呉れ！」

他の男がやつて來て私を押へた。二人は力づくで私を枕に乘せようとする二人の力が私を負かしてしまつた。すつかり疲れきつた私は力もなく段々と衰へて行くのだ。私はもう爭はなかつた。ピエトロともう一人の男が上から瞰下して、「死んだんだぞ！」とお互に囁きあつてゐるのが聞えた。私は微笑した。死んだんだつて？　私ぢやない！　燒けるやうな光線か旅館の開いた戸口から殺到してくる——咽喉の乾いた蠅が絕えずブン〳〵と飛廻つてゐる——歌聲が聞える。「アマルフィの運命」だ——その言葉が一つ〳〵はつきりと聞えるのだ。私のニーナ！　お前のやうな女はない！　ギドーがなんていつてたつけ？　「瑕のないダイヤモンドよりも綺麗だ——一番遠い天に輝いてゐる星にもま

して高潔だ！」例の愚なピエトロの奴は未だ酒壜を磨いてゐる。彼の人の良さゝうな圓い顔は、汗と埃で脂ぎつてゐる。だが、どういふわけでこゝにゐるのかさつぱり分らない。何故つて、今私がゐるのは、大きな棕櫚の木が生ひ茂り、鰐がぬくゝと日光浴をしながら寢てゐる熱帶地方のある河邊に立つてゐるのだから。鰐の顎がかつと開いてゐる——その小さな眼は綠色にギラついてゐる。一艘のボートが靜かに滑つてゐる。そのボートの中に一人の輕快な樣子をした印度人の立姿がみえる。彼の容貌が不思議にもギドーとよく似てゐる。彼は今やだんゝと此方に近づいてきて薄刃のキラゝする長刀を拔いた。勇敢な奴だ！　——彼はたつた一人であの蒸暑い岸邊に横たわつて彼を待ち構へてゐる鰐の眞只中に飛び込んで行くのだ。彼はひらりと岸に飛び移つた——私はその樣子を凄いやうな魅力にうたれて見守つてゐる。彼は鰐どもの側を通る——傍に鰐がゐるなんて全然氣がつかないらしい——大急ぎで、しかも落着いた足どりで私の方に歩いてくるのだ——彼が探してゐるのは私だ——あの刃を突き刺して生血もろとも引き出さうといふのは私の心臟だ。やられた！　一突き——二突き——三突き！　しかも私は死なゝいのだ！　私は藻掻いた——苦しさの餘り呻めいた。とその時何か黑いものが私ときらめく太陽の間にはさまつた——何か冷たい影のあるものが！　私は夢中になつてそれに飛びついた。二つの黑い目がぢつと私を見守つてゐる。そして聲が聞ふる。

「靜かになさい、靜かに、靜かに！　キリスト樣のために！」

それは最前の私のつれの僧侶であつた。私は嬉しくなつた。彼は先刻の至急の用向から歸つてきた

のだ。私は殆んど口がきけなかつたが、それでも例の少年のことに就いて尋ねた。すると僧侶は敬々しく十字を切つて、

「あの少年の魂がやすらかに睡れますやうに！　あの子は死んでゐましたよ。」

私はぼんやりではあつたが少からず驚いたやうな氣がする。死んだのか——あんなに早く！　さつぱり分らなかつた。それからまたも私は漠然とした空想の世界に入つていつた。ずつと先刻のことを思ひうかべてみても、それからの私がどうなつたか、特にはつきりと覺えてゐることはなかつた。ただ覺えてゐることは、自分が激しく苦しんだこと——文字通り身も世もあらぬほどに悶えたことだけだつた。そして、すつかり感覺を失つてゐた間中たゞ聞えて來たのは、聲のつまつた祈禱のやうな、歌聲のやうな悲しい物音だけであつた。それからまた神の榮光を讚め稱へる鐘の音も聞えた。しかし私の頭は刻一刻と前後も知らずに亂れていつて、何が何だかさつぱり分らなくなつた。餘りの苦しさに、「屋敷へは連れて行かないで！　いやだ、いやだ、彼處はいやだ！　連れてゆかないでくれ——私の命令を守らないものはひどい目に會はせてやるぞ！」と叫んだのを覺えてゐる。それから深い渦の中に引き込まれるやうな恐ろしい氣持を覺えてゐる。私はその渦の中から救ひを求むる手を傍に立つてゐる僧侶の方に伸ばした——ぼんやりと私の目の前で銀色の十字架が、ギラゝと光つてゐるのが見えた——そして到頭、救けて呉れと一聲叫びながら私の身體が沈んで行つた——深く、深く、眞暗な夜と、虛無の深淵へ！

第三章

それから長い間、沈默と暗黑が續いた。何か深い氣持のよい忘却と混沌の世界に落ち込んだやうな氣持だつた。未だに夢のやうな影が私の空想の世界に閃めく——初めのうちはその影がはつきりと摑めなかつたが、軈て物の形をとつてきた。奇妙な動物がチラ〳〵と廻りに飛びかふ。深い暗の中から淋しさうな目がみつめてゐる。空を摑んでゐる長い眞白な骨ばつた指が、ある時は私に警告を與へ、ある時は威喝する。それから——非常にゆつくりと私の視界にぼんやりと赤い雲、嵐の日のやうな夕陽が見える。そして血のやうな靄の眞中から大きな、眞黑な手が私の上に下りて來る。私の胸に飛びかゝつた。恐ろしい力で私の咽喉を絞めた。そして、鐵のやうな重さで私を押しつけた。私は猛烈に反抗した——叫ばうとした。けれども、その恐しい重さのために一言も聲を發することが出來なかつた。免れようと右に左に身體をねぢまげてみたが、大きな黑い手は私の身體中をしつかと押へてしまつた。けれども私は、その手の力に反抗していつまでも暴れることを止めなかつた——だん〳〵と私は殺されさうになる——だん〳〵と——さうだ！　やつと！　もう一度反抗した——勝つた！　私は目を覺ました！　お慈悲深い神樣！　私は何處にゐるのです？　何といふ恐ろしいところだ！　何といふ深い暗さだ！　次第〳〵々々に我に返つてくると、私は先刻の病氣のことを思ひ出してゐるのであつた——あの僧侶——あのピエトロといふ男——みんな何處へ行つたのだ？　あの人達は私に何をしたといふのだ。だん〳〵に自分が眞直に仰向けに寢てゐることが分つて來た——寢臺が迚も堅かつたんではないかしら？　どうして枕をもつて行つてしまつたんだらうか？　血管といふ血管がちく〳〵痛み出してきた——自分の手さへも妙に思へた——脈がちよい〳〵止まる。と思ふと激しく搏ち出す。が、私の呼吸を妨げてゐたのは何だつたらう？　空氣だ——空氣だ！　空氣が欲しい！　兩手をさし上げてみた——やツこれは何だ！　直ぐ上のある堅いものにぶつ突かつた。忽ちにして總てが分つた！　私は埋められてゐるのだ——しかも生埋めだ——この木の牢屋は棺桶に他ならなかつた。私は急に怒つた虎にも似た狂暴さを感じた——私は手と爪で咒はしいその板を叩いたり引掻いたりした——肩と腕とに力をこめて閉まつた蓋をこぢ開けようとした。が、その甲斐はない。怒りと、怖ろしいのとで、私の氣持はます〳〵激しく狂つて行くのであつた——どんな深みだつてこれに較べたら何でもない！　息がつまりさうだ——兩眼がつけ根からもぎとられたやうだつた——口と鼻から血が流れた——氷のやうな汗が額を流れる。苦しく喘ぎながらぢつとしてゐた。と急に、もう一度最後の努力をふるつて、苦しい目茶苦茶な力をふるつて、身體全體をその狹い牢屋の一方にぶつゝけた。ピシッ！　二つに裂けた！　——それからまたしても、新しい恐怖に襲はれて、ハア〳〵いひながら寢そべつてゐた。若し——若し私が土の中に埋められてゐるのなら、今こゝで棺を破つたところで何になる！　徒らに土を入れるだけだ——濕つた暖かい土、死人の骨で肥えた暖かい土——私の眼と

口に詰り、永久に私を沈默させてしまふ土を！　かう思ふと氣が氣でない。私の頭は氣が狂ひさうだ。私は笑つた――諸君考へてもみたまへ！　――私の笑ひは、恰度死にかゝつてゐる人の咽喉の中から最後の言葉がごろ〳〵聞えてくるやうに響いたのだ。恐しさでぼかんとしてしまつてはゐたが、もつと樂に息をすることは出來た――空氣があつたのだ。さうだ！　――どうしたわけか、空氣が入りこんで來た。ほつとして元氣が出た。兩手で今私が作つた穴を探し當てた。それから板を猛烈な勢ひでぐん〳〵引つぱつた。到頭棺の一方がはづれて、蓋を押し上げることが出來た。兩手を伸してみた――土の重さも少しも邪魔にならなかつた――空氣しか感じられない――空つぽの空氣だけしか。最初の力に任せて、到頭この忌はしい箱から飛び出した――そして落ちた。手と膝を挫いたが、石の歩道らしかつた。何か重いものがそれと同時に、どさつと鈍い音をたてて落ちてきた。ひどい暗さだ。けれども息ぐらゐはつける廣さがあつた。空氣は冷たく氣持が良い。どうやらかうやら、今私が落ちた場所に坐ることは出來た。傷を受けた手足は堅くなつて痙攣してゐた。激しい痛みで身體が震へる。五感がはつきりとしてくる――先刻までは離れ離れになつてゐた思ひが、今ではすつかりもとのとほり結び付いた――あれほど狂氣じみて興奮してゐた私は、次第に平靜に恢復して、初めて私の今の身の上を考へ出したのである。生埋めにされた――これだけは確だ。あまり酷い苦痛だつたので、長い間氣を失つてしまつたのだらう――病氣になつた私の身體を引受けたあの宿屋の人たちは私をコレラで死んだものと判斷して、すつかり周章てゝ、早速こんな酷い棺の

中に入れてしまつたに違ひない。何しろ疫病騷ぎでナポリではこんなやはな棺桶を無盡藏に作つてゐた時分だつたから――その棺といふのは薄い松板に釘をうつたゞけの話で、それも怖さが手傳つてゐたゝめか、實に無造作を極めたものである。しかし、私の場合にはその無造作の作りがどんなに有難かつたことか！　あれでもつと頑固に作つてあつたら、たとへ私がどんなに必死に藻掻いたところで到底おぼつかなかつたゞらう。さう思ふとぞく〳〵する。だが未だ分らないことがある。何處にゐるんだらうか？　私はいろ〳〵な方面から考へて見たが、暫くの間といふものなか〳〵に滿足な解答が得られなかつた。確かあの坊さんに私の名前を教へたつけ。するとあの人は私が金持のロマニ家の唯一の後繼者であることを知つた筈だ。それからどうしたかな？　なあに、あの立派な坊さんは自分の義務として命ぜられたゞけのことをやつたゞけの話だ。あの人は私の身體を祖先代々の墓に埋めるやうにしたのだ。私の父親の死骸が、凡そ金持の貴族として出來るだけの豪奢さを誇つた葬式の後で重々しく、派手に、この最後の安息所に運ばれて以來、この墓穴は二度と開かなかつたのに。さう思ふと私の考へがどうも本當らしく思へた。ロマニ家の墓所！　子供の時分に父親の棺桶についてこの墓地にやつて來た時にみんなから重さうな槲の棺桶をぢつと見てゐろといはれて眼をそつちに向けた時の氣味の惡さを覺えてゐる。その棺桶は若死をしたお母さんが殘していつたぼろ〳〵の天鵞絨の布と、變色した銀の道具で飾つてあつた。私は氣持が惡くなつて寒氣を感じた。青々とした大空の下で新鮮な空氣を再び吸ふまでは元氣になれなかつた。そして、今私もまた同じ墓所に、牢屋

に閉ぢこめられてゐるのだ――どうして逃げられやうか？　私はいろ〳〵と考へた。確かこの墓所の入口は、がつちりと鐵の扉で閉ぢられてゐたと思ふ――そこから下の方に階段が下りてゐる。そこの階段の下こそ、今私のゐるところではないかしら。こんな暗の中でもその階段への道が分つて鐵の扉のところへ登つて行けたら――が、そんなことが何になる？　鍵がかゝつてゐるではないか――いや、錠さへはまつてゐる。しかも、こゝはこの墓地でもずつと端の方にあるのだから。墓場番人が通り合はせるなんてめつたにないのだ――數日間も、いや恐らくは數週間も通らないだらう。すれば、私は飢ゑるか、渇ゑるかどつちかである。かう考へるともう堪らなくなつて、鋪石の上にすつくと立ちあがつた。足が裸だつたので、石の冷たさが骨の髓まで浸みこんだ。私が、コレラの患者として埋められたのはもつけの幸ひだと思ふ――何故つて、みんなは傳染つちやいけないと思つて半ば裸のまゝでおいて行つたのだから。お蔭でフランネルのシャツも散歩用のズボンも身につけてゐる。頸の廻りに何かあるらしい。はつきりと感ぜられる。と急に過去の甘いしかも悲しい思ひ出がどつと押寄せて來た。小さな金の鎖だつた。それに結び付けてある小金盒には妻と子供の寫眞が入つてゐるのだ。暗の中でそれを引つぱり出すと、私は熱烈な接吻と涙で覆うた――全く死人のやうに意識を失つてから初めて流す涙であつた――苦い熱い涙が私の目に溢れた。ニーナの微笑がこの世を輝かす限りこの世は生き甲斐があるのだ。たとへこの先どんなに恐ろしいことが私を待ち受けてゐやうと、私は生きなければならないと決心した。ニーナ！　愛しい、美しいニーナ！　彼女の光つた眼が納骨堂

の氣味の悪い暗の中から私をみつめてゐる。彼女の眼が私にうなづいてみせた――屹度、今頃はあの美しい眼が私が死んだと聞いて泣き濡れてゐるだらう。幾度も〳〵二人が抱き合つたあの部屋は今はがらんとして私の優しい妻が只一人泣いてゐるのが見えるやうな氣がした。彼女の美しい髪の毛が亂れてゐる。美しい顏は青ざめて、苦悶のためにやつれてゐる。赤ん坊のステラも屹度不思議に思つてゐることだらう。無邪氣なあの子さへ、どうして私がいつものやうにオレンヂの茂みの下で搖つてくれないだらうと訝つてゐるだらう！　そして、ギドーは賴もしい親友のギドーは！　私がゐなくなつたのでいつまでも心から悲しんで呉れるに違ひない。あゝ、逃れるためにはどんなことでもやる心算だ。どうかして、この陰慘な墓穴から逃れ出よう。もう一度私に會へたらみんなの喜びはどんなだらう！　死んだんではないと聞いてどんなに喜ぶことか！　屹度素晴しく歡迎してくれるに違ひない。ニーナは私の腕の中にもたれこむ。子供は私に飛びついてくる、ギドーはしつかと私の手を握る！　私はあの懷しい屋敷での喜ばしい情景を想像して微笑んだ――申分のない友人と、忠實な愛情のある幸福な家庭！

突然、耳もとである低いうつろな音が聞えて來た――一つ！　二つ！　三つ！　到頭十二まで數へた。時を告げる何處かの教會の鐘の音だ。私のこれまでの愉快な想像が消えてしまつた――またも無殘な現實のこの私に面と向つたのだ。十二時！　晝のか、それとも眞夜中か！　よく考へてみた。私があの病氣にかゝつたのは早朝の話だ――あの僧侶に會つて、結局は死んでしまつたものゝ、例の憐

れな果物賣の少年を助けて呉れと頼んだのはまだ八時になつてゐなかつた。あの私の病氣の狀態が數時間續いたとしたら、あれから私は氣を失つて、みんなに死んだものと思はれたんだらう。それにしても晝頃に違ひない。さうすると、みんなは出來るだけ早く私を埋めた。恐らく日沒前に埋葬をした。かう次から次へと考へてくると、やつぱり今の鐘は眞夜中だといふ結論に達するのだつた。埋葬の日の眞夜中。私はゾク〳〵とした——何か神經が震へるやうな恐ろしさであつた。元氣な私であつたが、教育を受けた者に似ず、何處か迷信的なところがある。ナポリ人はみんなさうだ。南國の人々の身體の中には迷信の血が流れてゐる。墓穴の中に、生埋にされて、手を伸せば直ぐに祖先の人達の腐つた死骸に觸れられさうなところに坐つてゐるこの私の耳には、教會の眞夜中の鐘の音はなんともいへないほど恐ろしく響くのである。私はこの感情を押へつけようとした——元氣を奮ひ起さうとした。最善の脫出法を一心になつて考へ始めた。墓穴の階段まで手探りで行つてみよう。かう心に決めると、兩手を前につき出してゆつくりと、最上の注意を拂ひながら動き始めた。あれは何だ？足を止めた。聞き耳を立てた。血管の中で血が凝結する。鋭い叫び聲がつき拔くやうに、長く〳〵、そして哀調を帶びて響いて來る。すると私の墓の凹んだ迫持がそれに反響する。身體中が冷たく、べつとりと汗ばむ——心臟の動悸があまり激しいので、それが肋骨にぶつかる音さへ聞える。——もう一度——もう一度氣味の惡い叫び聲、それに續くバタ〳〵いふ羽ばたきの音、私はまたも息を吸ひこんだ。

「梟だ」と自分の臆病さを恥しく思ひながら獨言をいつた、「可哀さうな無邪氣な鳥だ、四六時中死人の友達と、番人をしてゐるものだから、その聲が如何にも痛ましく悲しく聞えるのだ——けれども何の害があるわけではない」かう思ひながらも注意に注意を重ねて匍ひ進んで行つた、だしぬけにその暗から二つの大きな黃色の眼が、貪慾と殘酷に滿ちた光を投げかけた。ちよつと私は驚いて後にさがつた。その怪物は虎猫のやうな獰猛さで私に飛びかゝつて來た。私は其奴と組んず解れつの大格鬪を始めた。私の周圍をぐる〳〵飛び廻るかと思へば、正面からつゝかゝる、その大きな羽でたゝきつける——しかし、私には感ずることは出來たが眼で見ることは出來なかつた。黃色の眼は未だに濃い暗の中で守りの惡魔の眼のやうに光つてゐる。私はそれを右から、左から毆りつけて行つた——この激しい爭鬪が數分間續いた——私は氣持も惡く眼もぐら〳〵したが、なほも無榮苦茶に鬪ひを續けるのであつた。遂に、有難いことにその大きな梟が消え去つた。確に疲れたらしく上下に羽をバタバタさせて飛びながら一聲物凄い叫びをあげると、そのランプのやうな眼は暗の中に消え去つたのである。私は息もつけないくらゐではあつたが、身體中の神經がびく〳〵と興奮してゐたために、へたばりもせず、豫ての石の階段の方に歩を運んで、手を伸したまゝ手探をしながら進んで行つた。暫くするとある邪魔物に出會つた——冷く堅かつた——屹度石の壁に違ひない。上から下へと探つてゆくうちに一つの穴を見つけた——これが階段の第一段かしら？　どうも非常に高い。なほも念入りに觸つてゐるうちに、苔のやうな、濡れた天鵞絨のやうな、ねば〳〵した軟いものに觸れた。一種

の反撥作用が伴つて私の手がなほも觸れてゆくと、それが長い棺桶であることが分つた。妙なことだが、棺桶と分つても少しも驚かなかつた。私は裝飾用にくつゝけてある浮彫りの金屬を一つ〳〵數へてゐるのであつた。縱に八つと、横に四つ、そしてその間に濕つぽい物があつた。急に身體中がぞつとして思はず手を引つこめた。これは誰の棺桶であるかといふことを急に考へついたものだから。お父さんのであらうか？　それともこの私は夢に侵された人のやうに美しいお母さんの死骸がもう灰となつて横たはつてゐる大きな櫛の箱にかけた天鵞絨の切れつぱしを摑んだのであらうか？　初めて私は今までの平氣な狀態から我に返つた。それでは今までのこの墓穴から逃げようとする努力は無駄になつたのか！　底知れぬ暗に包まれてどつちへ行つてよいか全く途方に暮てしまつた。今の自分のことを考へると、前にも增して恐しくなるのであつた。それに、咽喉が渴いて堪らなかつた。

私は膝まづいて大聲に呻めいた。

「お慈悲深い神樣よ！　救世主樣よ、貴方の手に委ねられた多くの神聖な死者の靈魂にかけて、私をお憐み下さいませ！　あゝ、私のお母さんよ、貴女の骸が私の傍にいらつしやいますならば、私のことをお憐み下さい、貴女の魂が安らかに住んでゐられるあの天國の天使に向つて私のためにお祈り下さい。さもなければ、もうこれ以上私をお苦めにならずに一思ひにお殺し下さい！」

私の聲は大きかつた、そして、この呻き聲は墓所の陰氣な迫持の間を拔けて私の耳にさへも不思議な物凄い聲となつて反響した。これ以上苦めば氣が狂ふことは分りきつてゐた。しかし、こんな死

と、暗黑の中に閉され、友人といつては黴の生えた死骸しかないこんなところに狂人をつれて來ればどんなことになるかと考へると、もう空想をそれ以上廣める氣にはなれなかつた。私は膝まづいたまま何時までも顏を手にうづめて動かなかつた。無理にも冷靜さを取り戻して、亂れた心の平衡を保たうと努めた。おや！　あの遠くに聞える陽氣な聲は、なんといふ美しい聲だらう。私は顏を上げるとぼんやりとして聞いてゐた。

「ジュッグ、ジュッグ、ジュッグ！　ロドラ、ロドラ！　トリル、トリル——リル——リル！　スウィート、スウィート、スウィート！」

夜鶯（ナイチンゲール）だ。あの親しい、綺麗な咽喉をもつた優しい鳥だ。あゝ、この絕望で眞暗にされた時にお前の聲を聞くなんて、なんて幸福なことだらう！　無邪氣なお前が現れてきたことを、どんなに神に感謝したことだらう。私は飛び上つて笑ひ出した。今の自分のことをすつかり忘れて嬉し泣きに泣いたのだ。お前は眞珠のやうな美しい聲で私に慰の歌を唄つて呉れた。慰めの天の使よ……今でも私はお前のことを愛しく思ふ——何故つて、お前の美しさの故にこそ私は凡ゆる鳥を愛してゐるからだ。人間の世の中は日增に醜くなつてゆくのに拘らず、森や、岡で唄ふ生活は……どんなに潔く、どんなに新鮮であらう！　……それこそ天國に一番近い幸福の生活なのだ！　力と勇氣とが急に私の身體に涌き出した。新しい考が起つた。私は夜鶯（ナイチンゲール）の聲に從つて美しく生々と唄ひ出した——そして又暗中摸索を始めた。あの鳥は墓の入口の外の木に止つてゐるのだらう、だから、あの聲にもつと近

づいて行つたら、かうやつて懸命に探してゐるあの階段も見付かるだらうと、考へた。よろ〳〵しながらもゆつくりと進んで行つた。なんだか力が抜けたやうで、手足が震へた。が、更に深くへ〳〵と進んで行つた。夜鶯の澄んだ調がだん〳〵と近くなつてくる。一度は全く絶望してしまつた望が、またも心の中に涌き返るのであつた。自分は今何をしてゐるのか殆んど分らなくなつた。夢を見てゐる人間のやうに、鳥の吐き出す美しい歌の金色の紐にぐん〳〵と引きつけられて行くやうにみえた。突然、足が石にぶつかつて、前にどたりとのめつたが別に痛くもなかつた——手足がすつかり痲痺してゐたので痛さが感ぜられなかつたのである。私は暗の中で重い、ちく〳〵と痛む眼をあげた。そして、その時感謝の叫びを洩らした。矢の柄ぐらゐ細い月光が横様に上から流れて來た。そして、その光で私が探してゐた場所に遂に來たことを知つた——石の階段の第一段が見つかつたのだ。墓の入口が分らなかつたけれど、兎に角、この嶮しい段々の頂上にあるに違ひないことが分つた。ひどく疲れてゐたので、もうそれ以上進めさうにもなかつた。其處に横になつたまゝ、淋しい月の光を見つめて夜鶯の聲に耳をすましてゐた。すると今ではその喜に震へたメロディーが實にはつきりと私の耳をうつのであつた。ゴーン！　最前の鐘の音が一つ鳴り響いて來る。もう直き夜が明けるだらう。その時まで休まうと決心した私は、心も身體も、全く疲れてゐたので、冷い石の上に頭をのせたが、まるで非常に軟い座布團のやうにしか感ぜられなかつた。間もなく總ての苦しさを忘れてぐつすりと寢込んでしまつた。

幾時間か寢た頃、急に胸のつまる眩暈のやうな嫌な氣持と、誰かゞ首を嚙つてゐるやうな鋭い痛さを感じて目を覺した。手を首の邊りにやつてみた。あゝ！　私のぶる〳〵震へる指がぐつと摑んだその時の氣持をもう永久に忘れまい！　ぐつと肉にくひ込んでゐるのだ！　——羽の生えた、ねば〳〵した、息してゐる化物、しつこくまとひついて私を狂人にさせるほどだつた。私は不快と恐しさとで喚きちらした！　……兩手でその軟いぼて〳〵した身體を摑んだ——そして、私の肉から引つぱり出すと出來るだけ遠く、墓場の暗の中にたゝきつけた。ちよつとの間私はまるで狂人たつた、勘辨の出來ないほど鋭い聲が反響した。すつかり靜になつた時に、がつかりした私は邊を見廻した。月の光はもう消えてゐる。その代りに青味を帶びた灰色の光が覗いてゐて、それを頼りに階段と、その頂上にある閉つた入口とがすつかり見えた。私は狂氣じみた慌て方で階段をかけ上つた。兩手で鐵の格子を摑むとガタ〳〵と搖つた。錠がしつかり下りてゐたので岩のやうに動かなかつた。助けを呼んでみたが、答へるのは沈默だけ。頑丈な格子越に外を覗いてみた。見える！　草、うなだれた樹々の梢、遙か彼方に覗いてゐる空は、オーバル色に輝いて軈て朝日の登る前の赤らみを浮べてゐる。私は美味しい新鮮な空氣を吸ひこんだ。長い葡萄の蔦がからまりついてゐる一本の枝が私の傍に下つてゐた。葉には露がしつとりと溜つてゐる。私は格子越に片手を出すと二、三枚の冷い木の葉を摑ん

で、がつ〳〵と食ひ始めた。こんなに甘いものを食つたことがないと思はれたほど美味しかつた。乾枯びた咽喉も舌も元の通りに燃えるやうな熱を取り返した。樹を眺め、空を眺めると私の心は靜に落着いてくるのだつた。目を覺ましたばかりの小鳥が優しく鳴き始める。夜鶯はもう鳴かない。

私はだん〳〵と神經の疲れから恢復してきた、納骨堂の不氣味な迫持にもたれて、先刻大急ぎで登つてきた階段をふりかへつて見た。上から第七段目の隅に何か白いものが落ちてゐる。好奇心に誘れ、半分は嫌々ながら、注意をしい〳〵下りて行つた。それは太い蠟燭で、よくカトリック教で死者を埋葬する時に使ふものである。これはきつと式が終つた後でまた持つてゆくのも面倒臭いと思つた侍僧か誰かゞ棄てゝいつたものだらう。私は暫くそれを見いつてゐた。若し燈火があつたら兩手でズボンのポケットを探つてゐた。何かチヤリンといふものがある！　大分慌てゝ埋葬されたものと思はれる、私の財布、小さな鍵束、名刺入――一つ〳〵引つぱり出して意外の面持でそれを眺めた――實になつかしいものであつたにも拘らず奇妙な感じがした！　なほも探つてゆくうちに、今度は今の私に一番必要なものを探り當てた――小さな蠟マッチの箱であつた。さてと、煙草入の方を置いていつてくれたゞらうか？　いや、それだけはなかつた。立派な銀のやつだつたんだが――きつと私を死んだと感違ひしたあの坊さんが時計も鎖もそれと一緒に私の妻のところへもつて行つたのだらう。さうだ、火はありながら煙草は吸へないといふわけだ。それに、葬式用の蠟燭さへあるのだ。陽は未だ登つてゐない――もつと日中にならなければ、誰かこの墓地を抜けて通りかゝる人を呼びとめるわけ

にゆかない。だが、面白い思ひ付がある。これから行つて私の棺桶を調べてみよう。かまふものかこれも風變りな經驗になるだらう。もう怖いなんといふ氣持はちつともなくなつた。マッチの箱があるだけで、どんな危險も平氣になつたのだ。蠟燭を拾ひあげて火をつけた、初めちらつ〳〵としたゞけだが、やがてはつきりと強い光になつた。私は風に吹き消されないやうにと、それに片手をかざしながら、この牢屋の入口から優しく覗きこんでゐる日光にお別れの一瞥をくれると下りていつた――一晩の間あんなに惱みながら過したあの陰氣な場所へとまた下りて行つた。

第四章

階段を下りて行く私の足元から、澤山の蜥蜴が逃げだした、燈火の光が暗の中を照すと、急に羽音や、凄い叫びや、いろ〳〵な金切聲が聞えてきた。私はこゝで初めて死人の住む場所が如何に陰慘で無氣味なものかを知つた、しかし今は燈火を持つてゐるので少しも恐れを感じなかつた。先刻は暗かつたのでひどく遠く思はれた道も、非常に近かつた、軈て私は最前我に返つたあの場所に來てゐた。墓穴の本當の恰好は正方形で、なんのことはない、高い壁に圍れた小さな部屋といつたやうなものである――その壁はところ〴〵出つぱつてゐて、先祖代々ロマニ家の死者の骨を納めた棺桶を乘せる壁龕になつてゐて、その凹みが恰度倉庫の品物を竝べた棚のやうに重なり合つてゐる。私は蠟燭を

高々と掲げて、妙な物好きな眼で四邊を見廻した。私の探してゐたものは直ぐに分つた——私の棺桶である。

それは地上から五尺ばかりのところにある壁龕にあつた。壞れた板くずは最前の私の物凄い爭鬪の跡を忍ばせてゐる。近寄つてよく調べてみた、ひどく柔な感じで、覆ひもなければ飾もない。何處かの葬儀屋の荒仕事に定つてゐる。といつたからとて、そこの職人に憎まれてゐるやうなこともなければ、何故大急ぎでこんなものを作つたかと叱るわけにもゆかない。何かゞ底で光つてゐる——黑檀と銀の十字架だ、これもあの坊さんが！　十字架を身につけないで埋めさせることはあの坊さんの良心にすまなかつたのだ、私への最後のお勤めとして胸の上に乘せてくれたに違ひない。それが、私が棺を破つてゐるうちに胸から落ちたのである、私はそれを取上げて敬々しく接吻した——若しあの坊さんにもう一度會ふことがあつたら、今までの一部始終をお話してその證據にこの十字架をお見せすれば、本當だと思つてくれるだらう。棺の蓋に私の名前が書いてあるだらうか？　あゝ、あるある——亂暴な字で黑々と書いてある。「ファビオ・ロマニ」、それから私の生年月日、續いて簡單なラテン語の碑文、それには一八八四年八月十五日にコレラで死亡したと書いてある。それは昨日だ——たつた昨日の話だ、なんだか百年も生きてゐたやうな氣がする。今度は父親の眠つてゐる場所の方を眺めた。棺の四隅から垂れてゐる天鵞絨は大分ぼろ〳〵になつてゐる。しかしその次の壁龕にある大きな櫛の箱に較べれば濕り氣も、蟲の食い荒らした跡もさうひどくはない。それはお母さんの

だ——私が初めて優しく抱かれた、この世の光を初めて目の中に見たお母さんの寢ていらつしやるところだ。私の手が暗闇の中で探つてゐたうちに覆のぼろ布に觸れて、確にこれが母親のだと知つたのは、全く一種の本能の力だ。私は前のやうに金具の數を算へた——縱に八つ、横に四つ——お父さんの方のは縱に銀の板が十、横に五つあつた。可哀さうなお母さん！　私は家の書齋に懸つてゐた肖像畫を思ひ出した。若い、黑髮のにこやかな美人、顏色は夏の太陽を浴びて熟れてゐる桃の色にも似た美人の繪である。あんなにも綺麗だつた人が、かうも無殘になつてしまふのか！　私はぶるゝと震へた——そこで冷たい石の間にあるこの二つの凹みの前に膝いて、生前私を非常に可愛がつて下さつた兩親に祝福の祈を捧げたのである。さうやつてゐる間に私の持つてゐた燈火が、ある非常な光で輝いてゐる小物體を照した。それは一つの大きな梨型の眞珠の周圍を、立派な二十四面金剛石でちりばめたものであつた。私はすつかり吃驚してどうしてこんな高價な寶石がそこにあるのかと見廻した、すると横つ倒しに、なみはづれて大きな棺が横はつてゐるのに氣附いた。見たところ非常な勢で、しかも突然落つこちてきたものらしい、何故つて、その附近には崩れた石や、漆喰がばら〳〵に散らばつてゐたから。なほも地面に光を照らしてみると、私が今まで寢てゐた壁龕の恰度眞下のところにもう一つ壁龕があつて、そこの壁がひどく壞れてゐるのが分つた。先刻私が自分の狹い箱から必死になつて躍り出た時に、ひどい音がして何か物が落ちた。それがこれだつたのだ——この長く大きい棺桶は樂に七尺の人間を入れることが出來る、するとこの私はなんと大きな祖先の一人をその棺

桶から追ひ出してしまつたことか？　今私が手にしてゐるその高價な寶石は、その死骸の咽喉にかゝつてゐたもんだらう。

更に好奇心が加つたので、先づ棺桶の蓋を調べてみようと屈み寄つた。名前はない――何の印も書いてない。たゞ一つ眞赤な劍が書いてあるだけだ、これは變だぞ！　もつと中へ入つて行つてみよう。そこで手にしてゐた蠟燭を空虛の壁龕のある割目に立てかけて、その上例の眞珠と金剛石の垂飾りをその側に置いたのでどうやら身體が樂になつた。前にもいつたやうにその大きな棺は横倒しになつてゐて、一番上の角が壞れてゐる。私はその壞れた部分を更に大きくしようとして兩手で引つぱり始めた。その時、皮の囊が中から轉り出て足もとに落ちた。拾ひ上げて開いてみると、これはどうだ！　金貨で一杯だ。これでまた勢を得て、今度は先の尖つた石を摑むと全身に力を入れて壞し始めたのであるが、ものの十分もやつたかと思ふ時に、到頭奇妙な棺桶が割れたのである。やり終つたが暫くの間はぽかんとして自分の仕事の結果を見つめてゐるだけだつた。私の眼に映つたものは、死人ではなかつた、といつて、漂白したり、ぼろ〳〵になつたりした人骨でもなかつた。ましてや口の開いた頭蓋骨が凹んだ眼で私を嘲笑するやうなことはなかつた。私はたゞ、王樣だつて羨しく思ふやうな財寶を見守つてゐたに過ぎない！　この大きな棺は、全く數知らずの財產でぎつしりになつてゐる。一番上にある紐のよれ〳〵になつた五十ばかりの大きな皮囊。その半分以上には金貨が、その他には素晴しい寶石がぎつしと詰つてゐる――頸飾り、冠、腕環、時計、鎖、

その他女の身につける品々、ばら〳〵になつた寶石――ダイヤモンド、ルビー、エメラルド、オーパル、その幾つかは大きさも光も大したもので、またあるものはまだ手がかゝつてゐないで寶石屋へ持つて行くばかりになつてゐる。この囊の下には數知れぬ絹、天鵞絨、錦織、その一つ〳〵が恰度油布のやうな恰好にくるまつて、强い樟腦や、その他何かの香料の匂がプン〳〵とする。それからまた意匠の粹を極めた長い薄紗のやうに細い古いレースが三枚、しかも少しも瑕つかず置いてあつた。その他素晴しい彫刻と裝飾のついた名巧の腕の冴えを思はせる二枚の大きな盆、金の立派な盃が四つ、この他にもまだ珍しい高價なものがあつて、例へば銀の臺の上に乘つたサイキ神の象牙の立像、貨幣をつなぎ合せた帶び紐、琥珀と、トルコ玉作りの柄のある繪扇、寶石作りの鞘のある精巧な鋼鐵の劍、緣に古い眞珠を入れた鏡、最後にといつて、これだけではないが、箱の一番底に何百萬フランといふ金高のある札束――私のこれまでの收入さへもこれには及びもつかなかつた。私は皮囊に深く頭をつゝ込んで、その貴重品數を撫ぜ廻した、みんなこれは私のものだ！　私の墓所でこれを發見したんだから、自分の財產だと考へても構はないではないか？　私は考へ始めた。どうしてこんな物がこゝにあるのか？　この問題に對する答へは容易だつた。山賊だ！　勿論だ、そのことを考へつかないなんてどうして私は馬鹿なんだらう！　蓋の上に書いてある劍がこの疑問を解決してくれた。赤い劍はあのバレルモ附近を荒し廻る狂暴無比な山賊、カルメロ・ネリ一味の符合なのだ。さうだ、「咽喉を切られたカルメロ君よ、なんて君の思ひ付きは立派だらう！　君の頭はなか〳〵用

心深かつたね！　まさか死人が邪魔される、ましてや、棺桶が破られて金銀財寶が奪はれるなんて、いくら怜悧な君だつて思ひ付きはしまい！　なか〳〵巧みな計畫だつたがねえ、カルメロ君、今度こそはあんたも一つぱい喰はされたね！　兎に角死んだと思はれた男が蘇へり、その苦勞の中斐あつて神様と盜坊さんがとつて置いた財寶を手に入れるなんて、それにこれはどうせ素情のいゝ代物ぢやないんだから、あんたが持つてゐるよりか、私が持つてゐた方が良からうよ。カルメロ君！」この不思議な事件に就いて私は數分間考へに耽つた。だが――別に疑ふ理由はないんだが――盜賊ネリの掠奪品を偶然にも發見することが出來たが、よく考へてみると、この大きな箱は遙かバレルモから海を越えて運ばれて來たに違ひない。多分がつちりした四人の仲間が、友達が死んだんだと出鱈目をいつて、眞面目くさつた葬式をやりながら持ち込んだに違ひない。なか〳〵洒落氣のあるお盜坊さんだ。だが、まだ解せないところが一つある。一體それにしても吾が家の墓所にどうして近づくことが出來たであらうか？　合鍵を用ひたとしたならば別として。突然、四邊が眞暗になつた。蠟燭が風にでも吹かれたのか消えてしまつたからだ。まだマッチはあるし火をつけようと思へばつけられたんだが、どうしてかう急に消えたのかそれを變に思つた。で、再び暗くなつた闇の中を見廻していくうちに、先刻、二つの石の間に蠟燭を立てゝおいたあの壁龕の片隅から、一道の光線が差し込んでゐるではないか！　私はそこに近づいて手をあてゝみた。裕に三本の指が通るくらゐな穴から強い風が流れて來た。急いでもう一度燈火をつけて、穴と壁龕の裏を念入りに調べて見ると、壁の中の花崗岩の塊が

四つ動いて、そこには木の枝から切りとつた太い四角の丸太が當てゝあつた。その丸太はしつくりと嵌つてゐる。そこでそれを一つ〳〵取りのけてみると、一山の柴にぶつかつた。更にこれを押しのけてゆくと一人の男が大した造作もなく出入りの出來るくらゐの大きな穴が現れた。やれこれで助かつたと思ふと私の心臓は激しく波うつた。息ひ上つていつた――次に私が見たのは――なんて嬉しいことだ！　風景が、空がみえる！　かうして二分も經たないうちに、私は墓所の外の軟かい草の上に立つてゐた。上には高く大空が、目の前には廣いナポリ灣の波がきらめく！　私は兩手を打つて喜びの叫びをあげた自由になつたんだ！　自由になつて、元通りの生活へ、愛の生活へ、美しいニーナの腕に歸つて行くことが出來るのだ――嬉しい地上の幸福な生活がもう一度出來るのだ――あの早過ぎた埋葬の怖ろしさゝへ忘れることが出來るのだ。カルメロ・ネリが私の捧げた祝福の言葉を聞くことが出來たら、なんぼ山賊の彼奴だつて、一時は自分も聖者になつたと感じるだらう。あの山賊には淺からざる恩を受けてゐる。財産と、自由！　ロマニ家の墓所に通ずるあの祕密の通路は、彼自身が、まこたは彼の仲間が、別の目的のために拵へておいたのに。あの頸に莫大な賞金がゝけられてあつた有名な山賊が私にかけて呉れた恩といふものはそこら邊りにごろ〳〵してゐる恩人とは一寸わけが違ふ。あの男は何處かに隱れてゐるさうだ。が、たとへ官憲が私に助言を求めたつて默つてゐよう。彼の行方を知つてゐたつて默つてゐる心算だ。彼は知らないだらうが、私に盡して呉れた恩といふものは所謂親友等の及びもつかない有難さ、裏切るなんてとても出來ない。いや、諸君だつてさうだ。諸君の

ために本當に盡してくれる友達なんてあるだらうか？　極く僅かだ、いや、無いといつた方がよからう。財布を觸つてみるより心臟を調べた方がいゝんだから。

かうやつて朝の光と、新しい自由の歡喜にうたれて樣々と空想の城を築いていくのであつた――二つとない幸福な夢が私の想像の世界をキラ〳〵と驅け廻つた！　ニーナと私との愛は今までよりも、もつと細やかになるだらう。成程、別離たといつても短い間ではあつたが、今後はそれがために十倍の熱情をもつて愛し合ふことだらう。そして小さなステラは！　さうだ、今晩あの子をオレンヂの茂みの下でゆすぶつてやつて、あの子が綺麗な細い聲で笑ひ出すのを聞かう。私がギドーの手を握れるのは實に嬉しいことではないか！　今晩妻の金髮の頭が私の胸に休んで二人には時々の接吻の音樂の他は何の音も聞えない。この世ならぬ沈默が訪れるであらう。あゝ、次から次へと私を眩暈させるほどに浮び上つてくる嬉しい光景を想像して、私の頭は狂ひさうになるのであつた。もう陽は登つた――金色の矢のやうに眞直ぐな長い光線が綠の木々の梢に觸れて、きらめくナポリ灣の海上に、赤と靑の閃光を捲き起した。波の囁きが聞える。規則正しくオールが波を打つ音が聞える。遙か遠くの舟からは舟乘りが朗らかに唄ふ俗謠さへ聞えてくるのだ。あゝ、「戀に生命を奪はれて」だつて？　この優しい歌の意味を、今宵月が上つて、夜鶯が睡つてゐる花に向つて愛の調べを唄ふ頃にはほつきりと知つてしまふだらう。私はかうした幸福な思ひに一つぱいになつて、數分の間潔らかな朝の空氣を吸ひ込んでから、艇を墓穴にもう一度入つて行つた。

第五章

先づ第一にやつたのは、私が見つけたあの寶をもう一度しまふことであつた。この仕事はたやすく終つた。現在のところ皮囊が二つもあれば用が足りるので、一つは金貨の入つた奴を、もう一つは寶石の入つたのを持ち出すことにした。箱が頑丈だつたから、少しぐらゐの無理では壞れない。私は出來るだけ嚴重に蓋をして墓所の遙か暗い隅に引つぱつて行くと、三つばかり重い石をその上に乘つけて置いた。私が選んだ二つの皮囊は一つ〳〵ズボンの兩方のポケットに入れた。さうやつて見ると今更自分の着てゐる衣服の粗末さに氣付いた。こんな恰好をして大通りを歩けるもんだらうか？　そこで先刻いつたやうに恐ろしさの餘り、埋葬も碌々確めないで殘して行つて呉れた私の財布や、鍵束や、名刺入を調べてみた。財布には、二十フラン貨幣が二枚と、その外若干の銀貨のバラ錢があつた。これだけ有れば相當な服が買へる。しかし何處で買つたもんだらうか？　夕方まで待つてゐて、大犯罪人の化物のやうな恰好でこの納骨堂から拔け出したもんだらうか？　いや！　どんなことがあらうともう一分間もこの墓の中でぢつとしてはゐられない。ナポリ中に充ち〳〵てゐるあの乞食の大群のぼろ、よごれ、貧しさを考へて見れば、私もそれと間違はれるひどさである。が、そんなことはいつてゐられない。どんな困難な事情があつても構はない。直

に終つてしまふんだから。

偖て例の山賊の棺桶を安全な場所に置いて安心した私は、一番初めに見つけた眞珠と、金剛石の垂飾りを、頸の周圍の鎖にしつかと結びつけた。妻に土産としてやる心算だ。それからもう一度穴を抜け出して、前のやうに其處を丸太と柴で塞いでしまひ、尙外に出てからも萬全を期して調べた。實際、其處から見ると地下に通じる通路の入口があるなどゝは、全く想像もつかない。よく拵へてある。今はもう何の心殘りもないのだから、これから町へ行つて、自分の素情を話し、食ひ物と、服を手に入れて、大急ぎで家に歸るまでの話だ。

小高い岡の上に立つて、さて、どつちの道をとつたらよいかと眺め廻した。この墓地はナポリの場末に立つてゐる——ナポリは私の左手の方にある。その方向に曲りくねつてゐる傾斜になつてゐる道を探し當てたので、これを通つて行つたら郊外に出られるだらうと考へた。そこで少しも躊躇せず早速歩き出したのである。眞晝間で、私の裸の足が踏んでゐる土は沙漠の砂のやうにほてつてゐる。猛烈な太陽が無帽の頭を照しつける。けれども、私は何の苦も感じなかつた。私の心は喜びで一つぱいなのだ。かうやつて急いで吾が家を指して歩いて行くうちにも、今にも嬉しさの餘りに大きな聲で唄ひ出しさうであつた。手足が非常に弱つてゐるのも承知だ。眼と、頭が強い日光でキリ〳〵痛んでゐるのも承知だ。時々氷のやうな戰慄が身體中をのたくりまはる。齒がガタ〳〵音を立てる。しかし、私はかうした徵候をあんな大病の後だからと思つて、別に氣にも止めなかつた。數週間妻の手厚

い看護を受けたら元通り治つてしまふだらう。私は尙も元氣よく歩き續けた。暫くの間は誰にも會はなかつた。だが、到頭新しく取入れた葡萄を積んだ一臺の小さな馬車に追ひ付いた。馭者は自分の席の上で寢てゐる。小馬が道邊の青い草を食べてゐた。そして、時々馬具につけた鈴をカラン〳〵と鳴らすのが、いかにも氣儘に食へて嬉しいといふ滿足の氣持を示してゐるやうに聞えた。ひもじくもあるし、咽喉も渴いてゐた私は山と積まれた葡萄が堪らなく思へた。私は寢てゐる馭者の背中に手をかけた。彼は吃驚して目を覺し、私の顏を見ると、わなゝと震へ出して、いきなり車から飛び下りると砂の中に膝をついて、聖母マリヤ樣とか、聖ヨセフ樣とか、樣々な神の名にかけて、私に生命乞ひを始めたものである。私は笑つた。彼の恐がり方が滑稽に思へたから。服の粗末さを除いては別に恐がるわけもないのに。

「立つてくれ給へ君、たゞ一寸葡萄が貰ひたいだけなんだ。それに無料とはいはない。」といひながら私はフラン貨幣を二枚差出した。すると彼はぶる〳〵震へながら立ち上つて、まだ疑ひが解けないのか、じろ〳〵横目で眺めながら幾房かの紫色の葡萄を手にすると、一言も言はずに私にくれた。それから私が差し出した金をポケットに收めるとまた馬車に乘つて可哀さうにピシヤ〳〵と小馬を毆りつけて、いや、物凄い速力で走り出した。そして、瞬く間に遙か遠くへ車輪が消えて行つた。私はあの男の慌て方が、いかにも馬鹿らしい可笑しな氣持がした。一體私を何だと思つたんだらうか？幽靈とでも思つたのか、それとも盜坊だと？　歩きながらゆつくりと葡萄を味つた——とても冷たく

つて美味しい――まるで食物と酒を一緒にしたやうだ。町に近づくにつれて尙數人に會つた。市場の人、氷賣り人。だが、誰も私に氣が付かなかつた。此方でも出來るだけ人目を避けてゐたから。第一の通りに入つていつた時に、私は何か賣屋があるだらうと考へてゐた。それは狹い、暗い、嫌な匂ひのする通りだつたが、さう深く入らないうちに目的の場所に來られた――それはひどい、屋臺の曲つた小屋で、一部分が壞れてゐる硝子窓から古着が、お粗末な紐でからげられて、見本用に竝べてあるのがぼんやりと見えた。これはよく長い航海から歸つて來た船乘り達が外國で手に入れたいろ〳〵な品物を賣り捌くところで、こんなひどいがらくたの骨董品の間にも、なか〳〵面白い貝殼だとか、珊瑚だとか、數珠、椰子の木細工のコップだとか、皿だとか、乾葫蘆、獸の骨、扇、剝製の鸚鵡、古い貨幣――さうかと思ふと、奇妙な木製の神像などが、眼に立つところにぶら下つてゐる南京木綿のズボンの間から、この愚しいごた〳〵を瞰下してゐる。一人の老人がこの前途有望な堂々たる馴合ひ世帶の開いた戸口のところに坐つて煙草をふかしてゐる――生粹のナポリ人だつた。彼の顏の皮膚は褐色の羊皮紙のやうで無數の皺や穴が出來てゐる。まあいつてみるならば、時の神が一度この老人の顏の上に書いた歷史を目茶苦茶にインキの汚點だらけに消したやうなものである。彼の身體のうちでどうやら生きてゐるやうに見えたのはその眼であつた。眞黑で、數珠玉のやうで、絕えず落着きなく、絕えず疑り深く彼方此方と見廻してゐた。私が近寄つていくのを見た筈だが、彼は狹いぎつしりと竝んだ町竝の間から顏出してゐる靑空を一心に見守つてゐるといふやうな風をしてゐた。私は聲

をかけて見た。すると彼は急にその視線を私に向けて、如何にも訝し氣に私を見守るのであつた。

「長い間の放浪でね。」と私はぶつきらぼうにいつた。こんな人間に私の冒險談を話してやつたところで頭から信じまいと思はれたので。「で、途中で一寸面倒があつて着物をなくしたんだが一着賣つて貰ひたいね。何んでもいゝんだが――どんなのでも構はないよ。」

老人は口からパイプをとると、

「あんたは疫病が恐はくないかね？」と尋ねた。

「一度やられたがすつかり治つてね。」平然と私は答へた。彼は私の頭の先から足の先まで眺めてゐたが、急に低い聲で笑ひ出した。

「ハハ！」と半分は自分に聞かせるやうに、半分は私に聞えるやうに。

「それやいゝ――それやいゝ！　わしと同じだね――ちつとも恐がらないなんて！　わし達は憶病ぢやないんだ。聖者樣達を惡くは言へない――この疫病は聖者樣がお下しになつたんだから、お立派な疫病だね！　だが、わしは好きだ！　わしんのところぢや、死體が着てゐた着物をみんな買取ることにしてゐるんだよ――大概いつでも立派な服でね、決して掃除しないんだ――そつくりそのまゝ賣つちやうんだよ――さうだとも――さうだとも！　構はないぢやないか？　人はみんな死なゝくちやならねえ――早いが勝さ！　まゝ、出來るだけ神樣のお手傳をしてゐるのさ。」とこの冒瀆な老人が敬敬しく十字を切り始めた。

そこにすつくと立つた私は、實に嫌な奴だなといふ目付きでこの老人を睨みつけた。彼の言ひ草は恰度私があの墓穴に寢てゐる時に頸に咬りついたあの得體の知れないものに觸れた時と同じやうな嫌惡の念を起さした。

「さあ！」と幾分言葉を荒らげて、「一體賣つてくれるんか賣つてくれないんか。」

「賣りますとも——賣りますとも。」かういつて彼は立ち上つた。非常に脊が低い上に、老年と病氣で折れ曲つた木の枝のやうに前屈みになつて、よぼ〳〵しながら暗い店の中に連れ込んだ。「お入りなさいよ！　あんた選んで下さい。どんなお好みだつて合ひまさあ、さあ、御覽なすつて、これやさる紳士の着ていらつしたものでね。いゝ布だ、毛だつてこの通り強い！　英國製ですつて？　さうですよ、さうですよ！　これを着ていらつした人が英國人でしてね、ずんぐりした丈夫さうな旦那さんでしたがね、まるで水でも呑むやうにビールや、ブランデーをおやりになつた——凄い金持でね！　大した金持でしたよ！　ところがその方が疫病に罹りなすつて、神樣を罵りながら死にましたが、その時だつてもつとブランデーを呑ませろと、大聲で怒鳴つていらつしたよ、ハハ！　立派な死に方で——立派な死に方で。その方の地主さんがこの服を三フランでわしにお下げになりましてね——一、二、三フランとね——だが、旦那六フラン出して貰ひたいな。このくらゐの儲けはひどくはないと思ふが？　御覽の通り年寄りで貧乏人と來てるんだから、食ふためにや慾はありますよ。」

私は彼が見せたそのスコッチ織の服を押しやつた。

「いや、私は別に疫病が恐いつといふわけぢやないが、ブランデーの浸みこんだ英國人の服なんて御免だね。それよりは謝肉祭で道化役を務めた男の色とり〴〵の服の方がいゝね。」

これを聞くと老人は、錫の甕の中で石をかきまはしたやうな、變な、洞ろな聲でカラ〳〵笑ふのであつた。

「やあ、さうですとも——さうですとも！　わしもあれが好きでね！　あんたは年をとつてゐるが、氣は若いて。なか〳〵面白いですよ。さうですとも、人間は四六時中笑つてゐなければいけませんよ。さうぢやありませんか？　死人だつて笑ひまさあ、あんた眞面目くさつた頭蓋骨を見たことがありますかね、彼奴はいつも笑つてゐますよ！」

彼は絶えずぶつ〳〵いひながらその痩せた指で衣類をごた〳〵詰め込んだ引き出しの中をかきまはしてゐた。その間私はぢつと側に立つたまゝ彼がいつた。

「あんたは年をとつてゐるけれど氣は若いて」といふ意味を考へてゐた。一體、どうした心算で私を年をとつたといふのだらう？　こりや盲目かな、それとも、耄碌してゐるのかな、私は急に顏を上げた。

「疫病といへばね、」と彼が語り出したからである。「いつも怜悧なことばかりとは限らない。昨日でしたか、馬鹿なこと、恐ろしく馬鹿なことをやつたもんで、この近所の大金持がやられたんですよ。若くつて、丈夫で元氣のおありになる方でね、一寸死にさうには見えなかつた方でしてね、朝のうち

に疫病にとつゝかれて――夕方前に釘付けにされて先祖代々の墓所に葬られなすつたが、その墓所も、あの高臺の大理石造りのお屋敷と較ぶれば、寒い粗末なところですよ。死なれたと聞いた時に、早速わしはマドンナ様、そりや聞えませんと、さん〳〵に聖母様をお叱りしました。マドンナ様だつて女だから氣が多い、うんと叱つてやりや、そのうちにや目が覺めまさあ。ね、あんたわしはこれで神様と疫病さんのお友達だが、ファビオ・ロマニ伯爵をお殺しになつた時にや、馬鹿な眞似をしたもんだと思ひましたね。」

私はギクリとした。が直ぐにも心を落着けて何氣ない顏を裝つた。

「成程ね、」とさりげない調子で、「一體他の人達と同じやうに死ぬのは勿體ないと思はれた。その當の御本人は誰なんだね？」

老人は今まで前屈みになつた身體をぐつと立てゝ鋭い、眞黑な眼で私を見つめた。「その人かどんな人だつて？　本人が誰だつて？」彼は金切聲で叫んだ。

「あゝ、あんたはナポリのことはよく御存じぢや御座んせんね、あの金持のロマニ家を御存じないんですか？　ねえ、私はあの方に本當に生きてゐて貰ひたかつた。お悧巧で、元氣があつて、まあそんなことは兎や角いひたくないが――第一あの方は貧乏人にはとても御親切でしたよ。何百フランといふ金をお惠み下すつた。よくお見かけしましたが――結婚式も拜見しましたよ。」とこゝで彼の羊皮紙顏が意地の惡い殘酷さを帶びて來て、「畜生！　あの方の奥さんは大嫌ひですよ――綺麗だけど、

眞白な蛇みたいな奴で！　よく町角でお揃ひで馬車に乘つてゐる姿を拜見しました。そん時思ひましたね、旦那さんが勝つか奥さんが勝つか、その結末が見物だつてね。わしにすれや、旦那さんに勝つて貰ひたかつた。なんならわしが手を貸してもいゝからあの女を殺させたかつたよ！　だが、今度だけは聖者様もやり損つたね。兎に角旦那さんが死んで悉皆あの惡魔女のものになつちやつたんだからなあ。さうだとも！　神様も疫病さんも今度といふ今度は馬鹿氣たことをやつたもんでさあ。」

私は、この老爺の話を聞いて行くうちに不快な念に襲はれてきたが、まだ大分好奇心が手傳つてゐた。どうしてこの男は妻を憎んでゐたのだらう？　第一、彼が公言するほどこの私を見かけてゐるなら、面憎くて堪らないといふ感情からだらうか？　吃度老人に有り勝な、若い者や美人が何んでも小今だつて分る筈だ。してみると今は見わけがつかなくなつたんだらうか？　かう考へて來て偖、私は聲を大きくして尋ねた。

「そのロマニ伯爵つていふ人はどんな樣子の人かね。今立派な人だといつたね、脊が高い人かね、それとも低い人かね。頭は黑か、金髮か？」老人は額際に生えてゐるもぢや〳〵の白髮のちゞれ毛をぐつと後にかき上げて、一方の黃色な爪のやうな指を伸ばして何か遠くの幻でも指すかのやうな恰好で、

「綺麗な人でしたとも、立派な方でしたよ。脊の高さはあんたくらゐで、肩の廣さだつてあんたと同じぐらゐだ。けれど、あんたの眼は凹んでぼんやりしてゐるが、伯爵樣のときたら大きくピカ〳〵し

てゐたよ。顔だつてあんたみたいに痩せこけて憔悴してはゐませんよ。オリーブ色で圓くていかにも丈夫さうでした。髪の毛はつや〳〵黒くて——眞黒でね、お客さんのは雪のやうに白いといふんでせうが！」

私はこれらの言葉の中に一種の怖氣にうたれたやうに卷き込まれていつた。まるで電氣みたいな力を持つてゐる。一體私はそんなに變つたらうか？　たつた一晩墓穴の中で恐ろしい目に遭つたからつて容貌まで變るといふことが有り得やうか？　髪の毛が白いつて？　この私のが！　殆んど本當とは思はれない。若しそれが本當だとすると、ニーナだつて私を見ても分らないだらう——私を見たらぞつとするだらう。あのギドーさへも私を疑ぐるに違ひない。だがそれにしたところで私が實際のファビオ・ロマニであるといふことを證明するのはた易い——あの墓穴と、壞れた棺桶を見せてやればいゝんだから。私がいろ〳〵と心の中で爭つてゐる間も、老人はそんなことはお構ひなしに尙もぐちやぐちや喋り續けるのであつた。

「あゝ、さうですよ、さうですよ。立派な方でした——強さうな方で、あんまり強さうなのでわしも嬉しいくらゐでした。あの方なら親指ともう一本の指であの小つぽけな奥さんの咽喉くらゐわけなく絞められますがね——さうすれや！　あの女だつて本當のことを吐いちやいますよ。實際わしは伯爵樣がさうされることを待つてゐたんですよ——待つゐたんですとも。若し生きてゐられたら屹度やつたでせうよ。だから死んじまつたのは全く殘念だつたのですよ。」

私は無理にも自分の感情を押へつけて、この口の惡い老人に靜かに話し始めた。

「どういふわけでそんなにロマニ伯爵夫人のことを惡くいふんだね？　何かお前に惡いことでもしたのかい？」すると彼は出來るだけ身體を伸してぢつと私の眼を見つめた。そして意地の惡い口の邊に陰險な笑ひを浮べて、

「どうしてあの女を憎むんですつて——さう——いつちまひませう。あんたは強さうなお方だからね、私は強いお方が好きですよ。——尤もそんな人に限つてちよい〳〵女に騙されますがね、だが、強けりや仕返しが出來るんですから。これでわしも若い時にや強かつたんですよ。ところであんた、——あんたお年寄りだが——だが、冗談ぐらゐはお好きでせう。ねえ、分つてくれまさあねえ。あのロマニ伯爵夫人がわしに惡いことをしたつていふわけぢやないんですがね。一度笑ひやがつたんで。そりや、あの女の馬が町でわしを蹴り倒した時の話ですよ。怪我をしましたよ——ところがあの女を見ると、野郎眞赤な脣を開けて白い齒を出しながら笑つてゐるんです——町の人にいはせると無邪氣な赤ん坊のやうな笑ひ方だといひますがね！　わしは他の人たちに助けて貰つたがね、女の馬車はどん〳〵行つちやう、旦那さんが一緒だとまさかあんなことはやらないと思ふがね。だが、そんなことはどうでもいゝ、たゞあの女が笑つたつていへばね——その時わしはあれとそつくり同じことを思ひ出したんですよ。」

「そつくり同じものだつて！」と少からず彼の話に度肝を拔かれた私は急きこんで尋ねた「何と同じ

なんだ？」

「わしの家内とそつくりでしたよ。」と老人はだん〳〵と私に對する尊敬を見せながらその殘酷な眼を輝かしながらいつた。

「さうですよ！　わしだつて情事がどんなことくらゐ知つてまさあ。女の方のことでは流石の神様も御存じないつてこともね。神様だつてマドンナ様を見つけるまでには大分年をとつてゐるのだ。さうですよ、よく知つてまさあ！　わしと一緒になつた女つていふのはかう、春の朝みたいない〻女でしてね、その可愛らしい頭は陽の光で頭をうなだれた花みたいな風情がありましたよ――それから眼ですが、此奴がまた赤ん坊がお母さんの接吻を欲しがつてゐるやうな素晴しいもんでね。一度わしが家をあけたことがありました。歸つてみると、家内は靜かに寢てるんです――さうですよ、それが男の胸に寢てたんで――その男つてのはヴェニスからやつて來た凄い艶歌師で、綺麗な、獅子のやうな元氣な若僧でしたが、其奴がわしを見ると、いきなりわしの咽喉に飛びついてきたんです。わしは其奴を押倒して、胸のところを膝で押へつけました――家内の奴も眼が覺めてぢつと二人を見てました。恐ろしさで口がきけないのです。たゞぶる〳〵震へて駄々子のやうにめそ〳〵泣いてましたよ。わしは倒れてゐる情人の眼を覗きこんで笑つてやりました。『何にも手荒いことはしねえ心算だ。女が滿足するまではお前は勝つたとはいへねえんだぞ。たゞもう少しばかりこゝにゐて貰ひたいな』男はぢつと見つめてゐましたが口をきゝませんでした。男の手足を縛りつけて動けないやうにしました。

それから、ナイフをとると家内のところに行きました。家内はその青い眼をかつと開いて憐れみを乞ふやうな目つきでわしを眺めてゐました――そして、四六時中その小さな手で苦悶の樣を示したり、震へたり、泣いたりしてゐました。わしは、そのキラ〳〵光つた鋭い刃を襴をも通れと女の軟かな白い肉體に突き通しましたよ――男は苦悶のあまり泣き始める――女の心臓の血は、深紅色の潮のやうにどつと湧き上り、着てゐた眞白の寢卷を派手な色で染めました。初めは、腕を上げましたが――やがてがつくりと枕に倒れて、たうとう死んでしまつたんでさあ。次にそのナイフを女の死體から拔きとつて、ヴェニスから來た青二才の戒の繩を切つてやつた。ナイフは彼奴に呉れてやりましたよ。」

「死んだ女の思ひ出にかい。もう一月もしたらあべこべにあんたがやられてゐたところだね。」と私がいつた。

「男は狂人みたいに怒りまして家を飛び出すと警官を呼んで來ました。勿論、わしは人殺しの罪で裁判を受けましたが――これや人殺しぢやないんです。正當なことなんです。裁判官が酌量すべき事情があるといつてくれました。當然でさあ！　裁判官だつて家内持なんだからわしの場合を同情してくれたまでゞす。ね、お分りでせう。さういつたわけであのロマニ家の寶石づくめの豪勢な女が大嫌ひなんです。あの女はわしが手にかけた家内とそつくりですよ。あのにた〳〵笑ひと、子供つぽい目つきといひ。ねえ、もう一度いひますが、あの女の御亭主さんが死んだことは本當に氣の毒です。思

つてさへ辛いんですよ。何故つて、若し生きておいでになつたら、屹度いつかはあの女を殺しちまひますからね――さうですとも！　――屹度殺つちやいますとも。」

第六章

私は彼の話を聞いていくうちに、なんとなく心臓が痛くなつていくやうな氣持がして、氷のやうに冷たいものが血管の間をあれ狂ふのであつた。私はこれまでニーナを見たものなら誰だつて彼女を愛し、尊敬するやうになるに違ひないと考へてゐたんだつたが。この老人が偶然にも馬蹄にかゝつて倒れた時に、(このことは私も妻の口から聞いてはゐないが)、馬から下りて男の傷の程度を聞きたゞすくらゐはしてやらなければならなかつたのに、やつぱり若い者だから、そこまで氣が附かなかつたのであらう。勿論、腹から悪意があつたわけではないだらう。彼女がこんな老耄の老人さへも敵にしたのだと考へると、私は恐ろしくなつたのだ。しかし、私はなんとも言はなかつた。自分の素性を知らせたくなかつた。老人は私が口を開くのを待つてゐたが、いつまでも黙つてゐるのでいらゝしてきた。

「さあ、おつしやい。お友達！」と子供のやうな熱心さで迫つてきた、「わしだつて立派な仕返しをしたぢやないですか？　神様御自身だつてこれ以上出來つこありませんや！」

「あんたのお内儀さんは、當然の仕打を受けたんだと思ふね、だが、どうも殺したゞけは成出來ない。」かう私がいふと、彼は急に私の方に向きなほつて、狂氣じみた恰好で頭の上に兩手を擧げたのである。その聲は、苦しさうな怒鳴り聲に變つた。

「人殺しだつていふんですね――ハ、――ハ、！　それで結構、いや、そんなことはありません。彼奴こそわしを殺したんでさあ、實際の話、彼奴が男の腕にもたれて睡つてゐるのを見た時にわしは殺されたも同然ですからね――彼奴は一突でわしを殺したんです。わしの身體の中の悪魔が立ち上つて素速い仕返しをやつてくれたんでさあ。その悪魔は今でもわしの中にゐます。元氣のある、強い悪魔がね！　だから疫病なんてちつとも怖くはありません。悪魔が死を追つぱらつてくれるんですから。でも、いつかはその悪魔もわしを置き去りにしてゆくでせうよ。」こゝで彼の聲はだん〳〵と弱くなつてきて、「さうですよ、いつちやいますとも、さうしたらこのわしは何處か暗いところを探して寢ることにするんです。今までは餘り寢られませんでしてね。」彼の眼は大分惱ましげに私を見た。

「軈てまた彼は靜かに續けるのであつた、「こんなにわしの記憶はほつきりしてゐますよ。誰だつて澤山のことを考へたら睡られませんからね。もう隨分になるんだが、毎晩彼奴のことを夢に見ます。手を苦しさうに動かして、青い眼でぢつとわしを見つめて、恐ろしさうな呻き聲を出してゐるのが聞えるのでさあ。毎晩ですよ、毎晩ですとも！」こゝで彼は息を呑んで、もう疲れたといふやうに兩手を額に當てた。それから突然、夢から覺めたやうに、私が始めてこゝへ入つてきたと同じ眼つきにな

つて私を見つめたが、軈て低い聲で笑ひ出した。
「一體この記憶つて奴は妙なものですなあ――妙ですよ！　ねえ、かうやつてわしはいろんなことを覺えてゐるが、その間貴方のことはすつかり忘れてしまひましたからなあ！　だけども何が御入用だか知つてゐますよ――服でせう――さうだ、それがお入用だつたのだ。わしはわしでまたその代金が欲しいと、ハ、！　どうです。英國の旦那のこの立派な服ぢやいけませんかね、いやですか！　よござんすよ、直ぐ他のを探してあげますから――辛抱か何より肝腎でさあ！」
　そこで彼は店の後にあるごた〳〵した品物の山の間を探し始めた。さうやつてゐる彼の恰好が如何にも痩せてゐて氣味惡かつたから、何だか腐肉を食べてゐる老耄の兀鷹を思はせるところがあつた。しかし可愛さうにも思へる。ある意味では同情もした。一生を不愉快で過してきこたの頭の少し足りない人間が氣の毒であつた。彼の運命と私の運命の間に、どんな相異があるだらうか？　私はたつた一晩苦しんだゞけで濟んだ。毎時間々々苦惱と悔恨の情に責められてゐる彼に較べればどんなに小さいものか？　この男はニーナが思ひ遣りのないことに對して憎しみを感じてゐる。勿論彼に憎まれる女はニーナだけではないのだ。いや、凡ゆる女が彼の敵なのだ。老人が自分の商賣品の古着類の間を探し廻つてゐるのを見るとだん〳〵と氣の毒の情が增していつた。そして、私はこんな生き甲斐のない老人を徒らに苦しめて生きながらへさせ、町でも丈夫な人間だけはどん〳〵倒していく疫病の眞意を疑ひ始めたのである。この老人にとつては墓場こそ一番樂な安息所ではないか！　その時老人が

嬉しさうな顏で此方をふりむいた。
「ありましたよ、恰度旦那にお似合なのがね。珊瑚取の奴ですがね。旦那、漁夫の服でもかまひませんかね。赤い帶がついてゐて帽子から何か元の通りでさあ。これを着てゐた人は旦那くらゐの脊丈でしたよ。屹度旦那にもぴつたり似合ひまさあ。これには疫病は着いてゐません。鹽水がすつかり浸みてますからなあ、それに砂と海藻の匂ひがします。」
　彼はさう言ひながら私の目の前で粗末な服を廣げて見せた。私は別に氣にも止めないといつた風に見てゐたが、
「これを着てゐた人は丙儀さんを殺したかね？」とにや〳〵しながら尋ねた。老人は頭を振りながら、廣げた手を馬鹿にしたやうに動かした。
「どういたしまして、馬鹿でさあ、自殺したんですからね。」
「どうしてだい？　故意か偶然にか？」
「なに、ちやんと知つてのことですよ。たつた二月前のことですがね、黑眼の、性なし女のためでさあ。その女はソレントに住んでゐて一日中笑つてゐるやうな女でしてね、男の方が長い船旅に出かけて、女の頸にかける眞珠と、髮のピンに珊瑚を買つてきたんでさあ。二人の間には夫婦約束があつたんですよ。上陸すると女が波止場に出迎へてゐたので、早速例の眞珠と珊瑚をやつたんです。ところがそれを女が投げ返して、もうお前さんは嫌になつた。なあんていふのでさあ。それだけなんです。

男の方ぢや一生懸命女をなだめましたが、女は山猫みたいに怒つてましてね、恰度わしも大勢の人とその波止場の周圍で見てたんですが、女は黒い眼をキラ〳〵させて、足はバタ〳〵やる。ギュット脣を咬んだまゝ、心臓を今にも身體が破れやしまいかと思はれるほどはづませてましてね。なに、たかゞ市場の娘つ子だつたが、まるで女王様みたいな權幕で、『もうあんたなんて嫌になつた！ 何處かへ行つちやへばいゝ！ もう二度とあんたの顏を見たくない』こんなことをいふんです。男の方はいゝ身體の强さうな男でしたが、もうふら〳〵して、脣をふるわせながら眞青な顏をしてゐました。頭を垂れてゐましたが、くるりと振り向くと、あつといふまに波止場の端から飛び込んぢやつたんです。何しろ泳がうとしなかつたんですから直に波に呑みこまれちやいましてね、まあ石みたいにどん〳〵沈んじやいました。翌朝男の死體があがつたもんでわしが奴さんの着物を二フランで買ひましたつけ。四フランなら旦那にお賣りしませう。」

「で、その女はどうしたい？」

「その女ですつて、先刻いつたやうに一日中笑つて暮してまさあ。毎週新情人を取り換へてね、そんなこたあ全く平氣ですよ。」

私は財布を出した。「ぢや此奴を貰つて行かう。で、こゝに六フランはある。二フラン餘るわけだが、この二フランで何處か見えないところで着物を着かへさせて貰ひたい。」

「えゝえ、よろしうございますとも。」私が銀貨を一々數へがなら老人のごつ〳〵した手に渡してやると、彼の身體が貪慾さうに震へた。「氣まいのいゝ旦那のこつた。どうとも勝手にして下さい！ これはわしの寢室でね、大したもんぢやないが、たゞ鏡がある——家内の鏡ですよ——奴のたつた一つの形見でさあ。ぢやかういらつしやいまし！」

彼は其處いら邊に一面に置いてある衣類の間を時には ひつくりかへりさうになりながら、よろめいて先にたつて行つたが、軈て壁に切りこんだらしい小さな扉をあけた。さうして嫌な匂ひのする小つぽけな戸棚のやうなところに私を入れた。そこには貧弱な藁蒲團の寢臺が一つと、壞れ椅子が一つあつた。小さな四角な窓硝子から洩れてくる光が、四邊のものをはつきりと見せてゐた。その窓の側に先刻いつた鏡がかゝつてゐた。綺麗な、銀をちりばめた古風な出來で、大分高價なものとは直ぐ分つたが、一寸の間はどうも覗きこむわけにはゆかなかつた。老人が得意氣な顏でこの小部屋の内側から先刻の扉を指し示しながら、

「この錠でも鍵でもみんなわしが作つたのですよ。なか〳〵乙でがつしりしてゐるでせう！ 昔はかういふことにかけてはいゝ腕を持つてゐました——尤もそれが商賣でしたがね——ところが例の朝になつて家内とヴェニスの歌唄ひが寢てるところを見つけてからといふものは、すつかり頭が狂つて、仕事の方は一切忘れてしまひました。どうしたものですかね、此奴が漁夫の服ですよ。どうかゆつくり着て下さい。扉は閉めてね。部屋の中はどうぞ御勝手にお使ひ下さいまし。」

さうして老人は一、三回親しさうに頭を下げながら出ていつた。私は彼の忠告に從つて扉に鍵をか

けた。それからゆつくりと壁に掛つてゐる鏡のところに歩いていつて私の姿を映した。苦い苦痛が私の全身を襲つた。亭主の眼に間違ひはなかつた。私は年をとつてゐる！　普通二十年苦しんでも、こんなに恐ろしい變化はしてゐないだらう。病氣のため顏は痩せ、苦惱の皺で深く刻まれてゐる。眼は後方にずつと凹み、その物凄い光の中には墓穴で味つた恐怖の跡を止めてゐる。いや、それよりも頭の毛が眞白だつた。今朝途中で私に葡萄を賣つてくれた男の驚きが今になつて始めて分つた。この私の不思議な姿を見たら誰だつて驚くに違ひない。私だつてこの姿が自分のものだとは思へないのだ。妻やギドーは見分けてくれるだらうか？　どうも疑はしい。かう考へると急に悲しくなつて涙が兩眼に溢れてきた。急いでそれをふき拂つた。

「しつかりしろ、ファビオ！　男らしくなれ！」と腹立たしく私自身を叱りつけた。「髪が白からうと黑からうとそんなことがなんだ？　心さへ眞實なら、顏なんてどう變つたつていゝぢやないか？　それは初め一寸見た時には愛しい彼女も顏色を變へるだらうだが、お前の苦みが分つたなら、今までよりもずつと優しくしてくれるだらう。彼女の抱擁の力で、お前のこれまでの苦みも消え失せ、もう一度若くなれるぢやないか」

かうして私は自分の沈んでいく氣持を鞭打ちながら、ナポリの漁夫の着物を大急ぎで着始めた。その馬鹿に大きなズボンには深いポケットが二つあつたので、私が山賊の棺桶からとつてきた金と寶石の皮囊を入れるのに好都合だつた。

大急ぎのお化粧を終つた時に、今度は微笑を浮べながら、もう一度鏡を覗きこんだ。先刻とは大分變つた。なか〳〵立派だ。派手な漁夫の服裝が私によく似合ふ。赤い帽子が額の上までふさ〳〵と垂れ下つてゐる眞白な捲き毛の上にちよこんとのつかつてゐる。私の凹んだ眼だつてもう直き樂しい目に會へるのだなと思ふと嬉しさうに輝いてゐる。それに、これからはこんな衰へて憔悴した顏をしてゐなくても濟むやうになるだらう。轉地療養でもしてゆつくり休めば、きつと前のやうな元氣のある圓々とした顏になれるだらう。この眞白な捲き毛も昔のやうに黑くなる。假りにいつまでも白かつたとしても、世の中には若い男の顏に老人の髪の毛が生へてゐるといふ場合を褒めてくれる人もあるだらう。

服を着終るとこの見すぼらしい小部屋の錠を開けて老人を呼んだ。彼は前屈みによろ〳〵とやつてきたが、側に來て私の顏を見上げた時に驚いた餘り兩手を擧げて、

「やゝ、これは！　これは立派ですぞ——お立派ですぞ！　えゝ、なんてまあ立派な脊の高さ、肩の廣さ、たゞお年を召していらつしやるのが殘念ですね。尤も、お若かつた時には强かつたで御座んせう！」

私の力を大分頼りにしてゐるやうなので、私は冗談半分に上着の袖を肩までまくり上げて、

「あゝ、强いつてばね、今だつて力はうんとあるよ、ほら！」

彼はぢつと私の腕を見つめてゐた。そして、その黃色の指で半分は大分お氣に召したやうに、半分

はこりや不思議だといつた顔付きで私の裸の腕をなぜ始めた。筋肉を掴みながらまるで子供のやうに、いや、泣上戸のやうに褒めるのであつた。

「見事、見事！　獅子みたいですよ――そつくりだ。さうですとも、これなら何だつてぶつ殺せまさあ。あゝ、わしも昔はこんなでしたね。撃劍だつて上手かつたんですよ。いゝ刀なら七本の絹絲を、一絲も亂さず、しかもたつた一打ちでスパリとやられたもんでさあ。まるでバタを切るやうにね、あんたゞつてやらうと思へば出來ますよ。腕次第でさあ、腕が強かつたらどんなもんだつて一つたゝきで殺せますよ。」

彼はその小さなぼんやりした眼で如何にも私の性來や氣質を聞かしてくれといふ目付きで私の顔を見守るのであつた。私は急に彼の方から向を變へると、ぬぎすてた着物を示して、

「ねえ、これやあんたにやらう。大したもんぢやないんだがな。それからもう三フランあげるから私に合ひさうなのを探してくれ。」

彼は嬉しさうに兩手を握つて、この法外な追加の金に對してありとあらゆる讃辭を浴びせた。そして旦那のやうなきまいのいゝ方ならこの店のものはなんでも御自由になすつて、といひながら今私の註文した品々をそこに出した。私はそれを身につけた。そして、すつかり用意が出來たので、もう何時でも家に歸れる恰好で立つてゐた。が、ある一つのことを決心した。こんなに變つてゐるから白晝にロマニ家に歸つていつて、だしぬけに妻を驚かすわけにもゆかぬ。女は脆いものだから。急に私が

現れたら彼奴は非常な衝動を受けてどんな大事になるかも知れない。日沒まで待たう。それから裏道傳ひに我が家にしのびよつて、先づ召使の一人に事情を打ち明けよう。ことによつたら友達のギドー・フェラリに會へるかも知れない。そしたら私が死から蘇つたといふ吉報を諄々と說いて、尙私の容貌が變つたことも豫め話しておいてくれるだらう。こんな考へが次から次へと浮んでゐる間に老人は頭を横にかしげて私の横に立つてゐたが、

「遠くへいらつしやるんですか？」と恐る〳〵聞き始めた。

「さうだ、とても遠いんだよ、」

彼は私の袖をぐつと引つぱつて眼を恐ろしく光らせながら、

「おつしやつて下さい。誰にも言ひませんからおつしやつて下さい。女のところに行くんぢやないのですか？」とせきこんで尋ねる。この質問にいくらか度肝を拔かれて、幾分蔑みの氣持で靜かにいつた。

「さうだよ。女のところへ行くんだ。」

と彼は急に薄氣味惡く笑ひ出した――顔を妙に歪めて、身體をびく〳〵させながら氣味惡く笑ふのである。

私は嫌な奴だと思つて彼の顔を眺め、私の腕を捕へてゐた彼の腕をふり拂つて店の入口に進んだ。すると彼は餘り笑ひ過ぎたゝめに溜つた涙を拭ひながら、よろ〳〵と私の後からついて來た。

「女のところへ行くんですか！　ハヽ！　あんたが殺られるか、それとも相手が先か！　女のところへ！　いゝですよ。結構でさあ。行つてやりなさい。行つて！　あんたは強いんだ。強い腕があるんだ。行つてやんなさい。女を探し出して――殺つちやうんですよ！　さうだとも、あんたにやた易い仕事だ。朝飯前さ、行つて殺つちやいなさい！」

彼は低い戸口に立つて口を開けたり、指を指してたりしてゐた。その痩せた身體と不氣味な顏が私にハインリッヒ・ハイネが書いた。あの聖者の頭に薪をのせてゐる小惡魔の樣子を思ひ出させた。私は、「左樣なら。「となにげない調子でいつたが返事をしなかつた。私はゆつくりと歩きだした。もう一度ふりかへつて見ると、敷居の上に立つて、妙な風に口をひんまげ、鉤型の指でなんだか見えないが空中のあるものをギュット締め殺すやうな眞似をやつた。私は町に下りて、それから廣い通りに出たが、耳の中には未だに（行つて殺つちまいなさい！）といふ聲が響いてゐたのである。

第七章

一日がとても長く思はれた。町を方々歩き廻つたが知つてゐる顏には殆んど會はなかつた。それといふのが金持階級の住民はみんなコレラを怖れて何處かへ行つてしまつたが、家の中に閉ぢ籠つたりしてゐるからである。何處へ行つても疫病の殘酷な痕跡を見ることが出來た。殆んど總ての町角で葬

式に會つた。またある時は、ある開いた家の戸口で大勢の人が死體を實に小つぽけな棺桶につめこんでゐるのを見た。手や足を折り曲げて肩をギュウ〳〵いはせてゐる。いや、骨がギュウ〳〵鳴るのさへ聞えるのだ。實に嫌なものである。この殘酷な遣り口を一寸の間見てゐたが、軈て私は大聲でいつた。

「確に死んだかどうか確めた方がよくはないか？」

すると墓掘人が吃驚して私の顏を見つめた中には笑つてから罵るものもあつた。

「そんなことがあるものか。若し死んでないと分つたところで、俺は此奴の首をへしまげてやるんだ！　だが、コレラにやり損ひはない。確に死んでゐるんだ――見ろ！」さういつてその男は死體の首を、棺桶の兩側にまるで材木でもぶつけるやうな樣子でたゝきつけるのであつた。この光景に嫌氣をさして向をかへると、一言もいはずに更に目拔きの大通りにと進んでいつたのである。そこでは五六人の人が塊つてお互に熱心な、しかしおず〳〵した目で見交はしながら、低い聲で話してゐた。その囁きが私の耳に聞えた、「王樣だ！　王樣だ！」みんなの頭がある方向に向けられた。私も亦、固唾を呑んでそつちの方を眺めた。それは二三人の威風堂々とした紳士に守られてゆつくりと進んでくる勇敢無比の專制君主、民間に評判のいゝ伊太利のウンベルト王であつた。彼は今、疫病に最も手酷い打擊を受けたこの町で一番汚い家々をお見舞遊ばされる途中であつた。王はこの疫病を追ひ拂ふためには、煙草さへも口になさらなかつた。王のお足は英雄のやうにしつかり、ゆつくりしてゐる。

そのお顔は人民の苦しみに大御心を痛めさせられたのか、大分お悪い。私は脱帽して御行列を見守つた。王の鋭い優しいお眼が私の上にそゝがれた。

「なか〳〵面白い風體をしてゐるのう！」とその從者の一人に仰せられてゐるのが聞えた。もう少しで私は前に進み出て、そのお足の元に身體を投げ出し一部始終を聞いて戴かうと思つた。あの敬愛し奉る國王陛下がこの私を、これまで屢々、しかも御懇切にお話し申し上げたことのあるこの私を少しも御氣付にならないのかと思ふと、情なく、不思議にさへ思へた。毎年、私がローマに行く時には、宮殿の舞踏會に列したが、そこの客人とファビオ・ロマニ家の客人と較べると數に於いては殆んど大差がなかつた。一體、ファビオ・ロマニとは誰のことをいふんだらうと愚しくも訝り始めたのである。あの華やかだつたファビオ・ロマニといふ名前はもうこの世にないのだ。（白髪頭の漁夫）がそれにとつて代つたのである。しかし、こんなことを考へながらも、どうも王に話しかけることは出來兼ねた。他の人でもさうであるが、何か一種の敬意といふやうなものが私を引きとめたのである。王は一番危險な町々を通つて行かれたが、お見受けしたところ薔薇の花園をでも愉快に歩いていらつしやるやうな御樣子だつた。王は死人と、死に瀕した病人の寢てゐる汚い家の中に靜かに入つていかれる。そして、悲しみにやつれ、恐ろしさに泣いてゐる人達に激勵の言葉を賜はつた。みんなは、涙に濡れた眼に驚きと、感謝の念をこめて王を見つめてゐた。金銀の錢が可哀さうな貧乏人の手に收められる。今にもあぶないといふ病人などは王自らの御介抱を受けた。母親達は子供を腕に抱いて膝ま

づき王の祝福を祈つた。——しかも王は自分にはそんなことをして貰ふだけの價値がないと思はれてか、優しくおためらひになりながら、父親のやうな優しさで一々それにお答へになつた。大きな眼をした髪の毛の黑い女の子が、王のお道筋に轉がり出てお足を接吻したかと思ふと、急に勇ましく立ち上つて、

「私助かりましたわ。いくら疫病だつて王樣と一緒の道を歩くことは出來ないんだわ。」

王はお笑ひになつて、優しい父親が駄々子の娘を見るやうな樣子で御覽になつてから一言もいはずに歩を進められた。次に王の注意を引かれたのは町なかの一軒のひどく貧乏な家の戸口に立つてゐる男女の一群であつた。なんだか大分騷がしくいひ爭ひをしてゐる。二三の墓掘り人が、口汚く聲高に罵り合つてゐる。女の中にはひどく泣いてゐるのもある。その眞中に死體を待つばかりの蓋を開けた棺桶が置いてあつた。從者のうちの一人が王の前に進み出て何か告げたと見えて、みんな今までの騷ぎを止めてピタリと靜まつた。男は脱帽し、女は泣き聲を抑へた。

「どうしたのだね？」と王が靜かにお尋ねになる。暫くの間みんな默つてゐる。墓掘りもすつかり畏れ入つてかしこまつてゐる。その時、太つて眼を眞赤に泣きはらした人のよさゝうな女が人々の間を掻きわけて前に出ると話し始めた。

「聖母樣と聖者樣が國王樣を、お守り下さいますやうに！」彼女の聲は鋭い。「このごた〳〵は直に濟んでしまひますから。こゝにゐる恥知らずの豚共が。」と墓掘り人を指して、「私共が構ひさへしな

ければ、もう一時間待つくらゐならいつそ殺してしまはうと此奴たちが申します――それも一時間なんてかゝりませんのに！　娘は死んでゐるのでございます。陛下、それに息子のジョバンニがどうしても離さないのでございます。兩腕でしつかと娘の身體を抱いて離さないのでございます。あゝ、どうしたものでございませうか？　娘はコレラで死んだのです。私共がなんと申しませうとも息子は離れたがりません。その上、此奴たちが早く埋めろと申します。若し無理にも離しましたら、あの子は氣が狂つてしまひませう。たつた一時間でございます陛下、そのうちには坊様も來られてジョバンニによく因果を含めて下さいますでせうに。」

王は片手を上げられて、命令するやうな恰好をなされた――すると前にゐた群集が道を開いたので問題の死骸が横はつてゐるその家の中に入つてゆかれた。その後から從者がついてくる、私もまた入口の隅に立つことが出來た。眼の前の光景は實に悲慘を極めたもので、どんな人だつて心を痛めたこと〻思ふ――ウンベルト王御自身すら帽子をとられてその場に立ちすくんでゐられた。その一つの汚らしい藁蒲團の上に未だうら若い娘が寢てゐた。その美しさはあの無殘な死の神さへどうすることも出來なかつたと見えて、今でもあり〳〵と生前の容貌がしのばれるのであつた。硬直した四肢や顏や手が蠟のやうに青ざめてゐるのを見なかつたら、誰だつて睡つてゐると思つたゞらう。死體の側に、死體を隱すやうな位置に、一人の男が全く生氣なくうつぶせに倒れてゐた。この男もどうも死んでゐるとしか思へない。彼の兩腕はしつかりと娘の死骸を抱きしめてゐる。彼の顏は見えないが、それは

死體の冷たい胸にのつてゐる。男の抱擁からもう何の熱も受け取ることの出來ない冷たい死骸の側をはピッタリと寄り添つてゐたのである。陽の光が眞直にこの暗い部屋を矢のやうに貫いて、全光景を明るくしてゐた。寢臺の上の死骸、國王陛下の立姿、その周圍を取りまいてゐる人々の不安氣な思ひ餘つた顏付きなど――

「御覽下さいまし！　昨晩娘が死んでからずつとこの通りでございますよ！」と、先刻の女がすゝり泣きながらいつた。「あんまり堅く抱いておりますんで――指一本ほどかせません！」

王は前に進まれて不幸な愛人の肩に手をかけた。そして極めて優しいお聲をかけられた。その言葉が、周圍の人々には美しい音樂の調べのやうに思はれた。

「私の息子よ！」

返事がなかつた。女達は簡潔ではあるがこの王樣の優しいお言葉に動かされて感泣し始めた。いや、男達でさへ目頭が熱くなり始めた。

「私の息子よ！　わしはお前の王ぢや、何とか返事をしてくれないのかね。」

男は戀人の胸から頭をあげてぽかんと王の顏を眺めてゐた。その痩せこけた顏、くちゃ〳〵な毛、すさんだ眼付き――全く恐ろしい夢の世界に紛れこんで、自殺より他には逃げ道のなくなつた男の顏である。

「手をお出し、息子よ！」かう王は軍人のやうな威嚴のある聲で仰せられた。

非常にゆつくりと――また非常にいや〳〵さうに、どうにも抵抗出來ない磁力に引つぱられた人のやうに、あんなにも強く額を握りしめてゐた右手を離して、命ぜられた通りに前に指し出した。王はその手を御自分の手に取るとしつかりとお摑みになつて憐れな若者の顏をしげ〳〵とうち守られながら重々しく、さつぱりといはれるのであつた。

「愛には死はないのだ。若者よ！」

若者の眼が王の眼に會つた――堅く結ばれた口が解けた。そして、いきなり王のお手から自分の手を激しく振り離すとわつとばかりに泣き出したのである。國王は早速若者に腕をかけて、一人の從者の助けを借りて彼を、寢臺から起き上らせ、他の場所へ連れて行かれた。けれども若者は子供のやうに大人しくなつて、ひどく泣きじやくりながら出て行つた。そこにゐてこの光景を目擊した人々は、國王が側をお通りになる時に稱讚の言葉を惜まなかつた。王も亦それに叮嚀に答へられて一禮するとこの家を出たが、外に待つてゐた墓掘人のところへ來ると、さあお前達の仕事をしなさいといふやうな合圖をなさつた。そして、澤山の戰利品を持つて歸つた征服者に與へられるのなどゝは、較べものにならない歡乎と祝福の聲に送られて歩かれて行つた。私は王の姿が見えなくなるまで見送つてゐた――何だか王のやうな偉い方を見たゞけで力が出て來たやうな感じであつた――あの方こそ、まがふかたなく「身體中が王」でゐらせられるのだ。私は勤王家である。かういふ王を頭に戴けば、心ある人なら誰でも心服してしまふ。しかし、勤王家とはいふものゝ、いくら王だからとて、若し横暴飽く

なき暴君であつたなら、私は喜んで退位と死刑とを勸めたであらう！　實際、伊太利のウンベルト王ほどの天子は稀である。あの方を思ふと私の心臟は暖かくなる。かうやつてすつかり苦惱のためにうちひしがれた私にさへも、國王のお姿は、ピカ〳〵した御光に取卷かれた慈悲力の權化のやうに思はれるのだ。この光あつて伊太利の美しい顏は輝き渡り、昔の偉業完成の喜びに滿ちて微笑むのである。王樣の姿が見えなくなると同時に私もその場から去つて行つた。いつか私が病氣で倒れたあの料理屋に行つて見ようと思つた。やうやつとのことで探り當てた。扉は開いてゐた。そして私の眼にあの太つた亭主のピエトロが夢中になつてコップを磨いてゐるのが見えた。眞中どころに私が寢た木のベンチがあつた。――あの上で私が死んだと思はれたのだ。私は入つて行つた。亭主が見上げて挨拶をした。私の方でも挨拶をしてからコーヒと、卷きパンを註文した。私は無造作にそこにあつたテーブルに坐ると新聞を讀み始めた。その間に亭主の方では大騷ぎで支度をしてゐた。彼は私が使ふための皿やコップを磨きながらだしぬけにいつた。

「隨分長く乘つてらつしやいましたね？　漁はありましたかね？」

一寸の間、私はまごついて何と答へていゝか分らなかつたが、軈て落着いて、笑ひながらさうだと答へた。

「で、あんたは？　コレラの方はどうです？」亭主は陰氣くさく頭を振つた。

「困つたこつた！　そんな話は止めて貰ひませうよ。みんなまるで密瓶に落ちた蠅のやうにどん〳〵

死んで行きますよ――あゝ、嫌なこつた！　――あんなことにならうとは？」彼は湯氣の立つコーヒを汲みながら深い嘆息を洩らして先刻よりもつと陰氣に頭を振つた。
「えつ、昨日何かあつたんですか？」勿論私は彼が何をいはうか知つてはゐたが、かう尋ねた。
「私はナポリは始めてなんでね、何も知らないんです。」
ピエトロは汗を垂らしながら太い親指で大理石のところを押へつけてそこに書いてある模様を物思はしげに撫で回はしてゐたが、
「あんたあの金持のロマニ伯爵を御存じないのですか？」
私は知らないと答へて、コーヒ茶碗の上に屈みこんだ。
「あゝ、さうですかい！」と半分唸るやうにいつて、
「そんなことはかまひませんさ――兎に角ロマニ伯爵はもうゐないんでさあ！　もうとつくにゐなくなつちやいました！　でもあの方は金持でした――王様ぐらゐの金持でした――さういつてますよ、みんなが――けれど、なんてまあむざ〳〵と！　昨日の朝ヴェネヂクト派のフラ・チプリアノさんが、あの方をこゝへかついでおいでになりましてね――疫病にやられたんです――五時間もするとお亡くなりになりました。」こゝで亭主は一匹の蚊を摑まへて握りつぶした。「この蚊みたいに脆くね！　さうです、今貴方がいらつしやる恰度眞向ひのベンチに寢ていらつしやつたのです。死體は日暮れ前には埋めました！」

私は巻きパンを切つたり、バタを切つたりする方に氣をとられてゐるといふやうに見せかけた。
「なんでもないぢやありませんか？　金持なんてどうでもいゝぢやありませんか――金持だつて貧乏人だつて死ぬ道理は同じなんだ。」
「その通りですとも、その通りですよ。」とピエトロがもう一度唸るやうに答へた。「何故つて、あんな貧乏なチプリアノさんさへ駄目だつたんですから。」
私は驚いたが直に心を落着けた。
「なんですつて？」いかにも無造作に尋ねた。「何處かの聖僧のお話ですか？」
「えゝ、未だ聖徒式をなさつてはゐませんが、そのくらゐの價値のある方です。こゝへ死にかゝつたロマニ伯爵をつれて來たヴェネヂクト派の坊さんですよ。あゝ！　あの方があんなに直に神様のお召しに與るんだと少しでも知つてゐたら！」
妙な氣持に襲はれたので、「死んだんですか？」と私は叫んだ。
「殉教者のやうな立派な死に方でね！　多分伯爵様から疫病が傳染つたんだと思ひがすね、なにしろ最後まで傍につきゝりでしたから。伯爵様に聖水をかけなすつて、棺桶の上に御自分の十字架をお乘せになりました。それから伯爵様の身につけていらしつた時計と指環と煙草入れとを持つてロマニ家へおいでになつたんです。若い伯爵夫人に會ひ、自分からそれ等の品物をお渡しになつて伯爵様の死んだことを知らせて來なければならないと仰有いましてね。」

可愛さうなニーナと心の中で思つた。そして妙な好奇心にかられて、「夫人はひどく悲しまれたかね？」

「そんなこと知るもんですか？」と亭主はがつしりした肩をゆすぶつて、「坊様はたゞ夫人が昏倒したとしか申されません。しかし、それがなんでせう？　女つていふ奴はなんでも昏倒しちやうんです――死骸は申すに及ばず、鼠一匹見たつて昏倒しちやうんです。で、今もいつたやうにチブリアノ様は伯爵様の埋葬までお見屆けになりました――それから歸つてくると間もなく容態が變つて今朝方お寺でおなくなりになりましたよ――あの方の魂が安らかに睡れますやうに！　そのことはつい一時間ばかり前に聞いたんですがね。あゝ！　お偉いお方だつた！　生前私に天國に昇せてやるとお約束なさつたが、私はその言葉をいつまでも信じてゐるんですよ。」

私は食事を途中で止めてそのまゝ向うへ押しやつた。食べてゐても咽喉を通らないのだ。こんなにも貴い辛抱強い自己犧牲精神のあるお方に對して、もう少しで涙を流しさうであつた。この臆病な、元氣のない人々で滿ち〳〵た世界からまた一人英雄が消えて行つた！　私は默つて坐つたまゝ深い悲しみにとざゝれてゐた。亭主が妙な顏で私を見上げた。

「このコーヒはお氣に入りませんか？　それとも、そんなに飢じくはありません？」私は、無理に笑つた。

「いや、あんたのその話を聞いてゐると鹽風でどんなに腹をへらしてゐるものでも食べられなくなりますよ。實際ナポリといふところはいつでも他國人に悲しい御馳走するところですな！　その死人だとか、病人だとかの他に何か話はないのですか？」

ピエトロは非常に氣の毒だといふ樣子を見せて、

「全くでさあ！　本當にそんなことばつかりですよ。だつてどうもしやうがないでせう？　これや疫病と神樣の思召しの所爲でせうよ。」

この最後の言葉を聞いてゐるうちに、急に私の眼は今この料理店の入口をゆつくりと歩いて行つた人影を認めて、それに釘づけになつた。ギドー・フェラリだ――私の友人の！　驅け出して行つて口をきかうと思つた。しかし、彼の顏付きや態度に何か私の氣持を押へつけるものがあつた。彼は煙草をふかしながら實にゆつくりと歩いてゐる――顏には微笑が浮び、外套には切り取つたばかりの薔薇が差してある――それは「フランスの光」といふ花で、私の屋敷の上の露臺に澤山咲いてゐる薔薇とそつくりだ。私はぢつと通り過ぎる彼を見つめてゐた――私の感情は一種の衝動を受けた。實際幸福さうな靜かな顏付きだ――あんな幸福さうな顏付きをつひぞ見たことがない――しかも、しかも、私の一番親友であるといふ彼が私が昨日死んだばかりだといふことを知らぬ筈はない。こんな悲しみがある彼が、まるでお祭に行く人のやうににこ〳〵笑つて喪章とは似てもつかない珊瑚色の薔薇をつけてゐる！　一寸の間すつかり氣を落したが――間もなく自分の餘りに察しがよすぎるのが可笑しくなつた。薔薇がなんだ！　自分がどんな顏をしてゐやうと一々人に說明してゐたら大變な話だ――あの

花だつて何心なく途中で取つたのかも知れないし、それとも娘のステラが彼に呉れたので、ステラを喜ばせるためにつけたのかも知れないのだ。だが、喪章をつけてゐない！　成程！　私が死んだのはたつた昨日だ！　社會の習慣だから仕方がないものゝ、兎に角餘り急なので上部の服裝までは手がまはらなかつたかも知れない。かう私はいろ〳〵と理窟をつけて滿足してゐたが、別にギドーの後を追つて行かうとは思はなかつた。私の生きてゐることを知らせない方がいゝ。

そこで亭主に向つて、「おいくらですか？」と尋ねた。

「なあに旦那、私は漁夫さんたちには餘り暴利ない心算でゐるんですから――でも今は不景氣でしてね、いつもなら朝飯なんか無料でお上げするんですが。これまで毎日々々旦那のお商賣の方にはいろいろと盡して上げましたよ。死なれたチプリアノさんがよくいつてましたけど、さうすれば聖ペテロ様が私を覺えてゐて下さるとね。一體聖母様にしてからが漁夫の面倒を見てやる人には特別の祝福を下さるんですよ。何故つて、使徒たちはみんな元は漁夫でしたからね。それに私だつてマドンナ様のお守護を臺なしにしたくはありませんよ――けれど――」私は笑つて一フラン投げてやつた。彼は早速それをポケットに入れて眼をきよろつかせた。

「だつてあんたは半フランも食べていらつしやらないのに、」ナポリ人には一寸珍しい男である。「でも屹度聖者様たちがその償をしてくれまさあ御心配には及びません！」

「私もさう思ふね。」と私は陽氣にいつて、

「左樣ならお友達！　商賣繁昌、マドンナ樣のお慈悲があるやうに！」

この挨拶の言葉はシシリーの漁夫たちの間ではよく使はれる言葉であるが、これを聞くと人のいゝピエトロは航海の安全を祈りますといふ意味の愛想のいゝ言葉で答へてくれた。それから彼はまたもコップ磨きにとりかゝつた。私は私で日暮までの間、この町で一番人通りの少い通りを歩き廻つて、私の幸福と愛の家庭に入つていくことを合圖する勝利の大旗のやうな日沒の眞紅の太陽を待ち憧れてゐたのであつた。

第八章

たうとう嬉しい、待ち憧れてゐた夜になつた。涼しい微風が起つて日中の燃えるやうな熱氣を吹き拂つた。そしてその代りに無數の花の香を運んできた。煌めく華やかな光が空の胸に燃え始めた――鏡のやうに動かない灣がその光を更に美しく反射させてゐる。私は激しい望みに身體中を緊張させてぢつと待つてゐた。太陽が透明な水の彼方に沈んでしまふのを待つてゐた――華美な夕映がだん〳〵と薄れて行つて、恰度飛び廻つてゐる天使の身體から落ちたふんわりした衣のやうに總てを押し包んでしまふまで――まん圓い滿月がその黄色い緣を地平線から覗かせるまで待つてゐた。そして初めて今までの熱望をやつと解放するやうにロマニ家に上つて行く昔馴染の道を歩いて行つた。私の心臟

は高く波打つ――手足は興奮で震へる――足どりは落着かずなんとなく危げなかつた――こんなにこの道が長く思はれたことはなかつた。たうとう大きな門に着いた――すつかり錠が下りてゐる。そこに彫りつけてある獅子は恐ろしい顔で私を睨めつけた。邸内の泉水の私語が聞える。息をつく度に、薔薇と、桃金孃の匂ひが流れてくる。たうとう家に着いたのだ！　私はにこりとした。全身は期待と嬉しさでぶる〳〵震へた。でも大門から入れて貰はうとは思つてない。たゞ長い間求めてゐた人の優しい顔が見られゝばいゝのだ。さう思つて左手に廻つた。そこには冬青と松と、その間に蜜柑の木の按配してある路に通ずる小門がある。これは私の好きな散歩路だ。それといふのがどんな暑い晝間でも、こゝへ來ると氣持のいゝ木蔭があつたし、も一つには家族のものも私以外には滅多にそこを通らなかつたからである。ギドーも一緒にそこを散歩することがあつたが、私一人の方が多かつた。私はそこの木蔭を行つたり來たりしながら、何かの愛讀書を讀むとか、時には甘い空想に耽るのが好きだつた。この路はぐるりと屋敷の裏手に續いてゐて、こゝから用心しながら入つて行つて、アスンタ（ステラの乳母で、彼女の腕にもたれて私のお母さんも最後の息を引きとつたといふ古くからゐる忠實な召使の一人だ）にこつそりと話をしてみよう、かう考へた。

懐しい苔の小路を靜に辿つてゆくと暗い木々がサラ〳〵と音をたてる。實に靜だ――時々夜鶯が優しく鳴きだす、かと思ふと急にどつしりと枝を交へてゐる木々の蔭に脅えたやうに默つてしまふ。月光が樹間から奇妙な感じの光をばらまく。螢の大群が月桂樹の茂みから現はれ出て、闇の中

で女王の冠から解きほぐされた寶石のやうに輝き出した。オレンヂの木立のかすかな香を迷ひ出て、白い素馨の木の下闇をくゞつてゆく。私は目的地に近づくにつれて高鳴る胸を抑へながら歩を速めたのであつた。甘い空想と、激しい憧憬で一つぱいである――早くニーナの腕に抱かれたい――あのぞつとするやうな眼で優しく覗きこんで貰ひたい――ギドーと握手がしたい――そして、あのステラは今頃は寢てしまつてゐるだらうが、無理にも起して顔が見たい。あの子の優しい顔に接吻して、黄金色のあのふさ〳〵した頭を抱きしめるまでは私の幸福は終つてゐない。おや！　なんだあれは？　私はなにか見えない手に引き止められたやうに突然歩を止めた。そして耳を緊張させてぢつと聞いてゐた。あの聲……あれは華やかな陽氣な美しい笑ひ聲ではないか？　頭の先から足の先までぞつとした。妻の聲だ、私は銀色の鐘を鳴らしたやうな彼女の笑聲を知つてゐる。心臓がひやりとした。どうしたものかとそこに立止つた。彼女は自分が死んで永久に會へないのを知つてゐるのにどうしてあんなに笑ふのか！　急に木々の向うにちらつと白い服が見えた。私はぢつと、はやる自分の心を抑へて脇に身を避けた――そこはこんもりした茂みで、向うから見えない。もう一度この靜かな闇の中を笑聲がかんだかに聞えてきた――その餘りに陽氣なのが私の頭を鋭い劍のやうに貫いた。妻は幸福なのだ……樂しくさへあるのだ……この月光に浮かれて歩き廻つてゐるのだ。それなのにこの私は――今頃は自分の部屋に閉ぢ籠つてゐるか、小さな禮拜堂の祭壇の前に膝いて涙まぢりの聲で私の魂の安息を祈つてゐたかと思つたのに！　さうだ……こんなこともあらうと思つてゐた……

吾々男なんていふものは女に溺れた時には馬鹿になつてしまふのだ！　突然恐ろしい考が起つた。それとも氣かふれたのか？　餘りにもだしぬけな私の死のために、その衝動と悲しみがあの脆い頭を變にしてしまつたのかな？　さうして可愛さうに自分が何處を歩いてゐるか分らずに氣の狂つたオフェリヤのやうに歩き廻つてゐるのだ。そしてあの馬鹿々々しい陽氣さは狂つた頭の加減なのだらう？　さう考へるとぞつとした――私は木の下に屈みこんで尙もぢつと眺めてゐた。二人の人物が靜かに近寄つてきた――妻と友人のギドー・フェラリだ。さうだ……何も不思議はない――それが當然なのだ……ギドーは無二の親友なのだから……出來るだけのことをしてニーナを慰め元氣をつけてやるのが義務なのだ……だが待てよ！　……待てよ！　……私の眼に狂ひがあつたのか――妻は今たゞ身體を支へて貰ふためにギドーの腕にもたれてゐるのか――それとも！　私の脣から苦痛の聲にも似た恐ろしい咒の聲が飛び出た。あゝ、死んでゐた方がよかつた！　あのまゝ棺の中に靜かに寢てゐた方がよかつた。あの墓所の恐ろしさも、この今の私の苦痛に較ぶれば實に取るに足らないものだつた。私の頭の中では今日までの思ひ出が消えない火のやうに燃えさかつてゐる。私の手はこの瞬間の辛さを追ひのけようとして知らず〳〵堅く握られてゐた。私は懸命になつて自分のうちに湧き起る物凄い感情を抑へようとした――この隱れ場所にいつまでも、ぢつと默つてゐさせようとした。しかし、私はたうとう悲慘なこの喜劇の最後まで見てしまつた。自分を裏切つた二人の人間を啞然として見守つてゐたのだ。自分の名譽が、あんなにも信じきつてゐた人間のために、目茶苦茶にされてしまつたの

だ。しかも私は默つてゐる！　奴等は――ギドー・フェラリと妻は――直ぐそこまで近寄つてきたが、その樣子でも、その言葉でも此方からはすつかり分る。二人は私から三歩のところで止つた。男が女の腰に腕を卷く。女の腕は男の首に卷かれてゐる。そして、ぼんやりと男の背中にもたれてゐるのだ。それはこれまで私と彼女が一緒に歩いた時に幾度もやつたあの仕業とそつくりだ。彼女は胸のところにある赤薔薇――血のやうな赤薔薇を除いては全身白づくめだ。その赤薔薇をとめてゐるピンが月光に煌めく。私は殘忍な思ひに耽つた――あの薔薇が、血だつたらどうだ――あのダイヤモンドのピンが鋭い刀だつたらどうだ！　でも今の私には武器はない――私は彼女を乾き〳〵つた目で默つて見てゐた。綺麗だ――とても綺麗だ！　彼女の顏の美しさは少しも悲しみの跡を止めてゐない――眼はものうく澄んでいつものやうに優しい――脣は子供が笑つてゐるやうに可愛く開いてゐる――本當に無邪氣だ。その彼女が今喋つてゐる。魔力のやうな囁きの調べが私の心臟を動悸させ、頭を狂はせる。

「あんたお馬鹿さんね、ギドー！」と彼女が嬉しい夢を見てゐるやうにいふ。「ファビオがあんなに都合がいゝ時に死なゝかつたら今頃はどうなつてゐるでせう？」

なんと答へるだらうか？　ギドーが低く笑つた。

「あの男になにが分るもんですか？　貴女がすつかりまるめてゐましたからね。それに奴さん自惚でゐましたからな！　――何しろ人がいゝもんだから、貴女が他の男に手を出すなんて全然考へちや

ゐませんよ。」

今までは瑕のないダイヤモンド、眞珠のやうに純眞な女と考へてゐた私の妻！　彼女は今いくらか不安氣に嘆息をついてゐる。

「あの人が死んで嬉しいわ！　でもギドーさん、貴方少し大膽よ。こんなにちよい〳〵來たら、今に召使ひたちが五月蠅いわよ！　だからこゝ少くとも六ヶ月ばかりは喪に服さうと思つてるの――そのくらゐあれば他のいろ〳〵なことも考へておくことが出來るわ。」……ギドーの手は彼女の寶石をちりばめた頸飾をいぢつてゐた。そして、頭をかゞめると眞中の垂飾のあるところに接吻した。また――またやつた。よろしい、おやりなさいとも、こんな嬉しい時には心配なしに樂しむがいゝ！　その白い肉體を抱擁で包むがいゝ――その女は賣女なんだから幾度接吻しやうと構はない。私は木の下にうづくまりながら、そんな恐ろしいことを考へた。激しい怒りで私の頭の血は物凄い勢ひでうづまいてゐた。

「でもね、ファビオ君が死んだのは一寸可哀さうだな！　生きた時だつて立派に衝立の役はしてゐたんだから――吾々の行動をあんなによく看視してはゐたものゝ、やつぱりこれだけは分らなかつたのだ！」

頭の上の枝がキイ〳〵と音を立てた。妻は吃驚して周圍を見廻した。

「シッ！　あの人は昨日埋めたばかりなんだから――なんでも彼處いら邊では幽靈が出るといふ話よ

……この道ね――あゝ、こんなところへ來なければよかつたわ。こゝはあの人のお氣に入りの道なのよ。それに、こゝで彼女はいくらか後悔してゐるやうな口吻で、「なんていつたつてあの人は私の子供の父親なんですもの――貴方そのこと考へてくれなくては嫌だわ。」

「あゝあゝ！」とギドーは叫んでから語氣を荒くして、「僕はそんなことを考へるのは嫌だ。それどころか、彼奴が一つでも貴女の屑から接吻を盗んだかと思ふと癪で〳〵堪らない。」

私は半分ぽかんとして聞いてゐた。こんなことは結婚の法律にはないことだ！　すると夫には盗坊になるわけだ――接吻を盗むなんて。戀人同志なんて抱き合ふ時にしか本氣にはなれないのか。これを聞くと、私はもう少しでこの男を殺してやらうかと思つた――嘗ては兄弟よりも大事だつた私の友達！　君はこの暗い墓越しに眞青な顔をして君を見つめてゐる男の顔を知つてゐるか――君は僕の心の中に湧き返つてゐる怒りの强さを知つてゐるか――最早君の生命は一錢にも價しないといふことを考へたか？

「どうして貴女はあの男と結婚したんですか？」と暫くして彼が尋ねた。それまで彼は自分の胸の上に寢てゐた美しい捲き毛をいぢつてゐた。

彼女はつんとすねて身體をぶる〳〵と震はした。「何故ですつて？　それは私、尼寺が嫌になつたからですわ。尼さんの生活なんて馬鹿々々しく眞面目くさつて、それにあの人はお金持だし、私はまたひどい貧乏だつたでせう。私貧乏なんてとても堪りませんわ！　その時にあの人が私を愛してくれ

たんです。」こゝで彼女はその眼をいかにも憎しげに勝誇つたやうにきらめかせたのであつた。「さうですわ――あの人私に首つたけだつたのです――そして……」

「貴女はあの男を愛したんですか？」とギドーが激しく迫つた。

「愛したと思ひますわ――一週間か二週間の間はね。だつて誰だつて自分の夫だからそれぐらゐは愛するでせう。一體何のために結婚するの？　自分の都合のいゝやうに、お金や地位のためにでせう。そんなものみんなあの人私に呉れましたわ。」

「ぢや僕と結婚しても何も貰へないぢやありませんか。」とギドーが嫉たましさうにいふ。彼女は笑ひだして、その指環がキラ〳〵輝く眞白な手で男の脣を抑へた。

「そんなことありませんわ！　――それに、私新たに結婚するといつたことあつて？　それや貴方、情人としたら申分ないわ……でも他のことは……私わかんないわ！　私今は自由な身だわ――なんでも好きなことが出來るの。だから出來るだけこの自由を味ひたいわ。」

彼女の言葉が終らないうちにフェラリは自分の身體に女をぴたりと引きつけてしまつた。彼の顏は激情にほてつてゐた。

「ねえ、ニーナ、貴女は僕を馬鹿にすることは出來ないんだよ。斷じて！　僕はこれまで貴女のために苦しんで來た。僕が初めて貴女を見たのは、貴女とあの馬鹿野郎のファビオとの結婚式の當日だつた――僕はその時とても貴女が欲しくなつた――隨分ずるい考へだつたけれども決して後悔はしちや

ゐない。なんていつたつて貴女は女なのだ。天使ぢやないんだ。さう思つて時々待つてゐた。そしてその時が來た。僕は貴女に愛を求めた。まだ結婚生活が三月にならないうちにその話を貴女に打明けた。貴女は喜んで承知した。その話を聞いてゐるのが嬉しさうだつた。そして到頭僕を引つぱつた。貴女の身體に觸れさせたり、優しい日付きや言葉でどん〳〵僕を誘惑した。貴女は僕が求めてゐるものをみんな與へてくれた。それを今になつて何故辯明をするか？　今までではファビオが夫だつたのだが、今からは僕が夫だ――いや――貴女が僕を愛してゐるのだからそれ以上だ……いや少くとも貴女はさういつたね――前の亭主には嘘をいつたかも知れないが、この僕には駄目だよ。許さないよ！

僕はファビオを可哀さうだと思つたことがない――あの男は騙され易い。亭主なんていふものは女房に疑ひの眼を光らしてゐる他に仕事がないのだ。だから自分の名譽が地面にたゝきつけられるやうな放埒を女房にされたところでそれは自分の方に手落があつたんだから泣き寢入りする他仕方がない。ニーナ、僕は幾度でも繰返していふが、貴女は僕のものだ。どんなことがあつても僕から遁れられないのだ！」

この實に思ひ切つた言葉が彼の口からすら〳〵と出てきた。その滲み通るやうないゝ聲が闇夜の靜けさの中を力強く響き渡つた。私はそれを聞くとにやりと微笑した。彼女は男の腕の中で腹立たしげに藻掻いてゐる。

「放して頂戴、隨分亂暴ね！」男は直ぐに女を放した。あまり強く抱いたゝめに彼女の薔薇が苦茶苦

茶にされて、その眞紅の花瓣が一つ〳〵彼女の足もとの地面の上に舞ひ下りていつた。女はいかにも怒つたやうに眼をぎらつかせた。美しい廣い額にいら立たしい皺が出來た。そして男から目をそらして、冷淡に默つてしまつた。この態度が男を苦しめた。彼は前に飛び出して彼女の手を摑まへると矢庭に接吻でうづめた。

「許しておくれ、愛しい人。」と後悔したやうに叫ぶ。「なにも貴女を惡くいふ心算でいつたんぢやないんだ。貴女はなんといつたつて美しいんだ。それはことによると神樣か惡魔のやりそこなひに違ひない。兎に角貴女の美しさは私を狂人にする！　貴女は私の心臟だ、魂だ。あゝ、私のニーナ、そんなにいつまでも怒つてゐて、私の言葉を無駄にしないでおくれ。考へて御覽、僕達は自由なんだ。一生を長い樂しい夢にすることが出來るんだ――天國にもました樂しさ！　ファビオが死んだので僕達のところへ幸福が來た。そして今お互はお互のものになつた。そんなにつらくしないでおくれ、ニーナ。大人しくしておくれ。本當にこの世の中では愛が一番いゝことなんだから！」彼女は若い女王が不忠實の家來を許すやうな威張つた顏付きで笑つた。そして優しくまたも彼の腕に抱かれた。彼女の肩が男の肩に觸れた。私は夢を見てゐる人間のやうにぽかんと見てゐた！　二人はヒシとかじりついた……私の心は二人が接吻する度に、苦悶を新たにさせられるやうな氣がした。

「貴方は馬鹿よ、私のギドー。」と彼女はいつてその小さな指環のはまつた指で優しく彼の頭髮を摑んだ。「貴方は隨分圖々しいやきもち燒きだわ！　私はこれまで何度も貴方を愛してゐるといつたぢ

やないの！　貴方はあのファビオが露臺に出てプラトーを讀んでゐた晩のことを覺えてゐて？　あの人も可哀さうに！」とこゝで彼女はから〳〵と笑つて、「私たちは應接間で歌の稽古をしてゐたわね――あの時私は世界中で誰よりも貴方を愛してゐるといつたぢやないの？　覺えてゐるでせう！　それで充分ぢやないの！」

ギドーはにこりとして、彼女の金色の捲毛をなぜた。

「充分だよ、」さういつた彼には今までのやうなあせつたところはなかつた。「本當に充分だ。けれども色戀には嫉妬がつきものだ。ファビオは少しも嫉妬しなかつた――餘り貴女を信じ過ぎてゐたんだな――どうもあの男は愛人とする資格がない！　貴女のことよりも自分のことを考へてゐたのだ。幾日間も一人でヨットを乘り廻したり、旅行をしたりして平氣で妻を置いてゆくやうな男、自分の妻君はそつちのけにしてプラトーなどを讀み耽つてゐる男、そんな男には自業自得といふものがある。さういつた連中には結局女が永遠の謎に見える。世間で褒めそやすほどのこともない馬鹿な哲學者といふものだ。僕は、第一に貴女が踏んでゐる地面が、貴女に觸れてゐる空氣が嫉けてならない。ファビオがまだ生きてゐるうちはあの男が嫉けてならなかつたのだ。あゝ！」それから腹立たしさうに、「若し他の誰かゞ出てきて、僕と貴女とのこの關係に文句いつたら、僕は其奴の身體を刀の錆になるまでぶつ殺してしまはなければ安心がならない！」

彼の胸にもたれてゐたニーナはこの時はつとして頭を放した。

「また！　貴方は怒つてゐるのね！」
彼は彼女に接吻した。
「そんなことはないよ、愛しい人！　お前がいふやうに大人しくしてゐるよ。お前が僕を、僕だけを可愛がつてゐる間は。どうもこの路は少し濕つぽくて寒い――さあ、家へ入らうぢやないか！」
私の妻――いや、もうかうなつた上からは吾々の妻といつた方がよからう――はこれに同意した。
それから二人は腕を組むと、家の方へと〻つて返した。一寸立止つた。
「貴女に夜鶯の聲が聞えるかい。」
あれが聞えるかつて？　聞えないものがあらうか？　五月雨のやうなメロディーが其處ら邊のどの木々からも降つてくる――綺麗な、優しい、そして熱情的な調べがまるで小さな金色の鐘の音のやうに耳を打つ――美しい可愛らしい神の息吹を浴びた小鳥どもは、歡喜に胸を震はせながら愛の歌を唄ふのであつた、――その愛の歌は決して虚僞にも罪惡にも滲みてゐなかつた。あゝ！　我儘な人間共の情事とは全く違ふのだ！　この小鳥たちが唄ふ歌こそ、純眞な人生と愛とを語つてゐるのだ。これを聞いたらさもしい人間共は恥を感じないではゐないだらう。この鳥ぐらゐ眞實に語ることが吾々人間にあり得るだらうか？　吾々の日光に對する感謝の念さへ、冬の雲の中でも、百花の咲き亂れる春の朝でも、四季そのほぢめなく陽氣に唄ふあの駒鳥に劣つてはゐないだらうか？　いや、吾々は駄目なのだ！　吾々人間の一生は神への無力な敵對の長い歴史である。しかも慾望は限りなく、他人

を押へつけてまでも卑しい金錢のために苦しむ！
ニーナはぢつと聞いてゐた――輕い肩掛をもつと強く肩に巻くと、ぶる〻と震へた。
「私、あの鳥は嫌ひですわ！　あの聲を聞いてゐると耳が割けさうな氣がするわ――でも、あの人は夜鶯が好きだつたの。あの人いつでも唄つてゐた。」こゝで彼女は聲高々と、夜鶯と競爭するやうに唄ひ出したのである。急にまた口を閉ぢて笑つた。
「可哀さうなファビオ！　あの人が唄ふ時には屹度どこか間違つてゐるのよ。さあ、ギドーさん！」
そして二人のものは靜かに歩いていつた。その足どりだけを見てゐると、いかにも綺麗な良心を持つてゐる人間のやうに見えた。自分達の不義の幸福の世界には恐ろしい復讐の影なんか微塵もないといふやうな人達の足どりであつた。私は二人が遠くに消えていくのをぢつと見てゐた。暗い茂みからぐつと頭を出して、妻の光る白い服が一寸向うの木立ちの後に消えていくまで見守つてゐた。二人は行つてしまつた――今晩はもうこつちへは來るまい。
私は隱れ場所から飛び出した。今まで二人がゐたところに立つた。今自分が眼で見たことを、どうかしてはつきりとまとめたいと思つたが頭がぐら〻してゐた……光の輪が眼の前の空氣の中でぐらぐらと渦巻いた……月は血のやうに赤かつた。足もとの大地がぐら〻と搖れた。まるで生きてゐるんだが、それとも一度死んだ死體が幽靈となつてこの世に舞ひ戻つて、嘗ては美しかつた幸福の日の破片を力なく探し廻つてゐるのか――殆んど分らなかつた。私の周圍の壯大な宇宙も今はもう神の手

から見離されたやうに思へた。宇宙は私にとつてもう素晴しいものではなかつた。たゞ膨れ上つたからつぽのあぶくみたいなものだつた――蹴つとばして空間に飛ばせる悪魔の毬の玩具みたいだつた。あのキラ〳〵光つてゐる星、あのどつしりと葉を生ひ茂らした木々――この自然と呼ばれてゐる不思議な數々、いや、神様それ自身さへ一體何の役に立つのだ。神様はたつた一人の女にさへ誠を守らせることが出來なかつたのだ。私の愛してゐたあの女さへ！　あんな優しい姿の、あんなあどけない顔の妻さへも！　あの女は獣にも劣つた奴だ。自分の身體を金で賣る女の中でも一番劣等な奴だ。輕蔑していゝ女だ。しかも私の娘の母なのだ。私の子の魂に泥を塗つた女なのだ。あの女は生れながらに悪魔だつた。全身が恥づくめの女なのだ。しかも彼女は名譽などよりもずつとその方が嬉しいのだ。どうしてやつたものか？　この問題について少からず頭を惱ました私は、ぼんやりして大地を見つめてゐた。悪魔がそこから飛び出して來てうまい答へを與へてくれるかとでも思つてゐるやうに。あの女をどうしてやらうか？　あの私に背いた上部ばかりの友人をどうしてやつたものか？　突然、私の眼に止つたものがある。それは先刻ギドーが妻を抱いた時に彼女の胸から落ちた薔薇の花であつた。それが眞紅の貝殼のやうにまるまりながら落ちてゐる。私は脊をかゞめてそれを取り上げると、手の平にのせてぢつと眺めた。いゝ香がする。もう少しで接吻しようとしたが、いやと思ひ止つた。そんなことは出來ない。これは今の今まであの嘘つき女の胸にあつたのだ。可愛い口から嘘をつく恐ろしい奴だ。「行つて殺しておやりなさい」おや、どこかで聞いた言葉だ？　私はいろ〳〵と考へてみ

た。やつとのことで思ひ出した。そして私もあの古着屋の老爺と同じやうにもう人間ぢやないんだと思つた。あの男はそれでも自分の仇は打つた。しかも私は愚者のやうに機會を逃してしまつた。さうだ、永久にないのだ！　復讐をするにはいろ〳〵の道がある――中でも一番凄い、一番効果のある方法をとらねばならない――自分の名譽を傷つけた相手に出來るだけ長い間きくやうな殘酷な方法だ。成程――罪を侵してゐるのを見つけて、その罪人を殺すのは素晴しいだらう。しかしこのロマニ家のものが人々の見てゐる前で殺人の汚名を受けるなんて、いやこれではいかん。まだ他に方法がいくらでもある。いろ〳〵と考へ拔いた擧句なら同じ目的を達せる道がいくつでも見出せるのに違ひない。軈て私はゆつくりと痛む手足を伸してそこに倒れてゐる木の根に腰を下した。まだ指の中には先刻の薔薇の花が握られてゐる。耳の中で何かさわ〳〵とした音がする――口には血の味がした。私の肩は熱病人のやうに熱く乾きゝつてゐる。「白髪の漁夫」それは私のことだ。王様がさう仰有つたのだ。いつの間にか私は自分の着てゐる服を見つめた――自殺者が着てゐた服を。「あれは馬鹿ですよ。自殺したんですからね」といふ亭主の聲が聞える。

さうだ、確に馬鹿だ。あんな眞似はしたくない、少くとも今のところでは……なんとかしなくちやいけない――方法さへ分つたらなんでもしなくちや。その自分の方法を何處までもしつかりとやつてゆけたら？　こゝで私の考へは熱に浮かされた頭のやうに混亂しだした……薔薇の花の香がひどく私の神經を傷つけてゐたのだ――けれども未だにそれを棄てるわけにはゆかない。先刻私が見た抱擁の

思ひ出にとつて置かう！　私は財布を探し出すと口を開けてその赤い花瓣を壊さないやうに入れた。それをもう一度ポケットに入れた時に二つの皮嚢のことを思ひ出した。一つは金貨が入つてゐる。一つは寶石が入つてゐるあの皮嚢のことを……彼女にもつて來てやつたのに。墓地での私の冒險のことが再び思ひ出されてきた。私が生命と自由とを得ようと思つて猛烈に闘つたあの時のことを思ひ出して微笑ましくなつた。生命と自由！　それも今の私には、たつた一つのことを除いては役に立たなくなつた――復讐！　私はいらない人間だ。もう一度この世の中に歸つてくる必要のない人間だつたのだ。今ではあの財産もみんな妻のものになつてゐる。また妻の方でもこれは私のですと言ひ張ることが出來るであらう。とはいへ私にも財産はある――あの山賊が隱しておいた寶だけで一人の男の一生を保證するには充分だ。かう考へていくうちに、ある痛快さが心の中にぼんやりと起つてきた。金だ！　金さへあればなんでも出來る。金さへあれば復讐さへ買へるのだ。だが、どんな復讐がいゝだらうか？　私が望み得る最上の復讐――洗練された、完全な、そして假借するところのない。私は思ひに耽つた。夕べの風が氣持よく海の方から吹いてくる。風に搖れる木々の葉がざわ〳〵と意味あり氣に囁く。夜鶯がいつまでも美しく泣き續ける。天使軍の圓い楯のやうな月が後の眞青な空を背景として明るく浮び上る。私は時間の經つのも忘れて尙もそこに坐つてゐた。「あの人が唄ふ時には何處か屹度間違ふのよ！」とあの女がいつて笑つた。そのなんでもない笑ひさへこの私には冷たい鋭い切先のやうに感じられる。本當だ、あれは本當だ！　どこか間違つたところがある――この人生

の音樂のやうに、自分の聲には何處か間違つたところがある。吾々の心の中には、吾々が望み次第で一つの美しい階調の網を張る絲がある。しかし、それが女の笑ひ――女の身體――女の嘘のきらめく魔術に引つかゝると、さうすると！　そこに間違つた調べが出てくるのだ。偉大な作曲者の神自身さへ昔の靜かな調べをもう取返すことが出來ないではないか？　私はそのことを今度のことで悟つた。諸君も遲かれ早かれ老年に達する前までには悟ることがあるだらう。

「白髮の漁夫！」

あの王樣の言葉が私の痛んだ頭の中で幾度も〳〵繰返される。さうだ、實際私は變つたものだ。すつかりやつれて年をとつてしまつた……私以外には誰にも氣がつかない。さう思ふと突然あの考へが起つた。實に大膽な、斬新な、また實に恐ろしい復讐の計畫。私はまるで蝮に刺されたやうに飛び上つた。恐ろしい復讐の計畫で頭を燃えたゝせながら落着きなく其處らを歩き廻つた。一體この大膽な考へは何處から來たのか？　惡魔かなんかゞこの私の心に吹きこんだのか？　……さう疑ひながらも私は既に自分の計畫の細々したことまで考へてゐた。この目的を遂げるまでのいろ〳〵な小さな場合を、今までぼかんとしてゐた感覺は急に絶望の狀態から立ち上つた。そして全身に武裝した兵士のやうに元氣をふるひ起した。これまでの憐れみ、寛大、辛抱――こんな世の中の弱味が今の私にとつてなんだ。あの血にまみれた基督教徒が死に臨んで敵を許したあの寛大さが私にとつてなんだ。力と決心が私に戻つてきた。それやくだらない船乘とか古着屋の亭主等には人殺しや自殺が恰度よい手段

だらう。しかしこの私は自分の名譽ある血統をくだらない犯罪で汚したくはない。ロマニ家の復讐には深慮が必要だ――慌てゝはならない。無暗に怒つてはならない。興奮して騒ぎ廻つてはならない。私は歩きながら、この殘酷な復讐劇の序幕から大詰までを一幕々々綿密にやり通す決心をした。今は頭もさつぱりした。空氣も氣持がよかつた。神經がだん〳〵に落着いて行く。これからの計畫が私に滿足を與へ、血の中の熱を靜めた。もう過去のことをくよ〳〵思つてはゐない――そんなことをしてもなんの効もない。あの二人は私が死んだと思はれるまで待つてゐたのだ……いや！　結婚後三ヶ月も經たないうちに、私を馬鹿にし始めた。まる三年間不義の悦樂に耽つてゐたのだ。それをこの愚しい私はなんにも知らなかつた。今こそ私は自分がどんなに非道い目に遭つてゐるかゞ分つた。すつかり騙されてゐたのだ。私は自分の正義、理性、自尊心からもあの惡人等を出來るだけ手非道い目に遭はしてやらなければならない。妻に對して抱いてゐた激しい愛情をかなぐり棄てた。身體に刺つた骨を拔くやうに、あの墓穴で私の首にまとひついた見えない蟲をたゝきつけたやうな氣持である。ギドーとの長い交情もすつかり溫かさを失つてしまつた。今はたゞ憎みどころか殘酷な猛烈な侮蔑の念が起るだけであつた。さう思ふとこの自分が先刻希望と期待とに夢中になつて何も知らなく歸つて來たことが情なく思へるのであつた。生命がけの谷間を死ぬとも知らずにいゝ氣になつて飛び越す男だつて、私より馬鹿ではないだらう。だが今はその夢も醒めた。この世の迷ひは消えた。私は强いのだ。復讐をするのだ……早くやらう。そこで一時間以上もいろ〳〵と考へた擧句、すつかり復讐の段取り

をきめると、その決心を愈々確かなものにするために、あの死んだ坊さんのチブリアノが私の棺桶の上に乘せておいた十字架を懷から取り出して、接吻をすると高く捧げて、私がこの正當な復讐をどこまでもやり通すまでは斷じて心を緩めないといふ誓ひをたてた。靜かな空にちらばつてゐる無數の星がこの私の誓ひを見とゞけたといふやうに瞬いた――思ひ出してか、また夜鶯が急に鳴き止んで、私の誓ひを聞いてゐるやうであつた――風が悲しさうに嘆息した。素馨の花が雪のやうに私の足もとに散つた。私の過去の日、甘い夢の日、懷しい思ひ出の日が白々と散つたやうに思へた。あゝ、永久にしぼんでしまへばいゝ！　もうこれからの私は單なる花園の生活ではない――よく鍛へられた冷たい固い折れることのない刃の連續だ。無數の刃が束になつてあの二人の周圍を脅かすやうにぐる〳〵と廻り出すのだ。そして手も足も出ないやうにさせてしまふのだ。さうせねばならん――と私は決心した。それからしつかりした足どりでこの並木路から靜かに立ち去つて行つた。小さな私用門を開けて埃だらけの道に出た。ロマニ家の大門を通り過ぎる時に、大きな音がしたのでひよいと上を見上げた。一人の召使が――私の下男だ――が門を閉めてゐる。門を入れて鍵をしめるのが聞えた。前に私がナポリからやつてきた時には、この門は全く閉ぢてゐたのだ――それなのにどうして開け放しになつてゐたか？　誰かを通すために？　勿論さうだ……私は妻の惡智慧をせゝら笑つた。成程、あの女はなか〳〵用心深いな！　兎に角體裁だけは――あのフェラリ君が來る時には堂々とこの大門から召使に案内されて入るに違ひない。成程！　かうやつておけば誰にも疑はれないし、

體裁だつて保てる。今ギドーがこゝを出たばかりなのだらう？　私は別に急ぎはしなかつたが、ぐんぐん岡を下りて町の方に歩いて行つた。その途中で彼を追ひ越した。彼は例のやうに煙草を吸ひながらゆつくりと歩いてゐる。手にはたうわたの小枝を持つてゐる――誰かあれをやつたか知つてゐる。私は彼を追ひ越した……彼は氣にも止めてないやうに私を眺めた。彼の綺麗な顏は明るい月光に照されてゐる。しかしありふれた漁夫と見てか少しも注意を引かれなかつたらしい。一寸私を見たゞけでまた元の通り歩いてゐた。ある狂暴な望みが、あの男に向つてゆきたいといふ望みが、咽喉もとに飛びついて、格闘をした擧句、足もとの砂の上に轉ばして唾を引つかけ踏みつけてやりたいといふ望みが起つた。しかし私はこの亂暴な危險な望みを抑へつけた。今に正々堂々とやつてやる。

これから巧妙に彼を苦しめていく手筈を考へる。格闘なんて實に馬鹿々々しい。復讐をするからには、その復讐が激しい怒りの中にだん〳〵と成長して、自然とそれが滅びてしまふまでやらなくちやならない――時機が熟さないうちに慌てゝやる復讐は、恰度すつぱい半熟の果物みたいなものだ。そこで私はこの親友を、この妻の慰め手を、自分の危險な道を眞直に歩いてゐるつけものを、やり過した。そして淫らな考へに好きなだけ耽らしておいた。私はナポリの町に入つて今の私のやうな連中を相手にやつてゐるある宿屋を探し當てると直にぐつすりと、夢も見ないほどぐつすりと寢こんだ。これまでの病氣、疲れ、怖れ、悲しみさういつたものゝためにすつかり疲れきつた私は、實に安らかに寢こんでしまつた。だが、その中でも一番私の頭を靜めてくれたのは愈々復讐の計畫が出來上つた

といふ氣持であつた――私の知つてゐる限り、こんな怖しい復讐を考へついた人間はないであらう。諸君は私を非基督教徒といふのか？　基督教徒は女を愛したことがない。若し基督徒が女を愛したことがあつたなら、かういふ場合に特別の諚を殘しておいたぢらうが。

第九章

翌朝は可成り早く眼を覺ました――前の晩のあの決心が今ではもつとしつかりしてきた。もうこの決心を妨げることは出來ない。私は誰にも氣がつかれないやうにして例の墓穴に戻つていつた。その時、小さな提燈と槌と數本の丈夫な釘を持つていつた。墓地に着くと先づ四邊をよく見廻した。何處かゝら人聲でも聞えて來はしないか、近くに誰か居はしないかと。一人も見えない。私は例の祕密の通路を利用して私が摺つた揉んだをやつた場所へ入つて見たが、あの當時の苦みも今の私の心の苦痛に較べれば何でもない。直ぐにあの寶物の入つた棺のところにいつて、そこにある紙幣をみんな集めると私の身體にぶら下つてゐる袋の中に詰めこみ、果ては着物の縫ひ目までに入れ、巨萬の富を身體につけて立上つた。それから持つて來た道具を借りて目茶々々にした例の大きな棺桶の修繕を始めた。しつかりと釘づけにして、誰かに觸れられた形跡を全然消してしまつた。私は大急ぎで仕事をやつた。兎に角二週間ばかりナポリを去らなければならない。それも今日だ。墓地を出る前に自分の

入つてゐた棺桶を眺めた。これも釘を打つて、中に死體が入つてゐるやうに見せかけたものだらうか？　いや、これはこのまゝにして置いた方がいゝ……あけて置いた方がいゝ……その方が私の目的を有効にさせる。でするだけのことをしてしまふと、あの祕密な通路から外に出て出來るだけ注意をして扉を閉めると直ぐに波止場に向つた。波止場に着いてそこにゐる船乘り仲間に聞いたところが、今恰度パレルモ行きの海岸廻りの小船が出るさうである。どうせ何處でもいゝんだ。パレルモ結構。私はその船の船長を探した。船長は蒼色の顏をした愉快氣な男で私が船に乘せてくれと賴んで、少しこれは安過ぎるかなと思ふ船賃を出したところ、彼は齒をギラ〳〵させて愛想笑ひをしながら承知してくれた。ところで後で聞いたことだが、その私の拂つた賃金は本當の船賃の三倍もあつたさうだ。この人のいゝ顏をした惡漢はまんまと私を騙したわけだが、もうちよつとすると、どんなことになつたか分からない。私は英語で、「飾らないさつぱりした親切さ」といふ言葉を幾度も〳〵聞いてゐる。成程その言葉には幾分の眞理はある。けれどもこの私にして見れば、どつちかといふと優しい言葉をかけて愉快な顏つきをした男に騙され易い。お世辭といつたら殆んどない。「飾らないさつぱりした親切さ」の男も惡くはないが。

九時頃になつて船が出た――晴れた朝で、ナポリとしては空氣が冷たい方であつた。私たちの小船の舷側をうつ波の聲は日の出から日沒の間に目擊した經驗を盛んに喋り立てゝゐるやうに聞えた。それはまた何か男女の情事の囁きのやうでもあつた。それはまたこの雄大な海の懷にどんなに澤山

の女の死體が抱かれてゐるかといふことを悲し氣に物語つてゐた。その死骸は詩人の夢に出てくる天女のやうに綺麗で柔らかく、殘酷な大波にあちこちと吹き流されて、遂には海の魔物の餌食となるといふ話だ。

私はぼんやりと船の端に腰を下してずつと下の方で溶け流れ青玉の湖のやうに青く輝いてゐる靜かな地中海を眺めてゐた。と、私の妻の姿を見たやうに想つた――なが〳〵と金色の砂の上に寢そべつて、その豐かな毛髮に包まれてゐる彼女の姿、死の苦悶に手を握りしめて激しい波の冷たさで、その笑つてゐる肩が眞靑になつてゐる彼女の姿――もう二度と笑ふことも動くことも出來ない彼女の姿、かうした姿の彼女の方が昨夜愛人の腕に抱かれてゐた姿よりもずつと美しい。私は深い考へに沈んだ。誰かゞ肩に觸れたので吃驚した。見上げると直ぐ側に船長が立つてゐるのだ。彼はにやりと笑つて煙草を差し出した。

「旦那、煙草は如何ですか？」と丁寧にいふ。私の手は半分無意識に香のいゝハヴァナ煙草を摑んでゐた。

「旦那、私をなんだと思ひます？」と今度は私が尋ねた。「珊瑚取りなんですよ。」

小男は肩を搖つて敬々しく頭を下げた。しかし、陽氣に眼を光らせて、オリーブ色の頰に笑くぼを作つて、

「あゝさうですかい！　だが、旦那の御隨意に。」

といつてもう一度仰山に肩を揺すぶるとまたも頭を下げた。私は彼をぢつと見守つた。「それや、どういふわけですか？」といくらか激しく尋ねた。するとこのシシリーの船長は獨特の輕快さで、ぐいと前へこゞみこむと私の腕に鳶色の指をかけた。

「御免なさいよ旦那！　だが、この手は珊瑚取の手ぢや御座んせんね。」

私は自分の兩手を見た。成程こんな華奢なすべ〳〵した手ぢや見破られる――これまではどうやら覺られないできたが、この陽氣な船長は賢明にも私の手と私の着物とのちんちくりんさを見破つたのだ。初めは一寸その言葉で弱つたが、暫く默つてから思ひきつて彼の顏を見つめると、煙草に火をつけながら無造作にいつた。

「ぴたと當つたね！　それぢやなんに見えるかね？」

すると彼は兩手で許しを乞ふやうな手ぶりをして、

「いゝえ、なんでもありませんね――だが旦那、私のところにおいでになりや安全ですよ。決して喋りませんからね――尤も私だけは別ですよ。旦那にはそれだけのことがおありになる……それも私は知つてまさあ。旦那が苦しんでいらつしやることがお顏に書いてありますよ。あゝ！　浮き世にはいろいろと辛いことが多いんでしてね、色戀つてやつがありまさあ！」そこで彼は指で數へながら、「仇打ち、喧嘩、借金、こんなことのために男は年から年中方々へほつゝき歩かねばなりません。實際そんなもんでさあ。でも旦那、こゝにゐる間は親舟に乘つてる氣持でいらつしやい。及ばずながら出來

るだけのことはしますぜ。」

さういつて船長はいかにも人がよさゝうに赤い帽子を高く上げた。淋しく遣瀨ない今の私は心の底まで動かされたやうな氣がした。默つて私も手を差出した――彼は尊敬と同情と親しさをその手に籠めて握り返した。この男が船賃を暴利たにしろ、他の男ならあの二十倍の金を出したところでかうまで好意をよせてはくれないだらう。諸君には實際伊太利人のこんな複雜な性格が分らないかも知れない。いや、斷じて分らない。勘定高い北國人はかういふ場合には出來るだけいろ〳〵な方法で金をゆすり、偖ていかにも正直らしい顏付きで最寄りの警察署に出頭して私の人相と風體を密告する。私自身に迷惑をかけたゞけでは飽き足らずその上の利益にありつかうといふのである。船長は南國人特有の効妙さで今度は話題を今喫つてゐる煙草の方にもつていつた。

「どうです甘くはありませんか？」

「いや、なか〳〵結構で。」と私は本當のことをいつた。

彼は白い齒をギラ〳〵させて嬉しさうに笑つた。

「これは大分いゝものらしいですよ――四六時中極上の煙草ばかり喫つてゐる男から貰つたんですがね。あゝ、それにしても、あのカルメロ・ネリさんは非道い目に遭つたもんだ！」私はその時の驚きを抑へることは出來なかつた。どうした運命の惡戲であの有名な山賊と緣が深いのか？　私があの墓穴から持ち出した寶といひ、今喫つてゐるこの煙草といひ。

「あんたはその男を知つてゐるんですか？」といかにも不思議さうに尋ねた。
「知つてゐるかつて？　知つてるどこぢやござんせん。なに、二月前でしたよ。さうでさあ。恰度今日から二月前に、先生この船に乘り合せましてね。かういふわけなんですよ……ガエタでね……奴さんが私のところにやつて來て近衛兵に追はれてゐるといふんでさあ。テルミネまで乘つけてつてくれたら、一生涯つかつても費ひきれない金をやらうといふんでさあ。なんでも奴さんの考へではモンテマヂョレにある隱れ家の一つへ逃げようといふんです。一緒にテレザを連れて來ましたよ。恰度その時、手下の連中はみんな濱に出てゐたので船にゐたのは私一人なんです。で奴さんかういふんです。『俺達をテレミネへ連れてゆけ。その代り報酬をうんとやるぞ。嫌だといやお前の咽喉へぶすりだ』ハハハ、乙なもんで。で、私は奴さんに笑つてやりましたよ。テレザさんの方には甲板にあつた椅子をすゝめて、大きな桃をやりました。『ね、カルメロさん、おどかしたつて何にもなりませんよ。あんたゞつて私をまさか殺すまいし、第一私はあんたを裏切るやうな人間ぢやありません。あんたは盗坊さんだ。大盗坊に違ひねえ。だけどそのナイフさへ引つこめれば、そんじよそこらの宿屋の亭主なんかよりはずつといゝ人間でさあ』（それやあんたでも御存知でせうが、一度宿屋へ入つて出てくるまでには大した金をふんだくられますからね）さうです——さういふ風にカルメロさんに話をつけたので『何もあんたとテレザさんをテルミネまで送るのにそんなに大した金は欲しかありません——たゞ船賃だけ貰へればいゝんです。そして、せめてテレザさんのためにも友達として別れませう

よ』すると奴さん驚きました。奴さん獨特の陰氣な笑ひ方で笑ひましてね——奴さんがこんな笑ひ方をする時は感謝した時か、これから人殺しをするつて時に限つてゐるのです。テレザさんは可愛い手を私にかけましたよ——綺麗な青い眼に涙を溜めて、『あんたは本當にいゝ人ね、どつかの女が屹度あんたを好きになるわ！』さうですよ、さういつてました。全くその通りで……」
その時に彼の黑い眼が深い感謝の念に滿ちて上の方を眺めた。私は嫉妬に似たものを強く感じながら彼を見てゐた。こゝにも大分女に參つてゐる馬鹿がゐる——眼に見えない面白い夢にいゝ氣になつてゐる奴がゐる——女の眞實を信じてゐる可哀さうな奴だ。
「なか〳〵あんたお幸福ですね。」と私がいつた。「あんたの船を導いてくれる星があるやうに、あんたの一生を導いてくれる人がゐるんですね？　あんたに惚れてゐて操を立てゝくれる女が？」
彼はちよつとばかり帽子をあげて率直に、簡單に答へた。
「えゝ、旦那……お母がゐますあ。」
私は顏にこそ出さなかつたが、この無邪氣な思ひがけない答にひどく心を動かされた。苦い悲しさが湧き上つてきた。あゝ、どうして私のお母さんはあんなに若くて死んだのだらうか。自分にはこのくだらない船乘りの眼に輝き身體中を震はせてゐる貴い喜びを經驗したことがないのである！　どうして私はいつまでも一人で、たゞ一人の女の謔に目茶々々にされて絶望してゐるのか？　さう思つたことが私の顏に現はれたのかも知れない。その時、船長がかう優しくいつたからである。

「旦那にはお母さんがおありにならないのですか？」
「私がほんの子供の時死んぢやいましてね。」と短く答へた。
シシリー人はパット煙草の煙を吹いた。そして同情したやうに黙りこんでゐた。私は友人を困らせるにも當らないと思つたので、
「あんたは先刻テレザつていひましたね？　テレザつて誰ですか？」
「あゝ、よくお尋ね下さいました。旦那！　私以外には誰も知りませんよ、そんなこと。あの女はカルメロ・ネリが大好きなんです。それにやいろ〳〵と話があるんですが。その女は小さな綺麗な娘です。泡のやうな女で、カルメロは……あんたカルメロさんを御覽になりましたか、旦那？」
私は知らないと頭をふつた。
「カルメロは大きな亂暴な、眞黒の奴でしてね。森の狼みたいに、全身毛だらけ、牙だらけでさあ——でテレザですが、あんたは夜の空に月をかすめて飛んで行く靑みがゝつた小さな雲を見ることがあるでせう。あれがテレザですよ。子供みたいに身體がこぢんまりしてゐて、可愛らしい捲毛、人なつこい眼、小枝を二つに折ることの出來ないやうな小さな華奢な手、でもカルメロとなら何でも出來ないことはありません——あの女はカルメロの生涯でたつた一つの賜物でさあ。」
「だが、私はその女がカルメロに本當に實があつたのかどうか疑はしいと思ふな。」と半分は私に聞かせるやうにいつた。

船長はその言葉を聞いて吃驚したらしい。
「實があつたかつて？　あゝ、旦那は何にも御存知ないんですな。カルメロの手下に、馬鹿に大膽で綺麗な惡黨がゐました。其奴がテレザさんに夢中で、どこまでも後を追つかけるんでさあ。ある日、娘さんが一人でゐるところを見つけましてね、いきなり抱きすくめようとしたんでさあ。すると娘さんは男の腰帶からナイフを拔きとつて奴さんをブツスリやりました！　けれども殺したんぢやありません。尤も後でカルメロが殺しましたがな。考へても御覽なさい。「あんな小つぽけな小女がそんな大それたことをするなんて四六時中いつてましたつけ。妾はカルメロさん以外には頭の髮一本だつて觸れさすもんぢやない」つて。えゝ、そのくらゐ實がありました——ちよいと氣の毒ですがね。」
「ぢやその女には眞實があると思つてゐるんですか？」
「どういたしまして——不實の女なら非道い目に遭はせてやりますがね——けれどあの可哀さうなテレザが、人もあらうにあのカルメロの戀女房だなんて、あんな男にね！　あの男だつていつかお上の御厄介になつて終身懲役は免れませんて。さうすりやあの女は死んぢまいます。それや確かです！　たとへ悲しみのために死んだんぢやないにしても屹度自殺はしますよ。あの女のことだから！　成程見たところ花みたいに小つぽけで弱さうですがね、心だけは鐵みたいに丈夫です。だから情事は勿論あの女にはあの女の死方がありまさ——實際そんな女もあるんで。一番弱さうに見える女がゝへつて一番しつかりしてるもんですよ。」

この時、手下の船乗が船長の命令を聞きにやつて來たので、話がとぎれた。お喋りの船長はいかにも濟まないといつた風に笑つて頭を下げると自分の煙草入を私の傍に置いたまゝ行つてしまつた。

一人になつても別に淋しくはなかつた。私は一寸休みたかつたのだ。休んで考へたかつた。心は新しい太陽系のやうにたつた一つの中心、復讐といふ眞赤な遊星の周圍を廻轉してゐたのだ。「不實の女なら生かしちや置きません」あの單純なシシリーの船乗さへそんなことをいつてゐた。「行つて殺しちやいなさい。行つて殺しちやいなさい！」この言葉が私の耳の中で幾度も〳〵廻轉し始めたのでもう少しで大聲に口に出すところであつた。私はテレザといふ女のことを考へると氣が沈んだ。あの名前を聞くさへ恐ろしい、凄い顏つきをした大盜坊の妻――その彼女さへ他の男の淫らな望みをしりぞけることが出來たのだ――氣の荒い移り氣な山賊に自分の實を通して得意になつてゐる女、血だらけな戀人に對して堂々と自分の眞實を誇ることの出來る女――それなのにニーナは……何不足ない貴族の妻となりながら、その名譽ある結婚を臺なしにし、由緒正しい家族の威嚴を踏みつけにしてしまつたあのニーナ。卑しいテレザでさへ總ての事情を知つたら、屹度ニーナの身體を汚れたものとして一指も觸れないだらう。それなのに、その眞實な女の高價な寶石にも比すべき心掛けに對して、カルメロ・ネリが何をしたか？　この私に仕返しをしてやれと思はせるほどの恐ろしい虛僞に對して私は何をしたか？　急に私は自分の子供のことを思ひ出した。娘の面影が一道の光のやうに私を照した。殆んど忘れてゐたところである。可哀さうな、可憐な花！　彼女の可愛らしい顏を思ひ出していくう

ちに熱い涙が私の兩眼に溢れるのであつた。あの何も苦みを知らない眼、あの無邪氣な接吻を求めてゐる口！　あの子をどうしたらいゝだらうか？　私の今考へてゐる復讐の計畫が思つた通りにすらすらと終つた時には、あの子を連れて遠く〳〵世界の端に行つて、一生をあの子のために捧げて暮さうか？　あの子は綺麗な女になるだらう！　あの子は毒のある木に生えた花である。が、あの子の心の中にさへもう毒蟲が巣喰つてゐて、あの子が成長するのを待つて、その魔手を振ふことがないと誰が斷言出來やう！　あゝ、男たちよ！　君達の生命の周圍に美しい女の形をした蛇が蜷局を卷いてゐるのを知らないか？　若しまかり間違つて、君達がそんな女に子供を產ましたら、その咒は子々孫々まで傳はるのである！　今諸君は、社會といふ虛僞の假面の下に隱れてはゐるが、この世の中で、自分の子が不實な妻の腕に抱かれ、しかもその子が妻を「お母さん」と呼ぶのを聞くぐらゐ恐ろしいことはない。たとへ諸君が灰を食べ、にがよもぎを呑んだとて女故に與へられる苦痛に較べればずつとずつと甘いのである。

それから暫くは、殆んど一人だつたといつてもいゝ。船長はちよい〳〵やつて來て話かけてくれたが、彼だつて船の方の仕事が忙しかつたので、さう長く傍にゐるわけにはゆかなかつた。流石に話好きな彼も仕事には勝てなかつたものと思へる。お天氣は非常に良かつた。氣紛れな風のために吾々の船はあつちに搖れこつちに搖れしてゐたが、速力は可成り早く、この分なら翌日の夕方までにはパレルモに着けさうに思へた。

夕方になつた風が改まつた。月が大きな光つた鳥のやうに大空に翔け上つた時には、私の船は前後に揺れながら進んでゐた。船の端はキラ〳〵と透明に光る金色の波に觸れやうとしてゐた。そのうちに私の船は大きなヨットとすれ〳〵に行きちがつた。それはマストに英國の旗をつけてゐた。その帆は月光を浴びて眞白に光つてゐた。鷗のやうに輕やかに波を蹴つて進んで行つた。一人の脊の高い運動家らしい男がその着てゐるヨット服のために際だつて目についたが、彼は甲板に立つて自分の傍にゐる女の腰に腕を廻してゐた。實に一二分の間であつたが、明らかに二人が愛し合つてゐることが分つた。私は男が氣の毒に思へた。何故か？　彼は英國人だから――その國の土さへ德の香の高いといはれてゐる英國の人に違ひないのだから。その脇にゐた女も純眞な娘だつたらう。英國人はかういふことにかけては斷じてへまをしない。だが、それだつて確かだらうか？　今の世の中では、何處の國の女だつて同じやうなものだ。成程、英國の昔はさうだつたらう。英國の薔薇は英國婦人の象徴でもあつたらう。しかし、今は世界中の人が利巧になり非常な速さで進歩してゐるのであるから、なんぼ英國の貴族だつて、女について安心してゐられるわけでもないではないか？　あの男だつて自分の女のするがまゝに安心してほつて置けるかしら？　名門の誇りだけに安心して、自分のゐない間に盗坊に入られても平氣でゐたり、自分の妻の愛情が他に向けられてもぢつとしてゐられる男があるだらうか？　また女だつてもう三四人の子供があるにも拘らず、自分の夫の顔に泥を塗るやうな眞似を平氣でしてゐないだらうか？　ロンドンの日々の新聞を讀んでみたら、「道德的」英國がます〳〵社會

惡の追求に餘念がないといふ事實を見出すだらうが、これは他の非道德國となんの選ぶところもないではないか？　こんなことを考へてゐると、船長が自分の部屋を使つてはどうかと勸めてくれた。しかし私がよござんすと斷つたのでお人よしだけに大分面喰らつてゐた。

「月の光の下で寢るのはよくありませんよ。なんでも狂人になつてしまふさうですよ。」と心配氣に言つてくれる。

私は、にこりとした。若し、私の運命が狂人になるのだつたら、もうとつくに昨日の晩なつてゐた筈だ。

「いや、御心配には及びません！　私には月の光はとても氣持がいゝのです――靜かなだけでなんの害にもなりませんよ。どうかお構ひなく。」

彼は暫くの間躊躇してゐたが、軈て向うへ行つた。二三分すると厚い羊の皮の膝掛けを持つて來た。彼は熱心に夜氣に當ると惡いから、どうかこれをかけて下さいとすゝめるので、私は彼の親切な言葉に應じて、その暖かい手皮にくるまつて横になつた。お人よしの船長は、「お休み！」といつて自分の休息所に引きとるために鼻唄を唄ひながら下りていつた。私は甲板から暖かい紫の空に優しく瞬いてゐる無數の星を眺めた。ぢつと見つめてゐるうちに、なんだか私の乘つてゐる船さへも一つの星となつて多くの星仲間に加はりながら無限の空間を走つてゆくやうに思へた。あの遥かな遊星の群にはどんな人間が住つてゐるのだらうか？　吾々のやうに產れ、愛し合ひお互に誓をつき合ふ男と

女だけであらうか？　それとも、虚偽なんて全然知らない人達だらうか？　あの遊星のどれか一つに女のゐない遊星があるだらうか？　漠然とした空想――種々な學説が私の頭の中を驅け廻つた。私はもう一度あの墓穴で味つた苦悶を感じた――もう一度無理にも私がこの眼で見た妻と情人との光景を思ひ出させた。もう一度私が考へ出した復讐の遂行に必要な凡ゆる細々した條件を考へて見た。私はこれまでよく不思議に思ふのであるが、離婚が認められてゐる國ではどうして欺かれた夫は、その妻を追ひ出すだけで自分の受けた損害の償ひが出來たと滿足してゐるのだらうか？　それでは女の罰にならない。却つて女はそれを望んでゐるのだ。しかも社會はそれを正當として別に騒がない。今までの考へを公衆が退ぞけてもつと適當な手段をとらなければ、かゝる行爲は絶滅しないだらう――どうしても離婚の後には笞打が必要である。奢華に育てられた女だつたら、自分の綺麗な身體を同性の人に殘酷に毆られなければならないと思へば、不義を働く前に二度も、いや五十度も考へなほして見るだらう。かうしてその女に侮辱と苦痛を與へれば、女の中の動物は忽ちにして追ひ出されてしまふだらう。その方がくだらない法律や、刑罰などよりはずつと効果がある。猫の尻つ尾で毆ることは昔の刑罰であつた。だから諸君が日ましに增していく不德、不注意を食ひ止めようと思つたら、あの習慣をもう一度適用するが宜しい。但しこれは貧乏人ばかりに適用してはいけない。勞働者階級のあくせく働く神さん連よりは、伯爵夫人とか男爵夫人とか呼ばれてゐる連中の方がもつとこれらの御厄介になるべきだ。贅澤、有閑、衣服への愛着、かういつたものは罪惡の溫床である――飢と、酷寒に泣く小屋の中にも、薔薇色の貴族の婦人室にも諸君はその實例を見るだらう。大都市の人口を減少させる病毒の探求に餘念のない醫者のやうな勇敢さにならなくてはいけない。そしてそれを見つけ出したなら、踏みつけてしまひなさい。諸君の祖國が後代まで赫々と隆盛するやうに祈るなら尚更のことである。「奥樣」だからといつて遠慮する必要はない。たとへ女が美しい髪を振り亂して涙を一ぱい溜めて諸君に哀願したところで、諸君は斷じて容赦してはならない。いや、却つてその女の富と地位故に、一日のパンを求めるために泣きながら白粉を塗る女達よりもずつと罪が深いのだ。高き位置には高き刑罰を與へよ。がこれは少し亂暴である。笞打はもう時代遲れだ。何故といふに、少くとも婦人はこゝで私は急に嫌氣がさしてぶる〳〵と肩を震はせた。諸君もいつか社會の不德のために身震ひをするだらうか？　いやこれからは殆どないだらう。世の中には妻が不義を働いても、夫婦別れをして、それから先の日を平氣で送つてゐる人がゐるのだから、確にさういふ人も幾人かはゐる。だが私は不幸にしてそんな人達とは違ふ。世界中のどんな法律をもつてしてもこの私の傷つけられた不名譽を償ふことは出來ない。だから私自身が私の法律なのだ。陪審官も、判事も、裁判官もみんな私が兼ねるのだ。しかもこの私の判決は一つも容赦しないのだ。いや、そればかりではない。私が人の役も引受けなくてはならない。私が考案した拷問法ぐらゐ素晴しいものはない。さう考へながら眼をあけて空を見上げ、月の光が大海の上に金色の雨のやうに降り注ぐのを見てゐた。波は船の舷側に當つて白い泡の笑ひ聲を立てながら碎けた。船は進んで行く。

第十章

その翌日は順風であつた。船がパレルモに著いたのは日没より一時間前である。港に入ると直ぐに彈ごめしたピストルや銃を持つた士官と近衛兵の一隊がやつて來て、カルメロ・ネリの逮捕狀を示した。私は船長の安全を大分氣づかつてゐたが、彼は少しもへばらなかつた。彼はその政府の兵隊をまるで無二の親友のやうに歡迎した。

「私はかう思ふんですが、」と彼は兵士達のために上等なチャンチの壜をあけながらいつた。「あのカルメロの奴は何處かガエタ邊にゐませうよ。嘘ぢやありませんよ——嘘をつく理由がないぢやありませんか？　賞金はあるんですかい、私だつて貧乏ですからね、出來るだけお手傳はしますがね！」

一人の兵隊が彼を疑はし氣に眺めた。

「吾々はかういふ通知を受けとるです、」と職業的な調子で始めた。「ネリは二ヶ月前にガエタを引上げて、海岸廻りのローラといふ船の船長でアンドレヤ・ルチアニなる男の手に助けられて逃亡を企てたさうだ。その船はナポリとパレルモの間を往來してゐる商船だ。お前は、アンドレヤ・ルチアニ。この船はローラだ——間違ひはないだらうな？」

「いや、大分見當違ひですな？」と船長はその兵士の脊中をたゝきながら相變らず陽氣にいつた。

「いや貴方はなか〳〵こすくつていらつしやる。これぢやいくら申し上げてもなか〳〵御承知はなさりますまい。あゝ！　さうです。確に私の船の名前も仰有る通りに違ひ有りません。だが、他のことは——」とこゝで彼は否定するやうに指を振つて、「旦那は間違つていらつしやる。とんでもない間違ひですよ！」彼はワツト笑ひ出した。「さうです間違ひです。だがもうその喧嘩は止めませう！　いかゞです。もつとチャンチは！　山賊探しは咽喉が渴きますからね。さあ一杯おくみなすつて——けち〳〵しなくてもよござすよ——下へ行きやまだ二十本あるんですから。」

士官連は酒をすゝめられると、いつの間にか機嫌顏になつてにこ〳〵しながら、呑み始めた。その中でも際だつて、若いきび〳〵した顏の優男が船長と大分親しくなつて互ひに氣を合はせてゐたが、見せかけは兎もあれ、うまく船長を騙しこんで實をはかせてしまはうといふ魂膽が彼の眼にうかゞはれた。

「いや、アンドレヤ君！」と彼は陽氣に叫んだ。「これでみんなすつかり仲良しになつたわけだな！　山賊をお客にしたところでなんにもならんぢやないか——そりやぐつと値のいゝ船賃を出すかも知れないが！」

けれどもアンドレヤはこの手に引つかゝらなかつた。それどころか頭を上げると、いかにも驚いたといつた眼つきで彼を眺めた。

「やれ〳〵冗談ぢやありませんぜ！　この正直な船乘りの私が大盜坊なんかから鐚一文だつて取れは

しませんぜ！　實際私も運が悪いて！　どういたしまして、なんかの間違ひですよ。私はカルメロ・ネリなんて全然知りません。神様だつて、私があの男に決して會はないといふことを保證してくれやすよ。」

彼の話ぶりが餘りに本當らしいので、士官連も當惑の形だつた。しかしやつぱり船中を捜索してみるだけはした。が總てが豫想に反して全く絶望したみんなは、今度は船中の者に聞き廻つた。この私も聞かれた一人であつたが勿論彼等の思つてゐたやうな滿足な答は得られなかつたのである。幸なことに私の服から私を漁夫だと思ひこみ、初めのうちは私の白髪を妙な顔で見てゐたが、結局この男には別に怪しい點はないといふ風に考へたらしい。軈て船長の馬鹿丁寧の挨拶に送られてみんなは出ていつた。今ではお上が受けとつた報告がすつかり嘘であると思ひこんで大分腹を立てゝゐるやうであつた。さて、軍人の姿が見えなくなると、アンドレヤは忽ち小踊りを始めて甲板を子供のやうにはね廻つてた。そして嘲笑するやうに指を曲げて、

「どんなもんだい！　この正直なアンドレヤ・ルチアニ様に實を吐かせるなんてよりや、坊主のところへ行つた方がずつと氣がきいてらあ。どうして〳〵あんな結構な葉巻きを下さつた旦那を裏切られるもんかね！　今頃はカルメロさん、足手まとひを追つぱらつてモンテマヂョレ邊でのう〳〵として御座るだらう！　あゝ！　旦那！」私が愈々お別れをつげに前に進み出たので、「どうも此處でお別れするのは惜しいですね！　まさかあんたは私を信じきつてゐる盗坊をかくまつてやつたからつて

悪く思つちやいますまいね？」

「どうしまして！　それどころか、私が若し、あんたの立場に立つたつてあゝしたでせうよ。左様なら！　それからこれを、」（こゝで私は約束の船賃をやることにした）「私のほんの志です、あんたの御親切は忘れますまい。若し、あんたが友達でも欲しくなるやうなことがあつたらいつでも便りを下さい。」

「けれど、」と船長はおず〳〵しながら聞くのであつた、「旦那、御名前を仰有つて下さらなきや分らないぢやありませんか？」

私はこのことを昨日中に考へておいた。これやどうしても變名を用ひなくちやならない。そこで私の未だ小學校時代の仲の良かつた友達で、私の見てゐる前でヴェニスの濱で波に呑まれて死んでしまつた男の名前を借りることにした。私は直ぐにアンドレヤの質問に答へて無造作にいつた。

「ツェザレ・オリーヴァ伯爵といへば分ります。直ぐにナポリへ歸る心算ですから、あそこでお會ひするかも知れません。」

こゝでシシリーの船長は帽子をとると馬鹿丁寧な御辭儀をした。

「あゝ、それで分りましたよ、」とにこ〳〵しながら、「どうも旦那のお手は珊瑚取りのにしちや變だと思ひました……私は一目で紳士方かどうかよく分りますよ。――尤も、シシリー人は自分達をみんな紳士だと思つてるんですからね。いゝ氣なもんでさあ。が、悲しいかな、さう思つてる奴に限つて

——！　それぢやまた旦那！　いつでも御用の節はお呼びなすつて——旦那の仰有ることならなんだつてやりますよ！」私は彼の手をギュット摑んだ後で、船から波止場へと飛び下りた。

「ではまた！」と私は叫んだ、「いやどうもいろ〳〵と有難う！」

「いえ、どういたしまして、旦那——どういたしまして！」かうして私は彼から離れて行つたのであるが、彼は鳶色の顏に優しい光を泛べながら甲板の上に帽子をとつたまゝいつまでも立つてゐた、人のいゝ陽氣な惡漢！　あの男の善と惡との考へ方は目茶苦茶だ。けれどもあの男の謔は吾々の眞面目の友人の眞實よりずつと價値がある。恐らく神樣だつて、人を救ふ謔と、人を殺す眞實の差別ぐらゐ御存じだらう。そしてそれに準して罰を與へたり褒美を下さたりするんだらう。

さて私がパレルモの町に入つて先づ第一に考へたことは、極上の紳士服を誂へることであつた。私はそこである一軒の洋服屋に入つていつて、實は自分はたゞの物好きから珊瑚取りの連中と一緒になつて暫くこの服を著てゐたのだがと、先づきり出しておいて直ぐ私のために五六着服を作つて呉れ、名前はツェザレ・オリーヴァ伯爵といふんで、この町の一流の旅館に宿る心算だからと話をすると、彼はすつかり私の言葉を信用して、とてもペコ〳〵して、ではどうか裏の部屋においで下さいといつて私をある部屋に連れていつた。私はそこで自分の今まで著てゐた漁夫の服を脱ぐと紳士の服に著代へた——これは出來合ひで私にうまくぴつたり合つた。かうして先づ私相當の身服が出來ると、パレルモ第一の旅館にいつて、數週間の契約で部屋を借りた。この間に私は愈々これから實行する復讐の

詳細な手筈を定める筈であつた。私の身につけてゐる金を何處か安全に保管しておきたいといふのも此處へ來た主な理由の一つであつた。私はパレルモでも一流の銀行家を探し出し、例の變名でその人に會ひ、實は自分は最近長い間の外國の旅からシシリーに歸つて來た者であると告げた。彼は私の申し出を心よく引受けた、私の財產は餘り莫大なので一寸驚いたやうであつたが、兎に角、貴方の滿足のゆくやうにお預りしませうと、大分乘り氣になつて承知した。その品々の中には例の寶石袋があつたが、彼はその中でも特別大きく光る奴を見つけると、すつかり驚嘆してしまつた。私はその樣子をぢつと見てゐたので、中から上等なエメラルド一つと、大きなダイヤを二つ取り出して彼の手に渡しながら、これを一つ貴方の身體におつけなすつて下さいとすゝめた。先方では餘りの氣前のよさに、呆然として初めのうちは辭退してゐたが、軈てこんな珍しい寶石は滅多に手に入るものではないと思つたのか、くど〳〵と禮をいひながら受取つた——すつかりこの贈呈品に目が眩んだ彼は、もうこれ以上私の身分を問ひたゞすことを忘れてしまつたのか、それともその必要を認めなかつたのか、兎に角、全部私の申出は承認したわけだつた。私は初め自分の身分を兎や角聞かれたら今に暴露はしないかと思つてひや〳〵してゐたが、それも事もなく濟んだ。愈々この取引が終ると第二の計畫について考へ出した。それは私の容貌や、聲や、物腰を變へて故ファビオ・ロマニ伯爵の面影を出來るだけ消さうとすることであつた。私は今まで鼻下髭をはやしてゐた。今ではそれも頭髮とともに眞白になつてゐる。その上、近頃になつて生えた顎鬚も白くなつた。ところが、さういつた方面だけは大分變つ

てしまつたのに、私の顔だけはまたも生々と若返つていくばかりであつた。いつでも大きく黒かつた眼は昔のやうな光をまし、一見なか〳〵きかなさうに見えるのであつた——この眼つきは昔の私を知つてゐた人が見たならば、直ぐにそれと感づかれる危險さを持つてゐた。さうだ、この眼だけは過去の祕密を語つてゐる。これはどうしたものであらうか？

かう考へていくうちに直ぐと決心がついた。眼の惡い人のやうに見せかけるのが、一番早手廻しだ——どうも激しい南國の日光は迚も堪らないといつた風に。そこで私は黑眼鏡をかけることにした。考へがきまると早速それを買つてき、先づ自分の部屋の鏡の前でその効果を試してみた。上出來だつた、すつかり私の顔が變つてしまふ。これをかけてゐる私の白髮白髯の姿を見たら誰だつて私を五十五歲ぐらゐの眼だけ惡い裕福な老人と思ふであらう。

次に私の聲を變へねばならなかつた。一體に私の聲は低くてはつきりしてゐる。性急だ。それにどの伊太利人もみんなさうであるが、話をする時に仰山に身振り手振りをやる癖がある。私は何かある特別な役を演つてゐる役者として自分を見立てた。そして、低い聲で、ゆつくりと落著いていふやうに練習をした——時には言葉の其處此處に皮肉な、突慳貪な調子を入れて、出來るだけ頭や手を動かさないやうに努めた。これはなか〳〵收得するのに困難な仕事で、大分時間と困難が手傳つた。恰度私と同じホテルに滯在してゐる中年の男を手本にすることにしたが、この人の言語動作は、一瞬間たりとも弛みがなかつた。いはゞ人間の氷山みたいな男で、身邊にはよく他國に逗留してゐる英國人

に見られるやうな上品な頭の高いところがあつた。私は出來るだけ彼の動作を眞似した——槓杆でも動かないといつた頑固さで口を閉ぢること、脊をそらして軍隊式に歩くこと、何でものを横柄振つて眺めること、さういふことを練習した、それもどうやら成功したらしい。といふのはある時、私の後で給仕人同志が横柄な奴だと囁いてゐるのを聞いたことがあつたから。

もう一つしたことがある。それはナポリで出してゐるある有名な新聞の編輯長に丁寧な依頼狀を出したことだ——勿論、この新聞がロマニ家に入つてゐることを知つてゞある。なほその手紙の中に五十フランを同封して次のやうなことを書いた記事を載せて貰ひたいと賴んだ。その文面といふのは次のやうなもので、

長年の間故郷を去つてゐたツェザーレ・オリーヴァ伯爵はこの度莫大なる財産を土產としてナポリに歸るとの噂である。しかしてナポリを永住の地と決心されたとの由。恐らく上流社會の人々は熱心なる歡迎を以てこの貴人の歸國を迎へるであらう

編輯長は私の意思を汲んでくれて、私の書いたのと一字も違ひのない文章を載せてくれた。間もなく彼は私のところへ禮狀と共にその新聞を送つてきたが、例の五十フランについては一言もいつて來なかつた、勿論、內心ほく〳〵もので著用したものと思へる。私が二倍の金をあの時送つてやつたら屹度「王」または「皇帝が御忍びにて」ぐらゐは書いてくれたであらう。一體に新聞の編輯長なんていふものはさも廉潔な士に見せかけたがるものである。少くとも英國ではさうだ。だが、伊太利で

は初めから金のためにやるが、ペンとインクでいくら稼いだところで收入は限られてゐるのだから無理もない話である。實際、英國でだつて若し澤山の金だとか、此方の出よう一つでは、或は手を出す編輯長がありはしないかと思はれる。例へばロンドンだけでも一二の雜誌は確にさうである。その連中は一千磅も拂はうものなら實に意味ない、とんでもない記事を平氣で載せる。

もう一日でパレルモを引き上げるといふ日のこと、私は喫煙室の肘掛椅子によりかゝりながら灣に輝めく波を眺めてゐた。

かれこれ八時頃で、派手な金色の落日の光が未だに空から消えやらず、海から吹いてくる微風がいくらか寒く感ぜられた。そして、何とはなしに今晩は寒くなるといふ豫感を伴つてゐた。私のやつてゐる性格——慘々苦勞した擧句この世の中を嫌惡するやうになつた頑固な皮肉な性格——はだん〳〵と身についてきて、今では殆んど第二の天性みたいになつた。だから昔の私みたいに呑氣にぼかんとしてゐるのは今では困難になつた、不愛想にしてゐることもすつかり板についた。ある劇の主役を受け持ち、その役割がすつかり呑み込めた——さういふ氣持であつた。私は別に何を考へるともなく、靜に煙草をふかしてゐた——あの例の計畫は、心の中だけではすつかり準備が備つてゐるんだから、後は全力を實行の方に集中すればいゝ。とその時、何か群集が大勢此方にやつてくるやうな、がやがやした聲を聞いた。窓から首を出して見たが、何も見えなかつたので、今のは一體なんだらうと考へてゐると、一人の給仕が興奮しながら喫煙室の扉をあけて入つてきた。そして、息もきれ〴〵に

叫んだ。

「カルメロ・ネリ！　旦那！　カルメロ・ネリ！　旦那！　奴さん可哀さうに捕縛されましたよ！　たうとう到捕りましたよ！」

これを聞いた私の驚きは決してその給仕に劣るものではなかつたが、私はそれを顏に現はさなかつた。私は一分間たりとも自分の役割を忘れはしない、その時もゆつくりと口から葉卷をとつてかういつたゞけである。

「するとあの大惡黨を捕へたわけだな！　お上も今度は大出來だ。で、今何處にゐるんだい？」

「あの廣小路です。」と給仕が夢中になつて答へた、「旦那があの角を曲つていらつしやれば手足を縛られたカルメロが御覽になれますよ。實際可哀さうでさあ！　まるで蜂の巣を取り卷いた蠅みたいな人だかりです。私も行きますよ——どんなことがあつてもこれだけは見とかなくちゃ！」

さういふと彼は盜坊の顏が拜めるといふんで子供のやうに夢中になつて驅けて行つた。私は帽子を被るとゆつくりした足どりで、騷ぎの現場に歩いて行つた。

全く繪のやうな光景であつた——眞黑な頭の海、ひつきりなしに動く人々の姿。そして、その動搖の眞唯中には一群の近衞騎兵が夕陽に青くキラ〳〵光るサーベルを拔きながら立つてゐた、馬も人も銅像のやうに動かなかつた。其處は聯隊本部の向ひ側で、今騎兵の上官が馬から下りて逮捕の手續に關する正規の報告をしに入つていつたところである。この武裝した人たちに取り圍まれて足を革紐

で括られ、腕は後で縛られてその上に手錠を嵌められてゐる男がゐた。これが有名なネリである。獰猛な眞黒な男。頭にはなにも被つてゐない――その濃い長い毛はばら〳〵になつて肩まで垂れてゐる。口髭も頬髭も濃く黒く顔一面に生えてゐるので、彼の凄い顔は半分その中に隠れてゐた虎の牙のやうに光る眞白な鋭い歯は、最後の抵抗を試みながら下脣をギュット咬みしめてゐた。彼の焔のやうに燃えてゐる眼は凹凸した額の下からギラ〳〵と赤みを帯びてゐた。大きなどつしりした、肩幅の廣い男である。後で縛られた二本の大きな手は素晴しい槌のやうだ。この一撃に會つたらどんな人でもたちどころに死んでしまはないだらうか？　彼の全體の感じは狂暴で恐しかつた。見たゞけでは少しも同情を誘ふやうなところがない――あの一見豪さうに見える樣子だつて、空威張りに過ぎない――あんな見かけだけの元氣なガレー船に一週間も乘せられれば、熟した葡萄から汁をたゝき出すよりもわけなく骨抜きにされるのだ。彼の妙な衣服は襤褸の入つた雜色のリンネルで、畫家にでも見せたら褒められさうな代物である。そして、派手な緋色の腰帶をしてゐる。彼の頑丈な腕は肩のところまでむき出しである。開いた胴著から見える強さうな褐色の咽喉、身中の怒りと恐れに波うつてゐる胸、この男の眞黒な凄い姿が空の色を背景としてくつきりと泛び上つてゐた――空には、陽の神が琥珀色の酒を入れた盃を落してそれが青いすべ〳〵した宮殿の床にころ〳〵と轉つていくのに任せてあろ、さう思はれるやうな眞紅の大きな雲が浮いてゐた――深い夕映が群集の赤くほてつた顔を更に赤く染めてゐた。みんなは驚きと、恐嘆の念にうたれてこゝ數年間シシリーの恐怖の的であつた大

盜坊で、人殺しの男の殘酷な眞黒の顔を眺めてゐた。私は群集を押し分けてもつとよく見えるところに近づいていつた。その時、何かネリが急に動いたので、兵隊はカチヤと音をさせて盜賊の目の前に劒の垣を作つた。山賊はカラ〳〵と笑つて、

「馬鹿野郎！　――足も手も縛られた人間が鹿のやうに驅けられるかつてんだ？　俺は罠にかゝつてゐるんだ！　彼奴にいつてくれ。」といつて彼は群集の中の誰かを顎で指しながら、「あれに此處へ來るやうにいつてくれ――いひたいことがあるんだ。」

近衞兵はお互ひの顔を見會つた、それからまご〳〵しながら周圍の群集を眺めた――さつぱり分らない。

カルメロはそれつきり口をつぐんだまゝ窮屈に縛られた姿勢を眞直にさせて、大聲に叫んだ。

「ルイジ・ビスカルチ！　船長！　お前は俺に見つからないと思つてたんだらうな。馬鹿な！　地獄へ行つたつて覺えてゐるぞ！　傍へ來い――お別れの挨拶をするんだ。」

この力强いしやがれつ聲をきくと今まで喋つてゐた群集は恐しさと威壓を感じて默つてしまつた。が、急にその群集がざわ〳〵と動きだすと一人の若者がその間をぬつて前に現はれて來た顔色の惡い、眼つきの冷い、すらりとした立派な男だつた。彼は狙撃兵の軍服を着けた身裝の綺麗な男だつた。彼は群集をどん〳〵押しのけると伊達者氣取りで山賊の傍に近寄り口の周圍に馬鹿にしたやうな笑ひを泛べながら臆面なく喋り出すのであつた。

「やあ！　たうとう捕まつたね、カルメロ！　呼んだから來たんだが、何か用かね？」
ネリは口の中で恐ろしい呪の言葉を吐きながら今にも飛びかゝらうとしてゐる猛獸のやうな眼で一寸睨みつけてから、
「俺を裏切りやがつたな――俺の後を尾行て――たうとう俺を追ひつめやがつた！　テレザからすつかり聞いたぞ、さうだ――あの女は今お前のものさ――お前の望みは叶つたんだ。早く彼女のところへ行つてやれ、待つてゐるぞ。彼女のところへ行つてお前に惚れるやうに仕向けるのだ……出來る話ならな！」
かういつた山賊の眼に何かひやかすやうな、おどすやうな調子があつたので若い兵士は驚いて口早に叫んだ。
「それはどういふんだ？　おい！　お前、まさか……あゝ！　殺つちやゐやしまいな！」カルメロは急に殘忍な聲で笑ひ出した。
「自分で死んだのさ！　ハハハ！　お前がそれを聞いたら喫驚するだらうと思つてゐたよ！　彼女は俺の短刀を拔きとつて自殺したんだ！　さうだとも――その方が、お前のその生つ白い謎面を見るよりは、お前なんかに身體を觸れられるよりはずつといゝんだ。彼女を探して來い――今頃は何處かの山の中で笑ひながら死んでゐるよ。しかもあの女の最後の接吻は俺のだつたのだ。よく聞け、この俺にだぞ！　さあゆけ！　碌なことはあるまいぜ。」

この時また近衞兵が脅かすやうに劍を突きつけた。山賊はぐつと怒りをこらへてむつゝり默りこむと平氣な顏を見せたが若者の方は倒れさうにふら〳〵となつた。顏が眞青だ――彼は生きてゐるのか死んでゐるのか意識のないやうにふら〳〵しながら喫驚大目を開いてゐる見物人の間を歩いて行つた。明らかに彼は思ひがけない驚きにぶつかつたのだ――深い重い傷を受けたのだ。
私は一番眞近にゐる近衞兵に近づいて五フランの金を手に摑ませた。
「あの男と話したいんですが……」と、無造作に私が尋ねた。男は少し躊つたが、「一寸ですよ、旦那。簡單にね。」
私は低い聲で盜坊に話しかけた。
「何かアンドレヤ・ルチアニといふ男に傳へることはないか？　私はあの男の友達だ。」
かういふと彼は私をぢつと眺めてその黑い顏に微笑みを泛べた。
「アンドレヤは良い男だ。そんならテレザが死んだことを話してもらはうか。俺はもう死んだも同じだ。テレザを殺したのは俺ぢやないと分つてくれるよ。そんなことは迚も出來ない！　止めようとした時にはもう胸を刺してゐたんだ。尤もその方がよかつたが。」
「屹度他の男のものになるのが嫌だつたからだらうな？」と私が尋ねた。
カルメロ・ネリは默つてうなづいた。私の眼の狂ひであらうか、さしもの兇賊の獰猛な眼の底に涙が浮んでゐた。

その時、近衛兵が私に合圖をしたので後へ引き下つた。と殆んど同時にこの一隊の司令官と覺しきものが鋪道に拍車をカタ〳〵鳴らせながら出て來た――彼は馬に飛び乘ると命令を下した――群集が左右に散る――馬が驅け足で走り出す。そして、忽ちにしてこの一隊は例の山賊の大きな身體を眞中にしたまゝ何處ともなく立ち去つた。人々は其處此處にかたまつてこの事件を聲高に喋り合つた。軈てそれもちり〳〵になつて自分達の家庭へ、それともまた仕事場へと歸つていくのであつた――かうしてさしもの大きな廣小路は瞬く間に元の淋しさに返つた。私は深い考へに沈んで暫くの間其處らをあちこち歩き廻つた。私の心にはいつか凡ゆる男の愛情と迫害から遁れてモンテマヂョレの山中で自殺して死んでゐる美しい可愛いテレザの姿をあのシシリーの船長が話してくれた言葉に賴りながら思ひ泛べてゐるのであつた。してみると、この世の中にはまだ不貞よりも死を選ぶやうな心掛けの女がゐるのだらうか？　妙だ！　――本當に妙だ！　そんな女は或は平凡な女かも知れない。お洒落づくめの男爵夫人なら短刀なんてくだらないと思ふに違ひない――それよりは他の一人の男を選ぶか、それとも多くの男を選ぶかするであらう。不名譽のために死ぬなんて全くさもしい無智だ。近代の教育は、もつと利口なことを教へてくれる。約束の言葉なんて守らうと破らうと御勝手だと教へてくれる。世の中が進歩してお目出度いことだ！　不德が其處此處に隱され、その上から、綺麗なお面を被る。そして吾々は平氣で、しかもその虛僞を知らないで、唯一つのものと思ひこんでゐるのだ。誰もそれに氣がつかない。現に吾々だつてさうだ。素晴しい僞善振りだ。

だん〳〵歩いていくうちにいつの間にか聯隊本部の建物の側を通つてゐた。すると急にあの山賊の捕縛について細々したことを聞いてみたいといふ氣が起つたのでその中へ入つていつた。私を迎へた男は綺麗な學問のあるらしい樣子で私の差出した名刺をチラッと眺めると極めて鄭重な挨拶をした。

「あゝ、さうです！」と彼は私の問ひに答へて、「ネリのためには隨分と手をやきました。けれども今まで暫く隱れてゐたがエタをどうも去つたらしいといふ疑ひがあつたもんで、それにいろ〳〵と方法からの報告と考へ合はせて――どうやら……」

「あの男は直ぐに捕まりましたか？　それとも抵抗しましたか？」

「羊みたいに神妙でした！　かういふわけなんです。私の部下の一人がネリと同棲してゐるテレザといふ女の後をつけて狹い山路の角まで行つたんです。すると急にそこで女の姿が見えなくなりました。私達はこの報告を聞くと時を移さず軍隊を派遣しました。夜中頃二人づゝ組を組んでネリがゐるらしいと思はれた場所の周圍を取り圍んでしまひました。夜が明けると早速攻擊を開始して彼を捕縛したんです。ちつとも驚いてゐないやうで、たゞ一言、『思つた通りだつた！』といつたゞけです。彼は女の死體の傍に坐つてゐました。女は胸を刺したらしいんですが、血が後から後から流れてゐました。あの男はさうぢやないといひましたが、確にあの男が殺したんです――あの男にとつちや謊をつくことは朝飯前です。」

「だが、その仲間はどうしました？　大分大勢の部下がゐたはずですが？」

「その通りです。つい二週間ばかり前のこと、中でも主だつたのを三人捕へましたが、他の連中は皆目行方が知れません。屹度カルメロが豫めみんなを解散させて方々に逃げさせてやつたのです。兎に角もうばら〳〵になつたんですから、それにあんな連中のことですから二度と集るやうな危險はありません。」

「で、ネリの刑は？」と私は尋ねた。

「あゝ、それは終身懲役です。これは動かぬところです。」

私は色々とその男に禮をいつて其處を去つた。細かいことが聞かれたので嬉しかつた。私が祖先の墓所で見つけた例の財寶はこれで本當に自分のものになつたのだ。ネリの部下の一人があれを探しにナポリに來るなんて迚も考へられない。いや、たとへあの盜坊の頭が私のしたことを氣づいたところで、自分の殘した寶が私の素晴しい復讐の資本となると知つたら喜んでくれるだらう。かう思つてにやりと笑つた。總ての面倒が私の眼の前からすつかり消え去つた——私の道から邪魔者が取り去られた。かうしてこれからの道が坦々として來たのだ。どんな些細なことでも私の目的への道の道程標となつてくれるのだ。神樣さへ私の味方だ。神樣は正義のお味方なんだから！　いくら教會へ行つて長いお祈りをして殊勝氣な顏で禮拜しても、根が不信心だつたら賢明な神樣は決してお騙されにはならない。私の妻だつて祈ることは出來る——あの薄暗い神々しい祭壇の前に膝まづいて立派な聖者のやうに祈ることも出來る。あの深い眼を汚れない神樣へ向けることも出來る。しかしだ！　神樣の

話す一言々々は軈て彼女自身に報となつて來る冒瀆の言葉なのだ。謔つきにとつてはお祈りは危險だ——恰度、上向きになつた刃の上に落ちていくやうなものだ。名譽の刀が卑怯者の生命を縮めてしまふのだ。

第十一章

私がナポリに歸つたのは、かれこれ九月も三週間目にならうとする頃であつた。氣候は前よりも涼しくなつた。さしも猖獗を極めたコレラもだん〳〵と力を弱めてきたといふ嬉しい報知が人々の心持を明るくしてゐた。商賣もいつものやうに始まり、娛樂も盛になつてきて、社會はまたも輝かしく踊り出したのであつた。朝早くその町に着くと計畫の手始めとしての準備に移つた。私の宿つた一流のホテルの中でも一番素晴しい部屋を借りて、出來るだけのことをして私の富と地位とを充分に忍ばせようと工夫した。私は態々亭主に向つて自分が馬車を買ひたいと思つてること、立派な給仕、その他これ〳〵のものが欲しいといふことを語つて、そんなものを買ふには何處が一番いゝか一つ教へてくれないかと賴んだ。亭主は私の召使同然だつた——何處の國の國王だつて私ぐらゐ下の者によく仕へられることはあるまい——給仕達でさへ競つて私につくことを名譽と心得てゐるのだつた。王侯を凌ぐ財產、氣前のよさ、綺麗な金使ひ、これ等のことが口から口へと傳はつたのである——これは私の

思ふ壺であつた。

かうしてナポリへ着いての第一日目の夕方がやつてきた。そしてこの私は、人々の羨望の的であるフェザレ・オリーヴァ伯爵は愈々復讐の第一歩に進んだのである。この美しい國でも一番美しい夕方であつた。微風が海から吹いてきた。空は眞珠のやうに、蛋白石のやうに清らかであつた。その上靜かに流れてゐる深紅と青に染められた雲の向うに輝いてゐた小さな光の群にも似た多くの雲は散り敷いた花の雨のやうに見えた。ナポリ灣の水は吹く風に細かく動いて白い泡で縁どられた青黑い波を起す。夕飯後私は宿を出かけて、嘗て私がファビオ・ロマニ時代によく行つたことのある有名なカフェに行つた。ギドー・フェラリはこの常連の一人だから其處に行つたら彼が見つかるだらうと思つてゐた。白と金に輝いた部屋々々は一杯であつた。夜の涼氣を味ふ人々のために數百のテーブルが街中までも出されてゐたが、其處には人々が坐つて氷や葡萄酒やコーヒを呑みながら疫病が衰へてきたといふ愉快な報知に陽氣に話してゐた。私はそつと周圍を見廻した。さうだ！　思つた通りだつた——私の昔の友達、私を裏切つた敵が足を組んで樂々と椅子にふんぞり反つてゐるではないか。彼は煙草を喫つてゐたが、時々讀んでゐる巴里の「フィガロ」紙越しに此方をちら〳〵眺めるのであつた。全身黑づくめで、その地味な色が彼の眞白な美しい顏にぴつたりと合つてゐた。時々葉卷をとるために擧げる恰好の良い手の指には、夕闇の中でも強く輝くダイヤモンドがちりばめてあつた——大きさといひ、光といひ非常に珍しいものだつた。が、遠くから見てゐるこの私にはそれが嘗ての自分のも

のであつたことが認められた。

さうだ！　君は君の死んだ友人から記念品として高價な寶石を貰つたわけだな。さう思ひながら陰險な顏を見守つてゐるうちに、軈て我に返つてゆつくりと彼の方に歩いて行つた。彼の隣りにあいてゐるテーブルを見つけたので、其處へ椅子を引きつけると坐つた。彼は新聞越しに私の顏を覗きこんだが、たゞの黑眼鏡をかけた爺さんに過ぎないと思つてか再び新聞に讀み耽るのだつた。私は持つてゐたステッキでテーブルの端をたゝいて給仕にコーヒを命じた。それから葉卷に火をつけてフェラリのやうにゆつたりと構へこむとふかし始めた。何か私のある態度が彼を引きつけたとみえて、新聞を側におくとまたも私の顏を見つめるのであつた。先刻よりはもつと強い好氣心と不安さを顏に泛べて。

「愈々おいでなすつたぞ」と私は腹の中で思つたが、一寸側を向いて何處かを見守つてゐる振りをした。軈て私のコーヒが持つて來られた。私はその勘定と莫大のチップをその給仕に投げてやつた。すると奴さんどう考へたもんか、馬鹿丁寧に私のテーブルを拭き始めて其處いら邊に散らばつてゐる新聞や雜誌とかを書き集めて私の右手にうづ高く積んだ。私はこの愛想の良い給仕に向つてしやがれた落着いた聲で聞いた。

「ところで、あんたナポリのことをよく知つてゐるか？」

「よく存じて居ります。旦那。」

「それでは、ファビオ・ロマニ伯爵といふ金持の貴族がこの町にゐる筈だが、あんたはその家にいく

道を知つてゐるかね？」

今度は見事巧くいつた。いかにも表部では見て見ぬ振りをしてゐたフェラリもこの言葉をきくと驚して、不安氣に身體を動かした。私のこの問ひに答へて、給仕は眼を上げてぢつと私の顔を見てゐたが、大分殘念さうな身振りで肩をゆすつた。

「あゝ、旦那様！　お亡くなりになりましたよ！」

「死んだつて！」と私はさも〳〵驚きに堪へないといふ風に大聲を上げた、「あんなに若い身空で！　そんなことがあるかね！」

「どうしてだと思ひになりますか？　旦那、疫病ですよ。どうにも仕方がなかつたのです。疫病のことですから、若からうと、年とつてゐやうと、金持だらうと、貧乏人だらうとちつとも構つちやくれません。」

暫くの間私は頭を抱へてこの報知が馬鹿に突然だといふやうな樣子をして見せた。

「あゝ！　遲過ぎたな！　わしはあの男の父親の友達でね、隨分こつちにゐなかつたが、子供の時見たきりの當代のロマニ伯爵に會ひたかつたのだよ。何か親類筋でもあるかね？　あの男は妻君を持つてゐるかね？」

私の悲しみに對してさも〳〵同情を申上げるといつた顏付で給仕は一寸顏を曇らせてゐたが急に明るい顏色になつて答へた。

「あゝ、旦那様、おありになりますよ！　ロマニ伯爵夫人樣はあの高臺の屋敷においでゞす。尤も伯爵樣がお亡くなりになつてからどなたにもお會ひになりませんが、あの方はお若くて天使のやうに綺麗でいらつしやいます。それにお子さんもおありなさるし。」

この時フェラリが惶てゝ動いたので私は眼を、いや眼鏡をその方に向けた。彼は前こゞみになつて昔のやうに丁寧に帽子をとると靜かにいつた。

「お話中を甚だ失禮ですが、私は亡くなられた當代の伯爵をよく――いや、ナポリ中の誰よりもよく存じてをります。あの人についてのお話なら何なりともお答へします。」

あゝ、この男の綺麗な聲、私は吾々が若かつた時代に唄ひ合つた古い歌を、今また唄はれゐるやうに、この聲を聞いた時は大分心を動かされた。暫くは口がきけなかつた――怒りと悲しさで胸が一杯になつたが、この感情も直ぐに消えてしまつたので、彼の挨拶に答へてゆつくりと帽子をとると堅い調子でいつた。

「これはようこそ御有つて下すつた。あなたがあの若いロマニの親類にでもわしを引合せてくれたら光榮の次第ぢやが。先代のロマニ伯爵とは兄弟よりも親しい間でな……實際今の世の中では珍しいくらゐの親交だつたよ。偖て、わしの名前ぢやが、」といつて私は一寸形式的に頭を下げてから自分の名刺を渡した。彼はそれを受取つて名前を呼び終ると、驚きと尊敬の混り合つた眼つきでちらりと私を見やつてから、

「あのッェザレ・オリーヴァ伯爵でいらつしやいますか！　あなたのお眼にかゝつてこんなに幸福なことはありません。あなたのおいでになることがもうとつくに社交界に知れ渡つておりますので、私どもはよく存じておりましたが、」とこゝで一寸笑つて、「ナポリに來て戴くなんて眞に光榮と存じます。たゞ、長い滯在から歸つていらつしたあなたがこんな悲しい報知をお聞きにならなければならなくなつたことについては遺憾なことゝ御同情申上げます。この吾々の明るい南國にいらつしやれば、もうこれ以上お悲しみになることはないと思ひますが。」

さういつて彼はいかにもさばけた人の良さゝうな樣子で私に手を伸した。かういつたところは伊太利人獨特の性質で、彼の場合にあつては殊にそれが強く感じられた。冷たい戰慄が私の血管をかけ廻つた。あゝ！　この男の手を握らなければならないだらうか？　あの私の計畫を果すためにはしなければいけない。今若しこれを私が斷つたなら彼は變に、いや、亂暴な奴とさへ思ふだらう。そして、折角の計畫も臺なしになつてしまふのだ。私は無理にも笑ひ顏をつくつて彼の手を摑んだ。私の手は手袋をはめてゐたが、それでも彼に握られた時には、手袋の下の手が燃えたぎつてゐるやうに思はれた。その瞬間は實に苦痛だつた。もう少しで大聲を出すところだつた。しかし、この難關もこともなく終つた。そして、もうこれからは幾度この男と握手しやうと少しも驚かないぞといふ覺悟が出來なゐた。兎に角この第一回が迚も辛かつた。フェラリはかうした私の氣持なんかには全然氣がつかなかつた。それどころか大分御機嫌で、先刻から一部始終見つめてゐた給仕の方に向つて、

「もう少しコーヒを持つておいで、給仕、それにグロリヤを二つ持つといで、」それから私の方に向きなほつて、「伯爵グロリヤは如何ですか？　お呑みになりません？　承知しました。これが私の名刺です。」彼は紙入れから一枚の名刺を出すとテーブルの上に置いた。「ギドー・フェラリと申しまして貧乏な畫家です。ではお互に健康を祝すために一杯やりませう！」

私は承知した。給仕はその註文を引き受けると部屋を去つた。フェラリは自分の椅子を私の傍に引き寄せて、

「先刻お煙草をあがつてゐたやうですが、私の葉卷を一ついかゞですか？　仕極く上等な奴でして、失禮。」かういつて彼は銀の素晴らしい彫刻の入つた煙草入れを私に勸めた。それにはロマニ家の紋章と私の頭文字が刻れてあつた。私の物だ——私は殘忍な喜びに震えながらそれをとつた。死んで以來始めて手にしたのだ！

「なか〳〵お珍しいもので、」私は幾度も〳〵それを手の中にひつくり返して、「變つた立派なものですな！　贈物？　それともお遺品ですか？」

「これは亡くなつた友人のファビオ伯爵の物でした。」と口から葉卷をとつてぷつと煙を吐き出してからいつた。「これはあの人の最後まで傍にゐた坊さんが友人のポケットから見つけた物でした。その他あの人の身體につけてゐた細々した物はみんなあの人の奥さんに渡されました。そして……」

「ぢや夫人があなたにその煙草入を死んだ親友の遺品として下すつたわけですね。」と私が彼の言葉

を途中できつていつた。
「その通りです、全く巧くお當てになりました。」彼はにこ〳〵しながら私の返した煙草入れを手にとつた。
「ロマニ伯爵夫人はお若いですか？」と到頭きり出した。
「眞夏の朝みたいに若く美しい方です！」フェラリの語氣は熱心である。「實際あんな綺麗な夫人は珍しいです！　若しあなたがお若かかつたら、伯爵――だが、もうそんなお年寄りでは、お髪がそんなに白くては……私ははつきり申しますが、成程フェビオ君は私の友人であり、なか〳〵立派な男でしたが、あの夫人にだけは均り合はなかつたと思ひます！」
「成程ね！」私は心臓を短刀でぐさりとやられたやうにヒヤリとした。「私はたゞあの人の子供の時を知つてゐるだけです。私はなんだか愛情が暖かく、可愛い、應揚な人なつこい子供だと思つてゐましたがね。將來有望さうに見えたのです。あれの父親もさう考へたし、この私さへさう思つてゐました。幾度も幾度も私のところへ便りをくれましたがどうか子供のゆく〳〵は頼む、財産の方も面倒見てやつてくれなどといつてきました。慈善に大分金を出さなかつたですか？　確か本が好きで、遊びもあつさりしてゐたと思ひましたが。」
「え〻、その通りです。」とフェラリがいくらかいら〳〵して答へた、「實際あの人はこの汚らはしいナポリの町では一番道德家です、勉强家でむつつりやで――完全な紳士でしたな。自尊心が强く潔癖

で、寛大で……それに少し馬鹿でしたな。」
私はむづ〳〵して來た――だが、今の場合の役割を思ひ出して急に大きなしやがれ聲で笑つた。
「いや、なか〳〵！　あなたはなか〳〵立派な青年でいらつしやる！　堅い男が嫌ひだなんて、ハハハ！　立派な心懸で、全く御説の通りですよ。當今では堅僧といへば馬鹿にきまつてゐます。さうですとも、長い經驗でそのことはよく分りました。さあ、コーヒが來ました。それグロリヤと！　ではフェラリさんあなたの健康を祝して、これからの交際のために一つ！」
一寸の間彼は餘り私が急に陽氣になつたので驚いたらしかつたが、軈て彼もいかにも愉快さうに笑ひ始めた。そして、給仕がコーヒとコニャックを持つて現はれた時、調子づいて來た。彼はその給仕があるアンティネッタといふ女に首つたけだといふ不躾な冗談をやり始めた。當の給仕は大分てれてにや〳〵笑つてゐたが、またもフェラリと私から與へられたチップをポケットに入れると他の客人の註文をとるために出ていつた。その樣子には馬鹿に機嫌が良ささうなところがあつた。私は最前の話を更に續けて、
「で、その可哀さうな氣の弱いロマニは――急に死んだんですか？」
「本當に急でした、」とフェラリが綺麗に上氣した顏を、今し方、空に一つ〳〵出始めた星の方に上げながらぐつと身體を椅子にうづめて答へた。「はつきりは分りませんが、なんでもその日はひどく暑い八月の朝でしたが、いつものやうに彼は早起きをして散歩に出ました。で、屋敷の端れに來た時

に、コレラに罹つて死にさうになつてゐる果物賣りを見つけたさうです。勿論彼は持合ひの義俠心でその少年を見棄てるわけにはゆかなかつたのでせう。そこで醫者を探すために狂人のやうになつて、折しも暑いナポリの町中を驅け廻つたのです。ところが、彼が見つけたのは醫者ではなくて坊さんでした。早速この坊さんを連れて果物賣の少年のところへ一緒に急いで行かうとしました、（この果物賣の少年の方は、しかしその心配の效もなくその間に死んでゐたのですが）その時に奴さんも到頭疫病に罹つてしまつたのです。彼の身體は直ぐにある安旅館に運ばれました。そして五時間もすると息を引きとつてしまひました——死ぬまで彼は自分の眼の黑いうちは、いや、死んでしまつても自分の家には身體を運んではいけないと喚いてゐたさうですが。その點は少くともなか〳〵よく考へてゐたと思ひます——全くあの病氣を妻や子供に傳染されちや堪らないと思つたからでせうね。」

「その子は男ですか女ですか？」と私はなんでもなささうに尋ねた。

「女です。ほんの赤ん坊でしてね——父親そつくりな、どうもあまり面白くない子供ですよ。」

私の可哀さうなステラ！

昔はあんなにまであの子を可愛がり、いかにも愛してゐるやうに見せかけたこの男が今はこんなにまで惡し樣にいふ、その冷淡な氣持を思ふと私の全身は怒に震へるのであつた。この男はあの子を父なし子と思つてゐるのだ。その上、この男はあの子の母親が成るたけあの子のために氣を使はないやうに腐心してゐるのだ。こんな具合ひでは今にあの子はのけものにされ、一人ぽつちになつてしま

ふだらう。だが、私はなんとも答へなかつた——たゞぽかんとした樣子で一寸の間コニャックをすゝつてゐたが、

「伯爵はどういふ風に埋められましたか？　貴方のお話はなか〳〵愉快です。」

「えゝ、一緒にゐた坊さんが伯爵の埋葬にまで立ち合ひました、きつと最後の聖餐禮をやつてやつたことでせう。兎に角鄭重に代々の墓所に埋めてやつたのです——私も葬式に參列しましたが。」

私は思はず驚いたが、直ぐにその氣持を抑へつけて、

「貴方もおいででしたか？　——貴方も——貴方も……」私の聲はもう少しで消えさうだつた。

フェラリは訝し氣な顏で眉毛をぐつと上げると、「勿論です！　どうして驚かれるのですか？　どうもよくお分りにならないやうですな！　私は伯爵の一番親友でした、兄弟よりも親しいといつて良いくらゐで、さういつた譯で私が伯爵を最後の安息所に送つたつて普通の話です。いや、當然さうすべきです。」

この頃には私も元通りに返つてゐた。「成程——成程、いや、どうも失禮しました——この私はどうも病氣の話を聞くとかつとなるのでしてね。さぞかし貴方も病氣が傳染りはしないかと御心配だつたでせう。」

「私がですつて！」と彼は愉快さうに答へた。「私は今まで病氣に罹つたことがありません。コレラなんかは一寸も恐しいとは思ひません。それや普通の人からいへばあの時は危險だつたかも知れま

せん――ところであの坊さんは到頭その翌日に亡くなりましたよ。」
「それや驚きましたね！」とコーヒを呑みながらもぐ〳〵いつた。「隨分恐しかつたでせうな？」
「いえ、一寸も、本當のことをいひますと私には病氣では決して死なないといふ信念があるものですから傳染病なんて平氣なんです。豫言が、」こゝで彼の顏に一沫の影がさした――「私が產れた時に妙な豫言をされましてね。尤も當るか當らないか分りませんが、疫病のあつた時にも決して罹らないといはれました。」
「成程！」私は興味深氣にいつた、全くこれは私には初耳だつた。「で、その豫言はそれから？」
「かうなんです、私はある親しい友人の手にかゝつて死ぬだらうといふのです。これは私の乳母がいつたことです、全く馬鹿氣きつてゐますよ――それに私のたつた一人の友人が死んで埋められたんで、今は友達と名のつくものはゐなくなつたんですからね――あのファビオ・ロマニがね！」
かういつて彼は一寸嘆息をついた。私は顏を上げて彼をぢつと見守つてゐた。

第十二章

私は黑い眼鏡をかけてゐたので、かうやつて此方から向うを睨めつけてゐたところで氣どられる筈はない。彼の顏にはどこか悲しさうな暗さが泛んでゐた。眼は考へ深氣に陰氣であつた。

「貴方は御自分の友達が馬鹿でもやつぱり愛してゐられますか？」と私は尋ねた。
彼は物思ひの樣子からもとに返つてにこりとすると、
「愛してゐるかといはれるんですか？　いや！　さうでもありませんな――愛するといふほど强いものぢやありません！　確に好意は感じてゐました。私の繪をよく買つてくれたんですからね。どんな貧乏畫家だつて自分の顧客に對してはいくらかの尊敬をもつてゐるのです。さうです、好きだつたとはいへますな……少くともあの男が結婚するまでは。」
「はあ！　といふとあの男の妻君が第三者として現はれてきたんですな？」これを聞くと彼は一寸顏を赧らめて、慌てゝコニヤックの殘りをぐつと呑み干した。
「さうです、妻君が僕たちの間に入つたんですね。男といふものは結婚すると變りますからな、ところで大分長く坐つてゐたやうですから一つ散歩に出かけやうぢやありませんか？」
彼は明らかに話題を變へたがつてゐた。私は年齡のために關節が堅くなつてゐるといふ風を見せかけると、ゆつくりと立上つて立派な寶石入りの時計を出して見た。九時過ぎである。
「私の旅館まで御一緒においで下さるでせうな。私はどうしても早寢をしなければなりませんので――御覽の通り慢性の眼病でしてね、」といつて眼鏡に觸れながら、「殊に人工の光はとても堪らないのです、では歩きながらもつとお話しませう。いつか貴方の繪を見せて戴けませんか？　私も一つ貴方のパトロンにならして戴けないものでせうか？」

「それはどうも有難うございます！　實にお恥しいもんですが、喜んでお見せしませう。中に一つでも貴方の御趣味に叶ふものがありましたら光榮でございます。しかし、私も昔のやうに買手を見つけて歩くのに苦しまなくてもよくなりました――もう六ヶ月もするとこの商賣を止めようかと思つてゐるのです。」

「成程！　財産でもお出來になつたのですか？」と私はいかにも無頓着に聞いた。

「いや、それほどでもないんです。近く結婚しようと思ひましてね。尤も同じことになるかも知れませんが。」

「成程！　お目出度う！」と私は努めて無關心に、いくらか退屈を覺えたやうにいつた心算だが、私の心中はむら〳〵する怒で一杯になつた。彼のいつた意味がよく分つたからだ。社交上の禮儀からいつても寡婦と他の男との結婚はどんなことがあつても六ヶ月は待たなければならない、いや、それでも兎や角いはれるものだ。六ヶ月――この間にどんな思ひがけないことが起るか、どんな苦悶の計畫が實行されるか、どんなに物凄い報いが來るか！　こんなことを考へながら私はぢつと默つたまゝ彼と肩を並べて歩いた。月がキラ〳〵と輝いてゐた。濱では娘たちが戀人と、笛と、マンドリンの音に合はせて踊り狂つてゐた――ずつと遙か彼方の灣の上ではどこかのボートからであらう、甘い、悲しい歌聲が響いてくるのであつた――それは美しい靜かな夜であつた。けれども私は――私の傍を呑ん氣な顏で、かうも氣をゆるした樣子で歩いてゐるこの優しい假面を被つた惡黨を見ると、今にもそ

の咽喉めがけて飛びつきたい思ひであつた！　若し知つてゐたら、若しこの男が感づいたら、まさかこんなににこついてはゐられまい。こんなに呑ん氣で平氣ではゐられまい。私はなもそつと彼の顏を盜み見てゐた。彼は聞えないやうな低い聲で靜かに歌を唄つてゐたが、急に私の眼が彼に注がれてゐるのを本能的に感づいてゐたのだ。その歌を止めて此方に向きなほると、

「伯爵、貴方は諸所をお歩きになつていろんなものを御覽になつたでせうな。」

「え〻。」

「どの國の女が一番綺麗でしたか？」

「失禮ですが、貴方」と、私は冷たく答へて、「いや、仕事のために殆んど女の世界を知らないのです。私たゞひたすら金を作ることに夢中でした。何しろ金は總てを得る鍵ですからな。たとへ女の愛にしてもですよ。勿論そんなことはしませんでしたがね――だから私はどんなのが綺麗な女で、どんなのが醜い女なのか見當がつきません――今まで女に心を引かれたことはありません。さうしたわけで、こんなに年をとつてもやはり昔の氣持は變りませんね――だがこりやどうもみなさんに好かれないでせう。」

その時、フェラリは笑つた。「貴方はファビオそつくりですね！　あの男も結婚する前はそんなことをいつてゐました。勿論あの男の方は若かつたし、それに貴方みたいに經驗からきたことぢやないんですからね。けれども、直きに奴さんは自分の意見を變へてしまひました――尤も、それが當然

です。」

「すると妻君は綺麗な女だつたのですね！」

「非常なもんで！　上品で、こつてりしてゐた。が、今に貴方がお會ひになれば分りますよ。亡くなつた夫の父親の友人として御訪問なすつたら如何ですか？」

「この私ですか？」と私はそつけなくいつた。「別に會ひたいとは思ひませんが、それに淋しい寡婦といふものはめつたにお客をよばないものです。その悲みの邪魔をしては惡いでせうからな。」

ところで今私が裝つた全くの無關心さくらゐ覿面なものはなかつた。といふのは私がロマニ伯爵夫人に會ひたくないといふ素振りを見せれば見せるほどフェラリは會ひたがらせるからであつた（私を引合せる！　……私の妻に！　まるでこの男は態々自分の墓穴を掘つてゐるやうなものである）

「是非お會ひなさい！　きつと下にもおかない饗應振りをしてくれるでせう。貴方の御年輩と、亡夫の家族と昔御交際があつたといふことが、きつと夫人を喜ばせるに違ひありません。それにあの女はそんなに淋しがつてゐないのです。」とこゝでこの男は急に默つた。その頃二人は旅館の入口に著いてゐた。私は彼の顏をぢつと見て、

「そんなに淋しがつてゐないんですつて？」と不審さうに尋ねると、フェラリは作つたやうな笑をして、

「どうして、そんなことがあるもんですか、若いし、呑ん氣だし――身體も、綺麗さも今が盛りです

もの。どうしたつて、いつまでもめそ〳〵してゐられますか？　殊に、それほど思つてゐた男でもないし。」

私は宿の階段を上つた、「お入りになりませんか！」と手眞似でよんで、「一つ葡萄酒を呑んでいらつしやい、先刻……貴方は夫人が亡夫のことを思つてゐなかつたと仰有いましたね？」

フェラリは私の親し氣な調子になほも力を得たものか、今までよりももつと氣樂な氣持になつたらしかつた。二人が宿の廣い廊下をとほつた時には彼は私の腕に自分の腕を組み合せて親し氣にいふのであつた。

「だつて伯爵、たゞ金のために父親から强制された結婚で、どうして本當に男が愛せませう。先刻もいつた通り私のその友人は全く自分の妻君の美しさといふことに無感覺でした――石のやうに冷淡な男で、本の方が好きだつたくらゐですから夫人が愛せなかつたのも無理はありません。」

もうその頃には私の部屋の所に來てゐた。私が扉を開け放すと、フェラリは部屋中にある高價な贅澤な道具をまぢ〳〵と見廻してゐた。

「先刻もいつた通り、ねえ、フェラリ君、私は女については何にも知らない。ましてや女の愛とか憎みについては盲目だ。今まで私は女なんていふものは氣まぐれな小猫みたいなもんで、脊中を撫でてやればごろ〳〵と咽喉をならし、尻つ尾をふれば飛びつくやうなもんだと思つてゐた。このモンテ・ブルチアノは如何です！」

彼は私が差出した盃を受取つて、いかにも通らしさうに味はつてゐた。
「美味しいです、」とピチ〳〵舌なめづりをしながら咳やいた、「まるで王侯のやうな生活ですな、伯爵、羨しいです！」
「そんなことはありませんよ。貴方は若さもあり、健康もあり、それに最前の話のやうに女もあります。しかもこれだけ揃つてゐれば金なんかよりはずつといゝなんていふ人もありますからな——尤も私は女なんて信用しませんが、私は單なる動物です。安樂と呑ん氣が何より好きです。これまでいろいろと苦しい目に會つて來たのですが——今やつと私の好きな風に休息することが出來るといふわけですな。」
「それにしても實に立派な、凝つた休息ですな！」とフェラリは安樂椅子の繻子の背に安氣さうに頭をもたせながら笑つてゐた。
「伯爵、かうやつてぢつと貴方を見てゐますと、貴方はお若い時分に隨分綺麗でしたでせうな。良い身體をしてゐられますよ。」
私は堅くなつて頭を下げた、「とんでもない！　尤もそんなに醜いとは思ひませんでしたがね。男は何ていつたつて容貌よりも力です。今でも私は力だけはある心算です。」
「さうお見受けしますね。」と私の顏を相變らずぢつと眺めながら答へた。彼の眼には少しも不安な光がなかつた。

「これは勿論、偶然の一致でせうが、貴方の脊丈といひ、風裁といひ、死んだロマニによく似てゐますね。」
私はその時自分の盃に急いで酒をつぐとぐつと呑み干した。
「本當ですか？　若し思ひ出が樂しいものなら、貴方のお友達を思ひ出させていたゞくのは、私の身にとつても喜ばしい次第だが！　だが、脊の高い男なんていふものは相當なものを著てゐる限り姿、形ではさう變つちやいませんよ。」
フェラリは何か物思はし氣に額をしかめて默つてゐた。でも、まだ私の顏を見てゐる。そこで私の方からも平氣な顏で見返へしてやつた。軈て彼は我に返るとにこ〳〵と笑つてモンテ・ブルチアノの盃を一息に干してしまつた。さて愈々歸るといふ段になつて、
「ロマニ伯爵夫人に、貴方のお名前をお告げしても構はないでせうな。夫人はきつと喜んでお迎へします。」
私は一寸當惑したといふ顏を見せて、急にいら〳〵しながら、
「どうも夫人と話をするのは好まんですがな。四六時中屁理窟ばかりいつてをつて實につまらぬですからな。しかし、貴方が强ひてとのお賴みならば、伯爵夫人にお傳へ願ひませうか——貴方さへお差支なくば。貴方につまらない面倒をおかけするのもどうかと思ひますが、でも、こゝのところ貴方はお會ひになる日がないでせう。」

彼はこれを聞くと少しばかり顔を赧らめて落著かない様子を示したが、やつとのことで答へた。
「どう致しまして、實は今晩會はうと思つてゐるので、貴方のお志を先方にお傳へ出來れば非常に嬉しいですが。」
「いや、そんな心持なんて、」と私はぢつと眼を光らして彼の態度に現れた、當惑の様子を見守りながら更に言葉をつゞけた。「一寸一言いつて——どんなに私が死んだ伯爵にお目にかゝりたく思つてゐたかといふことをな。私は若い時代に先代のロマニ伯爵に大分恩を受けたのです。で、その親切が忘れられないんです——一體に私の記憶は利益と不正といつたやうなものに對しては、非常に強いんです——さういふわけで、いつかそれ相當の御恩返しをしなければならないと思つてゐたんですが、それも急に死なれたといふわけで到頭私の望みも駄目になつてしまひました。だが、私がそんな寶石を持つてゐたところで何の役にも立たないのですから、若しロマニ伯爵夫人がその氣さへあるなら、夫人に差上げても良いと思つてゐるのです。夫が生きてゐたところで勿論夫人のものになつてゐたでせう。で、貴方がこのことを夫人に知らせて下さつて、夫人の意向を確めて下さつたら非常に有難い幸福ですが。」
「喜んで仰せの通りに致しませう。」フェラリから丁寧に答へると愈々立上つた。「私もそんな重大な使命を帶びてゐると思ふといさゝか自慢が出來ます。綺麗な夫人が立派な寶石をつけたとて誰が文句をいひませう！　キラ〳〵する眼と、ダイヤモンドは、なんとよく似合ふことでせう！　ではまた伯爵！　これからもチョイ〳〵會はせて頂きます。」
「勿論ですとも。」と私が靜かに答へた。
彼が慇懃に手を握つたので私も今はすつかり身につい た冷靜さでその別れの挨拶に答へた。かうして二人は別れた。私が客間の窓から見てゐると、彼がゆつくり宿の階段を下りて町に出て行くのが見えた。しかし、その歩き振りのいかにも陽氣なことが不愉快であつた——どんなに私は彼の馬鹿丁寧さ、呑ん氣さが憎らしかつたであらう。綺麗な頭と肩との釣合ひ、自信あり氣な歩き振り、明らさまな見榮、その様子には全く自分を待つてゐる將來がいかにも明るいもんだと定めこんでゐる滿足さが溢れてゐた——似而非の六ヶ月の喪がすつかり過ぎてしまつた日からの將來が。
彼は一度足を止めて此方をふりかへつた。そして帽子をとつて額と髮の毛を冷たい微風にあてゝゐた。月光が彼の姿を照らして横顔がくつきり浮んだ。それは恰度夕暮の濃く青い空を背景として美しく刻まれた貝殼に似てゐた。私は物凄い魅力にとりつかれたやうに彼をぢつと眺めてゐた——それは獵夫に追ひつかれて眼の前に閃めく白刃を見せられた時の牝鹿の氣持であつた。彼は私の掌中のものだ。態々自分から私の張つた罠に落ち、情け容赦の全然ない人間に征服されたのだ。彼のしたこと、いつたこと總て私の豫めの計畫を妨げはしなかつた。若しあの時、彼が彼の親しい友人であり恩人であるところのフェビオ・ロマニに對して、少しでも優しい言葉を語つてゐたら、たつた一言思ひやりのある言葉を私の記憶の中へ刻みこんでおいたら、一寸でも殘念だとほのめかしたら、この私もい

くらか手をゆるめて復讐を少し輕くさせてもいゝやうに思つたかも知れない。何故といふに、本當に罪の深いのはどちらかといへば、私の妻なのだから、(あの女が少しでも貞操を守つてくれたら女としての名を汚さなくても濟んだのに)だからフェラリが私に對して、死んだと思はれたこの私に對して一寸でも友情を示してくれたなら萬事は好都合に運んだらう。成程彼は私に反旗を飜ひしましたけれど、もとを正せば女にそゝのかされたのだから、幾分か手加減はしてやるものを。だが、彼はそんな素振りを一寸でも見せなかつたのだ。從つて躊躇する必要も、憐れんでやる必要もなかつたのだ。私は彼が帽子をとつて立つたまゝ月光に照されてゐる姿を見てゐるうちにそんなことを考へてゐたのだ。あの男は誰のところへ行くのか? 勿論妻のところだ。行つて後家の涙を拭つてやるのだ。傷ついた心臓を慰めてやるのだ——眞に情深いお方だ! 軈て彼の姿がゆつくりと消えていつた。私は彼の姿が見えなくなるまで見守つてゐた。それから今日の仕事にすつかり滿足を覺えながら窓のところを去つた。かうして復讐の第一歩を踏んだ。

第十三章

翌朝早くフェラリが訪ねて來た。恰度私は朝食をとつてゐるところであつたので彼は食中を失禮と辯明して、

「朝早くから大變失禮ですが、ロマニ伯爵夫人が急に私に用を頼んだもんですから早速伺ひました。全く吾々男は女の奴隷ですよ。」

「さうとも限りませんな、」と彼に椅子を勸めながらぶつきら棒にいつた。「例外といふものがありますす——例へばこの私ですよ。コーヒは如何ですか?」

「有難う、朝食はとうに濟ませて參りました。どうかそのまゝで、用向きは直ぐ終りますから。伯爵夫人のいはれるには——」

「昨夜お會ひになつたんですな!」

彼は一寸顏を赧らめて、「えゝ、——でも——たつた二三分でした。貴方のお言葉をお傳へしました。すると夫人は貴方に感謝をなすつて、有難く寶石は頂戴するが兎に角一度おいで下さらなければ戴くわけにはゆかないと、かう申されるのです。兎に角あの女はまだ喪中ですから普通は客人を避けてゐられるのですが——貴方だけは——何しろあの家の古くからの友人だといふので迎も會ひたがつてゐます。」

「どうもひどくお世辭が上手でいらつしやいますな。」と一寸皮肉な調子でいつて、「實際こんなお招きを受けたのは始めてゞす。ですが、今のところお受けすることが出來ないのが殘念です。どうか夫人によろしくお傳へなすつて——貴方がまあ巧い言葉を考へて下さつて機嫌を損じないやうにして下さい。」

彼はこの時一寸思ひがけないやうな顔をした。そしてその口調を幾分氣取つて、「では本當においでにならないのですか？　――あの女のお頼みをお斷りになるのですか？」

私はにこりと笑つた。「いや、フェラリ君、どうも私は我儘者で、どんなにお美しい夫人でも好きになれない性分でな、このナポリに商賣上の話があつてどうしてもその方にかゝらなければならん。取引が終つたら、それや氣晴しに何かつまらないことをやつて見るかも知れないが、今のところお美しい夫人の交際は困る。見られる通り綺麗な謊をつけない老耄の不作法者で。しかし、いつか夫人をお訪問するやうな暇があるかも知れないから、せい〳〵仕草も練習しておきませう。兎に角、貴方は私が行けないといふことを先方に行つて巧い具合ひにいつて下さい。」

先刻から困りきつた顔をしてゐたフェラリも、この時にこりとして到頭大聲で笑ひ出した。「確にさう申しませう！　本當に貴方は變つてゐますな、伯爵！　實際、皮肉ですよ！　貴方は確に女嫌ひですね。」

「いや、どう致しまして！　世の中に憎みぐらゐ強いものはありませんからな、」私は朝の食事の最後の美味しい桃の皮をむき、それを割りながら冷淡に言葉を續けるのであつた。「憎みは激しい感情です。しかし深く憎むためには深く愛することが必要です。いや――私は初めから女なんて憎むだけの値打もないと考へてゐたのです。あゝいふ連中には何の關係もないのです。實際、女は男の厄介な荷でしかありません――見たところ綺麗で輕い荷ですか、本當は恐ろしい重い荷なんです。」

「でも、多くの男はその荷を喜んで引受けるではありませんか？」とフェラリが口を挾んだ。私は彼をギロリと睨めつけた。

「男は一體に自分の慾情に負け易いものですよ、」と私が答へた、「それが樂しみでありさへすればどんなものでも手當り次第に掴みかゝるのです。愛だなんていつてゐるが、あれは血に狂つた動物の本能です。その本能のために、男は恰度卑しい學校の生徒が熟した果物を掴むやうに、綺麗な女に掴みかゝるのです――偖て自分のものにしてみると、どれだけのことがあるでせう。これが良い例です。」といつて私は今恰度食べ終へた桃の核を差出した。食べてしまつた果物ですよ――何が殘つてゐます？　辛い核ではありませんか？」

フェラリはぶる〳〵と身體を震はせた。

「伯爵、私は貴方の說に贊成出來ません。いや、そんな議論は止めませう。それや貴方のやうな人から見れば仰有る通りかも知れません。だが、若いものにはこの人生は何か樂しい花園のやうに見えるのです。そして女の微笑は花の上に降り注ぐ日光のやうなものです。貴方だつて昔はさうお思ひになつたに違ひありません。何と仰有られたつて貴方が戀をなさつた時代があつたのです！」

「あゝ、そりや私だつて戀しいと思つたことがあります。ところでその戀しいと思つた女は氣高い女だつたんだ――私はその女に相應しくないと、まあいはれたんだな！　兎に角、私はその人の德を信じてゐたし同時に私の腑甲斐なさを諦めたんだ。そしてその女はすつかり忘れてしまつた。」

彼は變な顔をした。「しかし、女を諦めるにしてはとうも少し可笑しな例ちやありませんか？」
「そりや、可笑しいですよ。第一珍しいですからね。けれど私にはそれで充分なんです。ところで、他に面白い話をしてくれませんか？　例へば貴方の繪でも、いつ見せてくれますかね？」
「いつでもお宜しい時に、でも來て見て戴くほどのこともありません。この頃は少しも勉强してゐないんです。貴方のお氣に召すかどうか全く疑はしいもんです。」
「貴方は自分の才能を卑下していらつしやる。今日の午後、貴方の畫室にお伺ひしてもようございませう？　三時から四時までの間に一寸あきが出來るので、その時でよかつたら……」
「結構です、」と感謝の色を泛べて、「けれど、がつかりなさいますよ。私は實際、今では畫家ぢやないんですから。」
私は笑つた。そんなことはよく知つてゐたが別に返事もしなかつた。「例のロマニ夫人に差上げる寶石のことですが、貴方にお見せしませうか？」
「どうぞ、屹度珍しいもんでせう？」
「まあ、さうですな、」から答へて私は部屋の隅にある書きもの机の方に歩いていつた。それから鍵をあけると、私がパレルモで拵へさせた大きな四角の彫刻入れの櫛の寶石入れを取り出した。それには、大きなルビーと、ダイヤモンドの首飾と、それと對の腕飾、頭のピン、青玉の指環、二十四面金剛石の十字架、それに墓で見つけた眞珠の垂飾等を入れてあつた。この垂飾を除いた他の寶石は私

の看視のもとで、パレルモのある腕きゝの玉細工屋が嵌めなほしたものである。フェラリはこの輝めく寶石の一つ〳〵を取り出して、大きさや、光を調べてゐたが、その度毎に、驚きと、稱讚の聲を上げた。
「なあに、何でもありませんよ。しかし、一人の夫人を樂しませるにはこれで充分ですよ。これだけでも大した金ですからね。貴方が私のためにこれをロマニ伯爵夫人に屆けて下さつたら光榮と思ひますが——私の訪問の前觸たといつて下さい。きつと貴方はあの人に、どうせ夫の伯爵が生きてゐたつてこれは貴女のものになるのだと說き伏せて下さるだらうと思ひます。本當にこれはあの女の財產です。ですから拒絕なさるわけはないのです。」
フェラリはおど〳〵しながら私の顏をぢつと見据ゑた。「どうしても訪ねて上げなくてはなりません。貴方がいらつしやるのを待ち受けてゐるのですから？」
「どうも貴方は大分御熱心のやうだが、何か理由があるんですか？」
「そりやもう、こんな立派なものを下された後で、貴方がお會ひにならなければ夫人は當惑するでせう。それに確にお會ひ出來ると信じなければ、あの女だつて矢鱈にお受けはしますまい。」
「いや、そりや大丈夫ですよ！　兎に角そのうちに御得心のゆくやうにしませう。數日のうちに伺ふとあの夫人に仰有つて下さい。それに貴方が强ひて私を會はせたいと仰有るなら喜んで貴方の申受に應じませう！」

彼は嬉しかつたと見えて私の手を慇懃に掴んだ。

「さういふお話なら、喜んでその寶石を戴いて參りませう。もう一言いつておきますが、伯爵、實際、このくらゐの寶石をこなせる美人はこの世界中にもう一人とはありませんよ。全くあの美しさは大したもんです。」

「さうでせうな。兎に角貴方の言葉を信じます。私には女の善し惡しが分らないのです。偖て、一寸私を一人にしておいて戴きたいとお賴みしても失禮な奴だとお思ひにならないで下さい。三時と四時の間に貴方の畫室にお伺ひします。」

彼は早速立上つて別れを告げた。私は、その槲の寶石箱を皮の嚢に入れて鍵をすると、その鍵と一緒に彼に手渡した。彼はくど〳〵とお世辭やら感謝やらを述べた。實際、阿諛といつてよい類なのだ。これがこの男の缺點の一つである。しかし、この缺點は昔の私には少しも氣がつかなかつた。一寸うまいことをいつてやると直ぐ追從者になる。殊に相手が金持だとそれが甚い。昔この男と友達同志であつた頃には、この男こそこんな卑しさから超越してゐると思つてゐた。いや、それどころか、僞善なんて頭から輕蔑する男らしい獨立精神のある男かと思つてゐた。私は嘗てはあんなに親しかつた、貴かつた人間にすつかり裏切られたのだ。夢を見てゐるのはよいが、その夢を破られるの怖しい。その朝、私の昔の友人が手を握つて別れを告げた時に私はそんなことを考へてゐた。若し昔のやうになれたらどんなによかつたらう！　私は扉を開けて彼が妻のところへの寶石箱を手にしながら

出ていくのを見送つた。最後に簡單な挨拶を告げた時に私の心にあの有名な「トリストラムとマーク王」といふ話を思ひ出してゐた。あのギドーはトリストラムのやうに、嬥てあの昔噺のイヴールトのやうに綺麗で不貞な女の首の周圍に寶石だらけの首飾を卷きつけるだらう。すればこの私はさしづめ、たばかられたマーク王である。私も知つてゐる——私はフェラリが行つてから一時間といふもの椅子に坐つて、復讐の計畫について思ひを凝らしてゐた。私はこれから、いろんなことをしなければならない。先づ、ナポリで自分を非常に偉いと思はせなければならない。高貴な家庭に私の手紙と名刺を書き送つた。これは私の計畫の第一歩である。私はまた小姓も傭入れた。これはビンツェンツォ・ラランマといふ名前の、靜かな落着いたタスカン人である。非常な訓練を積んだよく出來た男で、決して二度聞きをしない。無駄話をしない。いつも默々として私に仕へる。なまぢつか名譽や稱號を追つてゐるものに較べればはるかに紳士らしい男である。命じられたことは直にやつてのける。どんな些細なことでもそれが私の喜びになるやうなことならなんでもやる。この男といろ〳〵と手筈を定めたり、商業上の用件に係つてゐるうちに約束の時間になつたので、私はフェラリの畫室に向つて歩いて行つた。私は昔からその畫室をよく知つてゐた。彼が名刺の上に書いた住所書なんか見る必要はない。登り坂になつた道の頂上に位置を占めた奇妙な作り方の小さな家だつた——其處の窓からは廣々としたナポリ灣や、その周圍の景色が眺められた。私は結婚する前によくそこに行つて好きな本を讀んだり、フェラリの飾らない雄大な風景畫や、人物の繪（私は心よくかういふ繪が出來上ると

直ぐ買つてやつた）を眺めながら樂しい日を送つたこともあつた。素馨の生ひ茂つてゐる門は私の眼には實に不思議なほど懐しく思はれた。玄關のベルを押して、その細い音を聞いた時には過去に對する胸の張り裂けるやうな哀惜の念が起つてくるのであつた。フェラリ自身が大急ぎでやつて來て扉を開けてくれた。彼は興奮して顏を輝かしてゐた。

「お入り下さい。どうか！」と彼は溢れるやうな愛嬌でいつた、「大分散らかつておりますが、しかし、お許し下さい。何しろ隨分長い間訪ねて下さるものがなかつたものですから。足もとにお氣をつけて！　伯爵、少し暗いもんですから――この角のところでよく轉ぶ方があるのです。」

かう彼は賑やかに喋りながら私を案内して短い狹い階段を上ると、いつでも彼が仕事をしてゐる明るい廣々とした部屋に通した。直ぐ氣づいたことだが、全くひどく散らかしてあつた。私を迎へるといふので、それでも凝つた風に家具を竝べたつもりだらうが、どうしたつてこれでは長い間家をあけた人の部屋だ。テーブルの上には數奇を凝らした大きな花瓶が立つてゐた。私は直ぐにそこに挿してある花が妻の手になつたものだと感じた。次に、今別に何も新しい仕事をやつてゐない昔のまゝの畫きかけの繪がそこ〻にあるのを認めた。私はそこにあつた安樂椅子を腰を下すと、この裏切者の顏を靜かにぢつと眺めてゐた。今彼が着てゐるのは黑い服で、今朝彼が來た時着てゐたのとは違つた天絨鹿の上つ張りであつた。彼のボタンホールには白の棒が挿してあつた。彼の顏は靑かつたが、眼は不思議にギラ〳〵光つてゐた。、兎に角これは彼の容貌のうちで一番綺麗だつた。この男の容貌

の美しさを見たゞけで、馬鹿な浮氣な女たちが引きつけられるのも無理はないと思はれた。さう思つたので、

「貴方は職業が藝術家であるばかりでなく容貌に於いてもさうです。」

彼は一寸はにかんで笑つた。

「なか〳〵お口がお上手ですな、」と得意氣に答へて、「だが、それは貴方のお世辭だといふことを知つてゐます。ところで、忘れないうちに申しておきますが、例の用件は果しました。」

「あのロマニ伯爵夫人のことですか？」

「その通りです。あの、貴方がお贈りになつた素晴しい寶石を見た時のあの女の喜びや、驚きをと申したらよろしいでせう。心から滿足してゐる樣を見るのは實に綺麗なもんです。」

私は笑つた。

「さしづめ、あのファウストの中にあるマルゲリットと寶石の歌のやうなもんですか？」と私は一寸皮肉つて尋ねた。彼は肩を咬んで困つたやうな風をしてゐたが、嘘て、靜かに答へた。

「それは貴方のお考へ次第ですが。けれども、若し貴方が伯爵夫人をマルゲリットとお考へになるなら、寶石を與へた貴方はどうしたつてメフィーストフェレスでなくてはなりませんね。」

「すると貴方はファウストといふわけですか！」と私は陽氣にいつた。「そんならどうして吾々で少しばかり端役者を連れてオペラを始め、ナポリ中の人を驚かしてやらうと思はないんですか！　どう

です？　しかし、まあその話は止めませう。私は彼處にある畫架にかゝつてゐる繪が良いと思ひますね。もつと近くで見せてくれませんか？」

彼はそれを傍に持つて來た。陽の光を浴びた、目に立つ風景畫であつた。大したものではなかつたが、私は盛んに褒めたてゝ五〇〇法で買ふことにした。

それと同じやうなスケッチをその他四枚ほど見せられたがみんな買ふことにした。この賣買が始まつてゐるうちにフェラリはすつかり良い氣になつてしまつた。彼は私に上等な葡萄酒をすゝめて自分も一緒に呑んだ、そして盛んに喋りたてゝ私を面白がらせてくれた。しかしながらその話振りがいかに巧妙なものとはいへ、私の內心の喜びを感じさせるやうなものではなかつた。いや、今この二人の立つてゐるこの妙な位置のために私の殘酷な感情が興奮したまでの話である。それでも、私はこれ迄で幾度も聞いたことがある彼のいくつかの逸話を聞いてやつたり、喝采してやつたりした。その酒落も褒めた。そして心の中ではこの利己的な男が遂に全く自尊心を失つてしまつたのを見て愚しく思つた。彼は自分の本性をすつかり私の前にさらけ出した。私は彼の性質がどんなものだか知つた――それは、我儘、貪慾、好色、無情の混合物である。たゞ時々、人のよさや、同情を見せかけるやうなことがあるが、これは單に彼が若くて、健康であるといふ事實から來てゐるに過ぎない。それだけの話だ。私はこんな男を昔愛してゐたのだ。安つぽい酒場で喜ばれるやうな俗惡な男、いやらしいことをいつて喜んでゐる男、この出鱈目な頭の空虛な人間の肉の魂に對して、私はあんなにひたむきな

忠實な愛情を捧げてゐたのであらうか？　急に遠くから馬車の轍の音が聞えて來たので、二人の會話はとぎれた。その馬車は此方の道に上つてくるらしい――だん〳〵近づいて來る――この家の戸口で止つた。私はコップを脣にまで持つてゆきかゝつたフェラリの顏をぢつと見つめた。

「他の客人があるんですか？」と私が尋ねた。

彼は當惑して作り笑をしたが、大分慌ててゐるやうであつた。

「そんな筈はないんですけれど――」

ベルが鳴つた。辯明をしながらフェラリは急いで出迎へに行つた。私は椅子から飛び上つた……私には分つてゐた――誰が來たのかを感じたのだ。ぐつと努力して騷ぐ神經をおさへつけた。波打つ心臟をしづめた。黑眼鏡を更に眼に近づけてそこにすつくと立上つて待つてゐた。フェラリが階段を上つてくる音が聞える……その重い跫音と一緒に、もう一つの輕い跫音が……男はその連れに小聲で何か話してゐる、もう一秒……と、彼は急に畫室の扉を開けた。女王樣のお入りといふやうな敬々しさがその顏に見えた。絹ずれの音がする……周圍に良い香がする……それから――私は面と面とつき合はせてすつくと立上つた……私の妻と。

妻がどんなに美しく見えたことだらう！　私は初めてこの女を見た時と同じやうに、すつかり吾を忘れてたゞ眺めてゐるだけであつた。黑い服、ふさ〳〵とした毛髮、人形のやうな顏を覆うて後に垂れてゐる長い縮緬のヴェール、總て實際は悲しい喪服の服裝には違ひないが、却つてそのために彼女

の美しさは一段と輝を増してゐるのだ。眞に美しい後家さんではある！　最近に死んだ彼女の夫である私さへも、この美しい魅力だけには頭を下げる。彼女は今、一寸入口の敷居の上に立ちつくして、屑の邊に優しい微笑を泛べた。それからおず〳〵と私の顏を眺めて、極めて丁寧にいふのであつた。

「まさか私の間違ひではないと思ひますが、貴方樣はッェザーレ・オリーヴァ伯爵樣ではございませんか？」私は口をきかうとしたが駄目だつた、口は興奮で乾ききつて糊づけになつてゐる。激しい怒と絶望のために咽喉がふくれて痛むのだ。たゞ通り一邊に頭を下げただけでこの女の問に答へておいた。すると女は直ぐに前に出て、今までよく私が知つてゐる例の慰め顏でその兩手を前に出した。

「私がロマニ伯爵夫人でございますの。」と未だに微笑みつゞけながらいふ、「フェラリさんから貴方樣が今日の午後この畫室においでなさることを伺ひまして、どうかして貴方樣から戴いたあの高價な贈物のお禮を申し上げねばと思つたものですから、ぢつとしてゐられずにやつて參りました。あの寶石は眞に素晴しいものでございます。このお禮に何と申し上げてよいやら！」

私は彼女の兩手を掴むと、彼女の嵌めてゐた指環がその肉の中に痛くくひこむほどギュット握りしめたが、さすがに躾のよいこの女は叫び聲一つ立てなかつた。私は全く元氣をとりなほしたので、例の計畫の實行にとりかゝつたのである。

「どう致しまして、夫人。私こそお禮を申し上げるところです。あんなつまらないものを貰つていた

だきまして——あんな見たゞけのつまらないダイヤモンドが、貴女の今のお淋しい生活にお邪魔にならないと思つたゞけでも私は光榮と存じます。貴女の最近の御不幸に對して心から御同情申し上げます。御良人が生きておられたら、きつとあの品を貴女に贈物としてお上げになつたでせう。すればあの品々は貴女にとり、もつと嬉しいものとなつたに相違ありません。それを人もあらうに私のやうな下らない男の手からお受けになつたことは、私にしてみれば實際の滿足です。」

私がかう喋つてゆくうちに彼女の顏色が青くなつてきた。いくらか吃驚したやうだ。それからぬか私を見つめてゐる眼が熱氣を帶びてゐる。しかも、私は黑眼鏡越しに女の大きな黑い眼をぢつと見すゑてゐた。彼女は靜かにその小さな指を私の手からほぐしていつた。私が彼女のために安樂椅子をすゝめると、彼女は昔ながらの屈託のない氣樂さで、我儘な皇后とか、サルタンの愛妾の氣樂さで深々と身をそれに埋めたが、その間は絶えず私の顏を見つめてゐた。一方フェラリは更に酒を運ぶのに忙しさうだつたが、軈て今度は果物と菓子の皿を持つてきた。兎に角彼はこの招待の主人であるといふのでいろ〳〵と立ち働いてゐた。

「ハ、、、、！　とう〳〵貴方は罠にかゝりましたね。」と彼が愉快さうにいつた。「私と夫人とで貴方を吃驚させてやらうと計畫したのです。いつ貴方が伯爵夫人のところへおいでになるか知れたものでないし、夫人の方でも貴方に御禮をいふまでは心が落著かないといふので到頭こんなことを揑ち上げたのです。なんて巧いぢやありませんか？　さて伯爵、夫人の美しいのには貴方も驚かれたでせう。

「勿論です、」と私は一寸皮肉まじりに答へた、「この若さ、この美しさの前に出たら誰だつて心を奪はれてしまふのでせうよ！　それにもう一つ、私には自慢があります。何故つて、今まだ當然悲みの中にゐられる伯爵夫人から態々御面會をして下さるなんて。」

この言葉を聞くと妻の顏は急にものわびしげな悲さを帶びて、いかにも同情をこめるやうな優しさを香はせた。「まあ、なんて可哀さうな、不幸なファビオでせう。あの人がこゝにゐて貴方樣にお禮を申し上げたらどんなに嬉しいでございませう。どんなに喜んで自分のお父樣のお友達をお迎へなすつたでせう――あの人はお父樣を非常に尊敬してゐました！　私はどうしてもあの人が死んだとは思ひません。本當に突然でした。本當に恐ろしいことでした！　私はもうこの激しい悲みに打勝つ日はないでせう！」實際、彼女の眼にも涙が涌いてきた――女なんていふものは自由自在に泣ける動物だから、それを知つてゐる私には一寸も驚かなかつた。一寸した練習があれば、こんなことは誰だつて出來る。ところが男はその原因が分らないものだから直ちに馬鹿者になつてしまふ。女が美しく、しをらしいところを見せれば、これはひどい悲みに違ひないなどと考へてしまふ。さうしてはどうかしてこの女の悲みを慰めてやりたいと男達はやつ氣になつて藻掻くのであるが、女の悲みといふものは總て虛榮と、我儘から出てゐるのだ。私は直ぐに妻からフェラリの方へと眼を移した。彼は咳をしていかにも困つてゐるやうな顏つきだつた――がこの男、妻なんぞよりは役者が一枚下だ。この二人を見てゐるうちに私の心の中には輕蔑とも嫌惡とも名のつかない感情が起つてきた。

「夫人、そんなにお嘆きになるものではありません。」と私は冷たくいふ、「貴女ぐらゐお若く美しい方ならばいつかその心の痛みも治つてしまふでせう。私としたところで貴女の御良人の亡くなられたことは非常に殘念だと思つてゐます。だが、さうお悲みになるにはあたりません。そんなお悲みはどんなに深いものであつても却つて無駄になるばかりです。まだ〳〵先がおありになる身ではありませんか。貴女に相應しい幸福な未來がきつとこの先にありますよ！」

彼女はにこりとした。そして涙の滴は恰度日光に當つた朝の露のやうに脆くも消え失せた。

「貴方樣の御親切に對しては何と申し上げてよいか分りません、伯爵樣。ですが私が幸福になれるのもなれないのも貴方樣が宅へ御訪問下さるかどうかに懸つてゐるのでございます。本當においでになりませんこと？　家中でおもてなしいたします。」

私は躊躇つた。フェラリは愉快氣な顏をしてゐる。

「夫人は、貴方が女性との交際を嫌つてゐることを御存じないのです。伯爵。」と彼はいつたが、その言葉にはいくらか私を馬鹿にしてゐるやうな調子がある。私は何氣なく彼の顏を一寸見てから、妻の方に話しかけた。「フェラリ君のいふ通りです。」私は少し前こゞみになつて低い聲で、「成程、私はつまらない女の人とは交際出來ないやうな不調法者ですが、しかし天使の微笑に對しては全く無能力です。」

私は非常に敬々しく頭を下げた。妻はすつかり自分の美しさに自己惚れて到頭自分が勝つたといふ

意識をその顔に明るく現はした。私の手から盃をとると、その輝く愛嬌のある眼で私を眺めた。
「本當にお美しいお言葉でございます。では、明日おいでで下さいませうね。天使といふものは極く柔順なものでございます。ギ――いや、フェラリさん。貴方は伯爵様のお伴をして屋敷へ御案内して戴けませんか？」フェラリはいくらか堅くなつて頭を下げた。聊か不愉快氣である、「矢張り僕なんぞのお勸めよりも貴女のお口の方がオリーヴァ伯爵には效果がありましたね。確に伯爵は僕にとつては苦手でした。」彼女はこの嫌味のある言葉を聞いて陽氣に笑つた。「勿論ですとも！　矢張りこんなことは女に限りますわ――さうぢやないでせうか、伯爵？」かういつて彼女は私の顏を見上げた、その眼つきには愉快さと悪意とがまぢり合つてゐた。こんな悪戯が彼女は好きなのだ。ギドーが氣を悪くしたのを見て、もつとこの男を苦めてやらうといふのが彼女の悪い興味であつた。
「さあ、何と申し上げてよいやら、夫人。」と私は答へた。「どうも女の方のことは分らないので、少し教育をして貰ふ必要があります。だが、貴女の仰有ることはどんなものでも正しいのだと本能的に感じてしまふとでも申しませうか……兎に角貴女の眼を見てゐると、どんなきかない者でも納得させるところがありますよ！」
彼女はまたも素晴しく光る眼で、鋭い誘惑的な眼ざしを私に投げた――軈て、歸るといふので立ち上つた。「全く天使の訪問ですな。」と私は輕くいふ、「お美しいが、短い！」
「では、明日お逢ひします。」と、にこ〳〵しながら、彼女が答へた。「確にお約束しましたわね。き

つとですよ。午後になればどんなにお早くおいでになつても構ひませんね。その時分には娘のステラも御覽になつて戴けると思ひます。あれは死んだファビオにそつくりでございます。ではまた明日、左樣なら！」
彼女が手を伸した。私はそれに接吻した。その手をひつこます時に彼女は笑ひながら、私の顏を、といふよりは私の眼鏡を見つめながら、
「眼がお悪いのですか？」
「あゝ夫人、ひどく弱いんでしてね！　光がとても辛いんです。しかし兎や角いつたところで、老人にはこれがつきものなんですから仕方がありませんよ。」
「でも、さうお年寄にはお見えになりませんね。」と同情有り氣にいつて、女の敏感な眼でどんなに裝つても隱せない私のすべ〳〵した皮膚を見てとつた。でも私はさも驚いたやうに、
「年をとつてゐませんて！　こんなに白髮があつてもですか？」
「お若い方にだつて大抵ありますわ。それでなくとも中年の方、世間でいふ壯年の方々にはよくお見受けします。でも貴方のは本當にお似合ひです。」
彼女は最後に別れの挨拶をしてこの部屋を去つた。私とフェラリとがその後からついて階下の彼女の馬車が待つてゐるところに急いだ――その二頭の栗色の小馬のついた馬車は私が昔妻の誕生日に贈つたものである。彼女が馬車の踏段に足をかけようとした折に先づフェラリが腕を貸した。ところが

彼女はその腕を輕い冗談口をたゝきながら拂ひのけて、私の手を借りてしまつた。そこで私は彼女を中に入れると刺繍のした膝卷で彼女の足の周圍にかけてやつた。彼女は自分を見送つて、午後の日光に帽子も被らずに立つてゐる二人の男に愉快な會釋をした。馬が駈足で走り出した。豪奢な乘物は瞬間に見えなくなつてしまつた。もう車輪の殘して行つた砂煙しか見えなくなつた時に、私は初めて自分の友人の方に向いた。彼の顏は馬鹿に眞面目でしかめつ面をしてゐる。氣にしてゐるな！　そろそろ嫉妬が始つたらしい。あの浮氣な私の妻が彼の腕を退けて私の腕を借りたといふ些細なことが大分この男の自尊心を傷けたらしい。あゝ、男といふものは何といふ意氣地なしであらう。いろ〳〵な才能を持ちながら、不滅の運命を擔ひながら、總ての男といふ男は目前の征服すべき世界を忘れて、僅か一婦人の一喜一憂に左右される。破滅の底に沈んでいく。自分の姿を氣にいつた光の中で鏡に映して見ることよりしか能のない女のために！　私はフェラリをつく〴〵見てゐるうちに、自分の復讐が段違ひに容易なものであることが分つた。彼は軈て不愉快な物想ひから吾に返つてつくり笑をして見せた。私は煙草入れを差出した。

「何を考へてゐるんですね、」と笑ひながら尋ねた、「神々にかしづいてゐるヒーヴィーのことですか。それとも、波の間から眞裸で立上つたヴィーナスのことですか？　どつちです。どつちでもないんですか？　成程、女の笑ひ顏も有難いが、良い煙草だつてまんざらぢやありません、」彼は葉卷を一本とると火をつけたが、默つてゐた。「どうも元氣がありませんね。」私は陽氣にいつて、彼の

腕に私の腕を通すと畫室の前の芝生の上をあちこちと歩き廻つた。「何でも、人間の智慧といふものは明るい眼の光に會ふと鋭くなるさうですな。ところで貴方はその反對ぢやありませんか？　多分貴方の氣持は言葉に現はせないほど深いんでせう？　まあさうだとしても別に不思議はありませんよ。實際、あの夫人は素晴しく綺麗ですからな。」

彼はちらりと私を眺めた。

「私もさういつたでせう？　この世の人間の中であの女くらゐ完全な綺麗な人はありません！　貴方だつて伯爵、女に對して皮肉な考へを持つていらつしゃる貴方だつて、あの女にすつかり心を奪はれたんですもの。僕はこの眼でそれを見たんです！」

私はプツト靜かに煙を吐くと、深い考へに耽つてゐるやうな顏つきをして見せた。

「私がですか？」到頭私はさも〳〵吃驚したやうにいつた。「本當に心を奪はれましたかな？　さうは思ひませんがな。だが、あんな美しい夫人を見たことは初めてだといふことだけは確です。」

彼は急に歩を止めて、私から自分の腕をとき離すと、ぢつと私の顏を見つめて、念をおすやうに、

「私はさういつた筈です、私が貴方に申し上げたことを思ひ出して御覽なさい。だが、今度は貴方に御忠告をお與へする番です。」

「私に忠告ですつて！　何のですか？　誰に對してゞすか？　まさか貴方があんなに御紹介したがつていらしたロマニ伯爵夫人ぢやないでせうな？　あの女は別に病氣もなし、それかといつて人に傳染

やうな持病もないぢやありませんか？　生命や、五體に危險だといふわけもないでせう？」
私が自分の身體の安全について、しかも、いくらか滑稽な心配顔でいつたので、フェラリは笑つたが、いくらか安心したやうな面持であつた。
「いや、さういふ意味でいつたんではないのです。一體にあの女は自然と人を引きつけるやうな態度をとるもんですから、自分では何とも思つてゐない時でも、男の方ではすつかりこれを感違ひして、意味深重に思ひこんでしまふのです。そして、自分こそ彼女の思召しがあるんだらうといふ大それた誤解を抱くんですが、それに――」
私はワットばかりに笑ひ出して、少し亂暴に彼の肩をたゝいた、「貴方の御忠告は全く不必要ですよ。お友達、ね、假りにもこの私がそんなに崇敬の的になつてゐる氣まぐれな夫人の氣を引くなんて考へられないぢやありませんか？　年も年だが、第一私の考へは御存じの通りでせう。成程、あの女の、または貴方の親友ぐらゐには良いかも知れませんが。情人なんて眞平です。いやはや！」
彼はぢつと私を見守りつゞけてゐた。そして半分は自分にいつて聞かせるやうに、半分は私に聞えるやうに低い聲で、「夫人は、貴方が年寄には見えないといつてゐましたつけね。」
「あゝ、そんなお世辭をいつてゐましたね。」私は大分彼があのことを氣にしてゐるのが愉快になつてさう答へた。「そりや勿論、あの女の親切心からですよ。考へて御覽なさい、この見どころのない老耄を貴方みたいな若い人と較べたら女の眼にどう映るものか！」

彼は急に赧くなつた。そして少し辯解するやうな口吻で、
「少し私は疑り深かつたかも知れません。どうも濟みませんでした。伯爵夫人は私にとつては妹みたいなもんです。死んだ友達のファビオが、三人の間に兄弟のやうな愛情を作つてしまつたもんですから。あの男が死んだ今となつては夫人を助けていくのが、私の唯一の務なんです。未だ若くて、呑氣で、落著きがないんですから――さうお考へになりませんか？」
私は彼のいふことがすつかり呑みこめたので頷いた。彼は自分で占領してしまつた土地なら一人だつて他の密獵者の侵入を許さないのであつた。成程、彼にしてみれば、さうかも知れない。しかし、本來その土地の所有者は、この私なのだ。だから、私は私で別な考へを持つてゐた。さうは心に想つてゐたが、別に口にも出さず、それよりも、この話にいくらか飽きたといふやうな顏を見せたので、今度はフェラリの方から愉快になりだし、先刻のやうに愛想の良い友達となつた。翌日の午後、私がロマニ家に訪問する時刻を決めた後で、今度はナポリの町、その住民、その生活などについていろいろと話を交へた。私は時々その話のうちに言葉を挾んで、この町に滿ち滿ちてゐる不道德さ、頽廢さについて質問した。どうかしてこの男に總てを喋らせ、この男の性格をもつとよく知つておきたかつたので。尤も大概の見當はついてゐたが。
彼は、「全く、伯爵。」と輕く笑ひながら口をきつた。彼のくはへてゐた葉巻の殘りが綠の草の間に、小さな赤ランプのやうに落ちていくのを見守りながら、「しかし、不道德といふのは結局なんで

せうか？　たゞ人間の意見ではないでせうか？　例へば夫婦間の眞實といふありふれた道德觀を考へて御覽なさい。あれだつて遂にはひどい目に會ふのが落でせうよ！　一體一人の男が何の理由があつて他の二十人の女に相當する愛情を抱きながら、一人の女に縛られなければならないでせうか？　男が若い時代に相手として選んだ綺麗な、細つそりとしてた娘が、その男が壯年に達する時分にはもう太つちよな、みつともない赧ら顏の女になつてしまふのです。しかもこの女が生きてゐる限りは法律に依つて男の愛情の全部はたつた一點の他には注ぐことは許されないのです。いつでも同じ單調な、面白味のない岸邊にしか！　法律は不合理です。だが、みんながその存在を許してゐます。しかしこれはどうしたつて我々の手で破壞しなければなりません。吾々がそんなことをしようものなら社會は恐怖に脅えたやうな風をよそほひます――さうです。だが、それはさういふ風をするだけです。しかもこのことはナポリでも、ロンドンでも變りありません。吾々のナポリでは實際、平然としかも白日堂々と罪を犯すことが出來るのです。ロンドンでは出來るだけそれを隱して、みんなが君子振らうとするといふ違ひはありますが、これは大きなペてんです。あのパリサイ人とパブリカンのたとへ話が現代にも一杯です。」

「いや、全部がさうだとは思はない。」と私が口を挾んだ。「といふのは、パブリカンは後悔をするが、ナポリ人はそんなことはしない。」

「どうして後悔する必要がありますか？」と笑ひながらフェラリが尋ねた。「一體後悔したところで

何の利益がありますか？　恩償がつくとでもいふのですか？　吾々の懺悔に依つて誰かの心がなだめられるといふのですか？　神ですか？　伯爵、現在の世の中では神を信じてゐるものは極く僅かです。創造なんていふものは自然の戲にすぎません。吾々が生きてゐる間だけ樂しめばそれに越したことはありません。しかも生命は短いのです。死んでしまへば總ては亡くなるのです。」

「それが貴方の信條ですか？」と私が尋ねた。

「さうです、ソロモンがいつてゐるではありませんか。『食ひ、呑みて樂しめよ。明日は生命のなきものぞ』これがナポリ全體の信條です。いや、伊太利全體の信條です。勿論つまらない連中は未だに馬鹿々々しい迷信沙汰に迷つてゐますが、教育ある人間だつたらそんな古い考へは、とうに蹴飛ばしてゐます。」

「貴方のお考へが本當かも知れません。」と私は落着いて答へた。別にこの男と爭ひたくはなかつた。たゞ輕薄な男の心の底を見拔いて、この男の馬鹿さかげんが知り盡したかつたからである。「現代の文明に依ればそれが吾々の便宜になる時の他を除いては、道德的でなければならないといふ必要がないのです。たゞ生活を愉快にしてゆく上に肝腎なことは、成るたけ世間に惡評されないことです。」

「さうですとも！」とフェラリが贊成した。「しかも、それは易いことです。例へば女の名聲といふことを考へて御覽なさい。貴方も御存じの通り婚期を控へた女の場合にはいろ〳〵と問題になるのですが、その女が結婚してしまふと後は自由です。さうすれば幾人戀人が出來ても構ひませんし、その

女がやり手だつたらそれは少しぐらゐ馬鹿でも良いのです。それだつて他に情事を持つとしたら、妻たるものもやつたとて構はないぢやありませんか？　尤も、女の中には氣のきかない連中があつて、餘りさういふことに用心をしすぎるために、自分から世間の惡評に晒してしまふ者もあります。さうすると泥をぬられた夫（この夫とて今まで注意をして自分の情事を隱してきたのですが）今更總てを知つたやうな顔をします。さあこゝです、騷ぎが始まります。犬も食はないといふ騷ぎがね。だが、利口な女だつたら自分の好き勝手に世間の口を閉すことが出來るんですから。」

實に呆れかへつた野郎である！　私は侮蔑の眼ざしを露骨にしながら、この綺麗なノッペリした男を見つめてゐた。この男はこれまでの教育と教養とをいゝことにして最も陰險な惡黨になり下つてゐる。こんな下劣な男に對しては最早社會の諚などゝいふものは全然役に立たないのだ。私はたゞ、

「貴方はこの世間について大分詳しいやうですな。實に恐れ入りました！　貴方のお言葉からすると、結婚上のごたゝにには何の同情も持つてゐないやうですが？」

「少しも持つてはゐません。實際、下らなく、馬鹿々々しいもんです。たゞこんな場合に所謂泥をぬられた夫だけがいゝ面の皮ですが。」

「いつでもさうですか？」と私は好奇心に眼を輝かせて尋ねた。

「まあ、大概さうですな。だつて、どうしてこの腹いせに仕返しをすると思ひますか？　その男はただ妻の情人に決鬪を申込むだけです。で、決鬪がある。しかも、兩方とも殺されないで濟む。二人は

一寸ぐらゐの傷でことが濟みます。二人でコーヒを呑む。しかも、將來は二人でその女の愛を同等に貪らうといふ約束さへするのです。」

「なあるほど！」と私は無理に笑ひ顔で、だが、內心ではこの男の鼻もちならないお喋りに愛想をつかしながら叫んだ。「それが今流行の復讐法ですか？」

「これが上品な遺方です。たゞ、ろくでもない連中は心臟の血を見なければをさまらないといひますがね。」

ろくでもない連中！　私は彼の顏をぢつと見つめた。彼のにこ〳〵した顏はあけつぱなしな大膽な色を泛べてゐる。明らかにこの男は自分の意見を少しも恥しいとは思つてゐない。いや、それどころか得意になつてゐるらしい。私は折しも暖かい日光に照し出された彼の若々しい、男らしい立姿を見ると、アポロを思ひ出した。だが、心の中はシリーナスだ。さうやつて見てゐるうちに私の心はいつかちく〳〵と痛んできた。こんな男は早く殺してしまつた方がいゝ。さうすればこの世界からたつた一人でも惡人が少くなつたことになるのだ。恐ろしい考へが、冷たい風のやうに私の頭をかすめた。身體中の神經が震へた。かうした私の氣分が顏に現はれたのであらうか、フェラリがいふ、

「お疲れですか、伯爵？　どこかお惡いのですか？　さあ、私の手をおとりになつて！」

彼はかういひながら手を伸したが、私は靜かにそれを拂ひのけた。

「いゝえ、何でもありません。たゞこの頃の病氣がまだすつかり治つてゐないもんですから、ちよい

ちよい眩暈があるんです。」こゝで私は時計を見た。大分晝をすぎてゐる。
「甚だなんですが、もうお暇したいと思ひます。先刻私が選んだ貴方の繪ですが、態々貴方に送つて貰ふのは御面倒ですから、夕方召使をよこす心算です。」
「少しも面倒ではありません。」とフェラリは始めたが、私はそれを引きとつて、「いや、濟みませんが、このことは私が自分でやりたいと思ひますから、どうも至つて我儘者でして、」彼は頭を下げて笑つた。私の嫌つてゐる追從者の笑ひである。盛んに私の旅館まで送つて來ようといつたが、私はその親切さを感謝しながら拒つた。もう大分この男を知りつくした。この男と一緒にゐるのは御免だ。早く一人になりたい。もう少しでも、この男とゐやうものなら屹度この男の首に飛びついて直に殺してしまつたであらう。偖て、私は親しげな、しかし、充分に禮儀をこめた挨拶をして別れを告げた。彼は私が彼の繪を買つてやつたといふので盛んにお世辭を竝べたてた。だが私はその言葉を耳に入らないやうな風をして、私の方こそ喜ばしい。貴方のやうな天才の作品を手にするなんて幸福この上ないといつてやると、彼は恰度魚が餌を呑むやうに私の世辭をすつかり呑みこんだ。かうして吾々二人は最上の言葉を使ひながら別れたのである。彼は私がゆつくりと、老人の落着を以て坂道を下りてゆくまで戸口で見送つてゐたが、私は彼の姿が見えなくなると、急に歩調を早めた。といふのは、私の心の中で爭つてゐる澤山の激しい感情がどうしても私に落着を與へなかつたからだ。私が旅館の自分の部屋に入つた時に第一に眼についたのは、鍍金したきぬやなぎの籠であつた。それは眼につくやう

に中央のテーブルの上に置かれてあつて、中には果物や花が一杯に入つてゐる。
私は直に小姓を呼んだ。「誰が贈つてきたのだ？」と尋ねると、「ロマニ伯爵の奥様です。」とビンツェンツオが鄭重に答へた。「それに名刺が附いてをりますが、御覽になつては、旦那様。」
見ると妻の名刺であつた。その上に優しい女文字で「明日の伯爵様のおいでをお待ちしてゐます。」と書いてある。
急に私はカッとなつた。私はその華奢な紙切れを握りつぶすと傍に拋り投げた。果物と花の强烈な香が混り合つて私の鼻をつく、
「私はこんな下らんものは要らん。」とビンツェンツオの方に腹を立て、奴鳴りつけた。「これをこゝの亭主の娘さんにでもやりなさい。あの娘は未だほんの子供だから、こんなものが好きだ。さあ、直ぐ持つて行け。」ビンツェンツオは命令通りにその籠を持上げると部屋の外に持ち運んだ。あの香や色が私の眼から消えてしまふとほつとした。この私が自分の庭から出來たものを贈物に貰ふなんて、私は腹がたつやら、失望やらで、どつかと安樂椅子に腰を下すと——軈て大聲で笑つた。愈々あの女は俺との勝負を始めたな！　あの女は俺をたゞ一塊の金持としか知らないで興味を引かれたのだ。あの女にとつては金が總てだ、永久に金だ、金さへあればどんな豪慢面も膝を屈する。頑固者も迫從者に變る。あの黄金の光を見れば世界中が奴隷になるのだ。吹けば飛ぶやうな女の愛さへ、いつまでもその膝下に抑へつけておくことが出來るのだ。惚れ〴〵するやうな女の眞赤な脣から接吻が盜め

やうといふものだ！　光の良いダイヤモンドをやつて見給へ。石が大きければ大きいほど、接吻も長い。ダイヤモンドをやればやるほど、存分の抱擁が得られるのだ。舞臺に現れた一番新しい、一番可愛らしい女の人形のために、家名を傷つけ、自分をさへも、もちくづす放蕩者はよくこのことを知つてゐる。　私は最前妻が、「貴方はお年寄りには見えなくつてよ！」といつた時のものうい、心を奪ふやうな面ざしを思ひ出して、にが〳〵しく笑つた。これまであの澄んだ眼の光と影を得るために隨分と骨を折つて苦しんだものだつた。今や私の復讐の道はたつた一本の眞直ぐなスベ〳〵とした線になつた。私は心の中でもつと困難があつていゝ、もつと障碍物があつてもいゝと望んでゐたのに、今はもうそんなものは一つもない。あの二人の裏切者はぢり〳〵と私のかけた罠に近よつてくるのだ。私は冷たい心の中で幾度も〳〵尋ねた。あの二人を憐れんでやる必要があるだらうか？　あの二人の性格に何かいゝところがあるだらうか？　が、その度に答はいつでも否！　であつた。心の心まで僞善で凝つてゐる。いや、あの二人がお互ひに感じ合つてゐる罪深い愛情さへ、たゞ肉體の歡樂といふ以外には何等の眞劍さもないのだ。あのニーナは嘗て私が聞いてゐるとも知らずに並樹路で男と相引をしてゐた時、彼女が現在眼の前にゐる愛人さへ飽きるかも知れないと、ほのめかしてゐたのではないか？　しかも、男の方では今の先刻、私に生涯一人の女に眞實をつくすなんて馬鹿げてゐると、こともなげに公言してゐたではないか？　實際、あの二人は將來の運命に相應しいのだ。成程、あのギドーのやうな男、妻のやうな女、あゝいつた連中は、この社會にはあたりまへかも知れない。しかしな

から、それだからといつて、そのまゝにして置くわけにはゆかない。他の害毒を流す人間と一緒に葬るべきである。

第十六章

「ロマニ家へようこそいらつしやいました」といふ言葉が私の耳に聞えた。私は夢を見てゐるのであらうか、それとも、私自身の家の庭のなめらかな青い芝生の上に立つて、笑ひながら私に慇懃な挨拶を交してゐる妻に機械的に會釋してゐるのであらうか。一寸の間、頭が呆然としてしまつた。懷しい薔薇と、素馨のからまつた露臺が目前でふう〳〵搖れてゐる。堂々とした邸宅、子供時代の家庭、昔の幸福な日の思ひ出、さういつたものが今にも落ちてくるばかりに空中に搖れ出した。咽喉がつまるやうな苦しい氣持であつた……どんな氣丈な人でも時には涙を流すことがある。涙が心臟を破つた血のやうに流れ出る。今にも泣き出しさうである。あゝ、懷しい吾が家！　何といふ美しさだ。何といふ淋しさだ！　すつかり荒廢に歸してしまつたに違ひないのだ——こゝの主人のやうに安息と名譽のうちに亡びてしまつたに違ひない。だが、こゝの主人といふのは誰なのだ？　私はフト傍に立つてゐるフェラリを眺めた。この男ぢやない——斷じてこの男ぢやない。こんな男に主人になられては堪らない。だが、本當の主人といふのは誰なのだ。私は全くの他國人である。此處は初めての筈だ。